◆今回私は人生で初めて中国を訪問し、1週間という比較的長い期間で様々な経験をすることができ、良い意味でも悪い意味でも衝撃を受けました。

まず悪いと感じた点の1つ目が、交通マナーの悪さです。歩行者は赤信号でも横断歩道を渡 ったり、自動車が通っていない隙を見て渡ろうとしたり、時には自動車のすれすれまで迫っ ていることもありました。バスから見ていて常に冷や冷やしていたのを覚えています。自動 車においても割り込みが多くクラクションが頻繁に鳴っていました。2つ目として、トイレ 事情はやはり日本人として我慢しがたいものでした。洋式が中国では汚いものとされてい るためホテルや空港以外では和式が主流でしたが、個室それぞれにペーパーが常備されて いないことが不便で、清潔とはいえないところも多々ありました。せっかく歴史ある素晴ら しい観光地なのにそういったマイナス面があると勿体ないように感じます。大学のトイレ も掃除が行き届いていないところがあり学生のモチベーションダウンに繋がると思いまし た。3つ目が、貧富の差を目の当たりにしたことです。1日目の北京で歩道を歩いていると き、物売りや物乞いがいて衝撃を受けました。警察が補導や職務質問をし、このような人々 を統制する余裕は無いのかと疑問に思いました。高層ビルや立派な建物が立ち並ぶ市内と は反対にこのような状況があるのだととても印象に残っています。4 つ目は、日本に比べて 働く人々の「お客様への配慮」が少ないという点です。まず空港では警備員が私たちの目の 届く範囲にいるにも関わらず平然とスマートフォンを操作していたり、ジュースの販売員 が素早いとは言えないスピードで飲み物を用意していたり、お釣りを投げるように渡され たりと、普段日本ではクレームを付けられるような行動が多く見られたのです。 西安外国語 大学でパートナーと話したところ、「日本の店員はいつも笑顔でいるがそれだと絶対に本人 が疲れてしまう。中国の店員はそのようなことは滅多にせず、洋服屋で選ぶのが遅いときな どはむしろ店員に怒られるときがある。」などと言っていました。「おもてなしの心」で有名 な日本のサービスは、中国人観光客にとってどのように響くのか疑問に思うようになりま

以上に挙げたようにマイナスな面もありますが、良い面も多々見つけることができ、充実した時間を過ごすこともできました。まず1つ目は、大学生との交流です。国際関係学院の学生たちは高学歴ということもあり日本語が達者で真面目な印象を受けました。皆日本での留学やインターンシップの経験があり自ら肌で日本を感じたことがある方たちで、日本に対する理解が深いように思いました。西安外国語大学の学生は女の子が大半でしたが、ファッショナブルな方たちばかりで日本の大学と近いものを感じました。パートナーの方は今年京都に留学するそうで、日本に行ったらメイクを勉強すると言っていて、自分と同じように年頃の女の子だと感じたのを覚えています。彼女と話すことで中国の現状について沢山知ることができました。服に関しては、インターネットで買うことが多く、地元では気に入るものが無いため絶対に買わないそうです。中国ではアパレル産業が発達していないようで、彼女のように海外のものをネットショッピングするか海外の高級ブランドを着る人が多いようで、後者の場合は一人っ子の特権だと感じ羨ましさも感じます。訪中団の皆が驚いたであろう中国の学生がアルバイトをしないという事実についてですが、勉強や他のこ

とに時間を割ける点では良さもありますが、個人的にはアルバイトによる社会勉強は非常に為になるので、是非日本に留学に来た際には経験してほしいと思いました。良い面として2つ目に挙げられるのが、歴史的建造物や景色の壮大さと美しさです。私の印象に残っているのは北京の故宮と頤和園、そして敦煌の鳴沙山です。故宮も頤和園も沢山歩いて疲れてしまうほど広く壮大でした。天井や柱に施された絵画は緻密なもので、長い間保存されてきたことに感銘を受けました。鳴沙山は人生初の砂漠で、皆で一生懸命登ったことで仲も深まり、頂上から見る景色がとても広く、改めて中国の国土の広さを実感し非常に素敵な思い出になりました。

訪中前には中国は経済発展が進んでいると聞いていて高層ビルばかりの景色を想像していましたが、敦煌の夜市のように、昭和を思わせるような良い意味で発展していないローカル感のある場所があり、素敵に思いました。また、中国人はマナーが悪く気性が荒いイメージでしたが、そのような人ばかりでなく、スーパーのレジでトラブルがあった際に後ろに並んでいた年配女性が笑顔を向けてくれたり、目的地まで一緒に向かってくれたりと、言葉が通じなくても中国の方の寛大さを感じることができ、イメージが良くなりました。日中友好協会、中日友好協会の方々が仰っていたように、今回私たちが訪問させていただいた場所は広大な中国という国での何分の1と言っていいか分かりませんが、大学生のうちに非常に多くの貴重な経験をさせていただき、感謝の気持ちで溢れています。訪中を通して感じたことをこれからの人生に生かすべく、中国語や英語をもっと学び語学の面でも多文化理解などの精神面でもグローバルな人間になりたいと考えています。1週間という短い期間でしたが、大きな原動力となった同世代の皆との出会い、活動を絶対に忘れません。

◆私たち 2018 年度日中友好大学生訪中団第一陣は、北京、敦煌、西安、上海の 4 都市を 訪問し、現地大学生交流を軸に加速度的に発展を見せる中国の歴史・文化・政策の 3 点に ついて触れる事ができたと考えている。ここでは、私の人生の財産となった 7 日間について振り返りながら、中国派遣を経て今後の日中関係について考える事を述べていく。

## 【中国派遣で事】

本事業の中国派遣では、現地大学生との交流や各都市に存在する歴史や文化を触れた体験が私の中にあった中国への印象を変えた。北京・西安で行われた現地大学生との交流では、日常生活に関する話題から日中両国に存在する認識の違いや政策展開に至るまで有意義な意見交換を行う事ができた。特に印象に残ったのは、国際関係学院での交流だ。学生との大学内での意見交換や観光地において共に歩みを合わせて語り合った時間は、普段の環境では実現し得ない特別なものになった。意見交換の際に話題に出た「日常生活」と「中国の政策」に関するテーマで感じた事は、メディアで抱く中国の印象とは異なる日本と変わらない日常が広がっていた。休日には友人と郊外に出かけたり、実家に戻り家族と過ごす生活は日本と変わりなく、直接自分の言葉で現地人と話し合うと、人を思いやる豊

かな国民性を感じられる事ができた。また、「中国の政策」に関する話題では、とりわけ 一帯一路の政策に関するこれからの日中関係について語り合った。一帯一路の政策が持つ 世界に与える経済効果や中国政府の今後の動向をしっかりと見極め、これからの日本は自 国の利益を考えた上で国際経済の発展に尽くすべきだと考えました。

各都市の訪問では、観光地を直接自分の五感で体感することにより、中国という大国の歴史や文化の奥深さに気付かされた。「中国 4000 年の歴史」と呼ばれる国には、先人たちが築き上げてきた発展とともに残されてきた貴重な遺産が残されていた。その歴史を肌で感じることができたのは、私の人生にとって貴重な経験となった。

## 【本事業を経て学び得た事】

本事業を通して何を学び、どのような成果を修めてきたか。私は二つのことを学び得てきた。一つ目は、物事を平面で見るのではなく、多面的に捉えるということだ。これまで、マス・メディアや人伝いで得た情報でしか中国のことを考えてこなかったが、現地に直接足を運び自分自身の目で見て、耳で聞くことによって、中国の真の内面を覗くことができた。これは、国際交流をする際に最も重要なことで、相手を一部の限られた情報で評価せず、直接交流しなければ真の国際交流を図ることはできないということを学んだ。二つ目は、日中友好の鍵は、これからの世界を築き上げていく私たち青年にあることに気付いたことだ。日中青年交流は重要な役割を果たし、これまでの日中友好関係を民間交流によって築き上げてきた。私たちが現地で作り上げてきた日中の輪は今後の民間交流の柱に必ずなると確信している。今後は、私たち日本青年と中国青年が日中友好に資する意思を持って、真の日中相互理解を呼びかけていきたい。

◆私は大学に入学する前、中国に対して悪いイメージを持っていました。それは、中国人のマナーが悪いことや、食の安全性が低いこと、模倣が多いこと、公共の場で騒がしいことでした。大学に入学して中国からの留学生の友達が出来、そのイメージが良く変わりました。多くの話題について話し、一緒に中華料理を作り、遊びに行くことで自分の考えていた中国に対する見方は偏見なのではないかと考えました。したがって、実際に中国に行き、自分の目で中国はどんな国なのかを確かめたいと考え、今回の訪中団に参加しました。1日目は北京で天安門を訪れました。故宮はとても広く、昔の中国の王族の暮らしを見ることが出来ました。しかし、天安門から帰るときに、衝撃を受けました。腕をなくした人やお婆ちゃんが、観光客から寄付を求めていたり、物を売っていたりしました。無視をしても全くいなくなる様子がなく、恐怖心からバスを待っている時間が長く感じました。北京は中国らしい伝統的な建物が多く想像していたとおりでした。しかし、貧富の差が激しいと感じました。2日目は国際関係学院の大学生と交流をしました。そこでは日本と中国の大学生の様々な違いを発見しました。一番驚いたことは、日本の大学生はほとんどアルバイトをしているのに対し、中国の大学生はほとんどアルバイトをしないことで

す。中国では勉強が忙しく、バイトをしている時間がないことや、良い大学に入れないと 就職が難しくなるため、高校生のときからたくさん勉強します。日本では自分が使うお金 はアルバイトで稼ぎ、学費も自分で払っている人がいる中、中国では自分のおこずかいも 親に払ってもらうそうなので、日本の大学生とは全く違うと思いました。日本の大学生は 週に 4~5 回アルバイトをしている人も少なくなく、それはやりすぎだと思います。日本 の大学生ほどアルバイトをする必要はないですが、社会勉強とお金の大切さを知るため、 中国の大学生も1日だけのアルバイトや夏休みの短期間でもいいのでアルバイトをした方 がいいと感じました。また、恋愛の話も興味深かったです。日本人は結婚を意識しないで 付き合うのに対し、中国人は結婚を意識して付き合うという違いを知れました。3 日目は 敦煌に行き、莫高窟を訪れました。昔は 1000 個部屋がありましたが、現在は 400 室にな ってしまい、その中のいくつかの部屋を見学しました。左右対称に作られており、この時 代は女の人の方が男の人より地位が高かったということを知りました。特に見上げる高さ にある像は迫力があり、それほど技術が発展してない昔にどうしてこんなすごいものが作 れたのかと疑問に思うほどでした。4日目はシルクロードの鳴沙山に行きました。今まで 中国に砂漠があることを知らなかったため、今回の訪中で私にとって一番印象的だった場 所です。初めてラクダを見たり、自分の足で砂漠の一番上まで登ったり、貴重な経験をす ることができました。5日目は西安外国語大学の大学生と交流しました。北京での大学生 交流と同じように日本と中国の大学生の違いを知れました。日本では、大学を卒業したら 多くの学生は就職するのに対し、現在中国では就職が難しく、ほとんどの学生が大学院に 進むという話に驚きました。午後は兵馬俑と南門を見学しました。西安は想像していたよ り都会で魅力的な所でした。6日目は上海を訪れました。田子坊は国民の生活場所と観光 客のためのお土産屋が混ざっていて、不思議な場所でした。夜には雑技を鑑賞し、どの技 もとても素晴らしく圧巻でした。また、外灘も訪れ綺麗な夜景を見ることができました。 上海は東京より都会という感じで、美しい所でした。

この7日間で中国を自分の目で見て多くのことを知ることができました。敦煌など今まで知らなかった場所に行って、中国にはまだまだ知らない魅力的な場所があると感じました。したがって、今回の訪中で行けなかった他の都市や、上海は1日しか滞在できなかったので上海も含め、また中国を訪れたいです。今回の訪中で中国に対する私のイメージは確実に良くなりました。しかし、中国に偏見を持っている日本人はまだ多いと思うので、今回の経験から中国の良さや魅力を多くの人に伝えていきたいです。中国を知れたことに加え、全国に友達ができ、忘れられない思い出になりました。ありがとうございました。

◆私は今までに二回中国を訪れたことがある。一回目は大学一年の春休みに一人旅で行った北京、二回目は今回のこの日中友好大学生訪中団での一週間にわたる訪問だ。そのため、今回の訪中前から中国の街や人の雰囲気はなんとなく覚えていた。しかし、今回は北京、敦煌、西安、上海の四都市を巡り、天候・文化・歴史など様々な側面から中国という国の広大

さと多様さを実感した。私は大学に入ってから中国(台湾含む)という国に興味を持ち始め、 政治・経済・外交・文化等分野を問わず中国に関するものは必ずチェックするようになった。 元々は日本文化に興味があり、日本の伝統芸能や伝統文化の多くが中国にルーツをもつ、少 なくとも中国文化の影響を受けていることに気が付いた。現在私は部活動で箏を習ってお り、筝は奈良時代に唐から伝わってきた楽器である。訪中前の中国と中国人に対する考え方 は、日本人にとっては最も身近な国・人だと思っていた。理由は、国という面においては上 記にもあるように文化面をはじめ、地理的にもそして政治や主に歴史的な問題においても 中国と日本は深い関係だという事実があるからだ。人という面においては、近年著しく増え る訪日観光客や留学生、外国人労働者の存在である。私自身コンビニや薬局にいくとレジの 店員が中国人のことが多く、彼らの存在感が大きく感じられる。また、一方でテレビや雑誌 等のマスメディアに時々挙げられる情報からも中国・中国人の姿もある。 南シナ海問題等の ハード面から中国人観光客のマナーの悪さ等のソフト面まで報道される。本屋には中国に 関するセンセーショナルな見出しの書籍を見かけることもある。訪中後に思ったのは、必ず しも日本で得る情報のままではないということだ。もちろん、正しい情報や報道があるのも 事実であるが、ここで最も注意したいのは問題にされている事項を棚上げにし、お互いに憎 悪をもたないようにすべきであるということだ。好き嫌いは個人個人で決めることなので、 他人から強制されるものではないが、いずれにせよ、まずは相手の事を知らないと危険なの ではないかと思う。そのため、日本のメディアや日本人の中国・中国人に対する考え方や情 報収集方法には問題があるのではないかと思う。そのため中国というのは日本人にとって 「遠い隣人」になっているのではないかと思う。この「隣人」或いは「隣国」というのは揺 るぎない事実で、地理的にも変えようがない、引っ越しができない事実でもある。つまり、 変わるべきなのは国と国との距離、人と人との距離である。私自身も訪中前は一度行ったこ とのある国だと知ったつもりになっていた面があったが、実際に現地に行き、街や人、同年 代の大学生と交流してみて様々な発見ができた。「遠い隣人」から「近い隣人」になるため にはお互いがお互いのことを深く知るべきで、容易なことではないが双方の努力が求めら れる。訪中後には家族や友人、大学の先生に訪中の様子を、写真を見せながら話している。 意外にもみんな興味深そうに、真剣に聞く人もいる。中国のリアルな話や写真が見られるか らなのだと思われるが、「今まで興味無かったけど、中国行ってみたい。」と言う友人までい た。今回は四都市も巡ることができたが、中国はやはり広いので私も色んな地域を訪れてみ たいと思う。西安外国語大学でのディスカッションのパートナーの実家が福建省福州だと いうのでそこを考えている。また、私のアルバイト先にも最近中国人の方がいることを知り、 早速彼女達に話を聞いてみたら一人は台湾出身、もう一人は面白いことに福建州出身だと 分かり、話が弾んだ。私は将来中国国内で勤務、或いは中国に関する職業に就きたいと希望 している。また、日中友好条約締結40周年という年の第1陣として大学生訪中団に参加で きたことをとても嬉しく思う。そして、今回の訪中はとても貴重でこれからの大学生活を有 意義に過ごそうと改めて思い直すようになった。

◆北京、敦煌、西安、上海と長いようで短かった1週間。私は日中友好大学生訪中団に参加し、交流や視察を通してとても多くのことを学ぶことができた。よく知っていると思っていた隣国の全く知らない一面を知り、勝手に抱いていたイメージは崩れ、今までごく一部の情報を見て中国を判断していたことを理解した。今回、訪中団員となれたことは大変幸運なであったと、帰国後になってより感じている。

訪中前に抱いていた私の中国への印象は、急激な経済成長による大気汚染や経済格差が 広がっているということ、また、中国人へのイメージは、割り込みや謝らないなどマナーが 悪いこと、日本に対して敵対心を持っていることが主にあった。PM2.5 や霧のように見える ほど空気が汚染されている映像や、高層ビルが立ち並ぶ一方、工場にて低賃金で働かされる 中国の現状を映したドキュメンタリーフィルムが強烈に頭に残っていた。また、近年問題と なっている中国人の観光地でのマナー違反や日中間の対立などから中国人へのマイナスな 先入観が作られていた。

そんなイメージを持って訪れた中国であったが、実際に自分の目で見てみると、それらの多くは広い中国のたった一部なのだと気付かされた。まず、北京に到着してから最初に驚いたことは、都市の発展具合である。高層ビルや巨大建築が建ち並び、広い道路に数えきれないほどの自動車が走っている光景に圧倒された。すべてを見られたわけではないが、ごく一部での発展だと考えていた中国の経済は、都市全体の発展に貢献しているようであった。また、空気汚染に関しても、ニュースで報道されているほど悪くはなく、マスクを持参したが使用することはなかった。私が渡航前に持っていた印象は、問題として切り取られたごく一部の情報から作りあげられたものであり、自分の目でみることで、それが真実ではないことを知ることができた。

一方で、想定していた通りの中国に出会う場面もあった。しかし、観察や交流を通してそれらに対して、異文化理解を深められたと考えている。たとえば、ある空港で見かけたカートを引く中国人の態度が印象的であった。彼はカートを引いたまま方向転換をしたかったらしく、弧を描くようにカートを滑らせると側に立っていた近くの男性に当たった。カートを引く男性はかなり強く当ててしまったのにも関わらず、私が中国人に抱いていた印象の通りに、全く謝らず、気にもせず、どこかへ消えてしまった。その光景は衝撃的ではあったが、それ以上に印象的だったのは、当てられた男性も全く気にしていなかったことである。日本では少しでもぶつかった際には謝るのが当然である。しかし、中国では小さなことは気にしない文化であり、それ故、あまり謝らないといった文化が形成されてきたのだと知ることができた。どの文化にも、良し悪しはなく、ただ違っているだけだということを深く理解できる体験であった。

また、訪中団のプログラムの中で強く印象に残っていることは、現地大学生との交流である。特に北京の国際関係学院での、丸一日をかけた交流はとても刺激的であった。ペアの中国人大学生は一日中付き添ってくれ、様々な事柄に関して話すことができた。私はそこで、日本に関してどのような印象を持っているのか、敵意を持っていることはないのか聞くこ

とができた。そうすると、「私の彼氏は日本が嫌い。日本は大戦で敵国だったから。」と話してくれた。やはり、想像していた通り日本に対して良くない印象を持つ中国人がいることを知った。しかし、その後の彼女の言葉がとても印象的であった。「でも、歴史は関係ない。過去は過去、今は今、未来は未来だから。」そう言われた時に、自分の視野の狭さを知った。中国人は日本が嫌い、そういった印象を私は持っていたが、それはほんの一部であり、中国の大学生はこれほど広く日本や世界を見れているのだと感心した。訪中前の想像通りの中国に出会うこともあったが、実際に交流することで、より深くそれらのことについての理解や、新たな発見をすることができた。

「目で見て、耳で聞いて、口で味わって」という言葉を団長はよく話していた。今では心から意味を理解できる。今回の訪中で中国に対する偏見が崩れ、見方を変えることができた。 訪中を企画運営してくださった日中友好協会、中日友好協会、そして中国政府にはとても感謝をしています。 ありがとうございました。

◆今回のプログラムでは、さまざまな背景を持つ多くの中国人とコミュニケーションをとることができ、光栄でした。

プログラム内で多くの観光地を拝見させて頂きましたが、私の感想文は実際の中国人との 交流エピソードを中心にお作り申し上げます。

全体を通して、中国人に歓迎される場面が多く、後述するこのプログラム外での出会いにおいても、中国人からの親切を十二分に享受致しました。

その結果、主に自分は、『おもてなしの国である日本人として日頃このように中国人を歓迎する気持ちを持って接しているのか?』と反省しました。

プログラムの中では、自分の意見を率直に述べる中国人とのディスカッションが最も印象に残っています。かねてより私が疑問に思っていた"ある疑問"への答えを見つけたからです。従ってそれはとても有意義でした。そして、何を言おうと中国人はそれは偏見である!と私を非難することのない中国人に感動しました。

"ある疑問"とは、"中国人は非常に真面目で勉強好きであるが、何のためにそんなに勉強するのか?勉強しても良い未来があるとは限らないのではないか?"というものです。この質問は偏見に満ちているものであるし、中国人を馬鹿にしている質問ととることもできます。しかし彼らはこの質問を責めることはありませんでした。

彼らは、『私たちは勉強をしなければ良い就職ができないという危機感の元で、必死で勉強 していて、決して勉強が好きで好きでたまらない国民性ではない。』と言いました。

日本人も勉強をしなければ良い就職ができないという危機感は同じく持っているものです、 しかしながら私の目には中国人の方がより真面目に勉強する文化があると映りました。そ の理由を中国人は一緒に考えてくれたのですが、『中国は経済発展をしているためキャリア アップして自分も経済的に豊かになる未来が見えているから、モチベーションを維持でき る』という結論に至りました。

中国が経済発展しているということも日本ではそこまで意識していなかったのですが、現地では身をもって、中国人の羽振りの良さからそれを認識するという体験もありました。田子坊を探索していた際、偶然街中で出会った中国人から、さまざまなものをご馳走してもらい、なんと、彼のアカウントを通じて、ウィチャットペイというスマホ電子マネーの支払いにもトライさせて頂いたのです。そして彼は田子坊で偶然知り合った相手、つまりは外国語大学の生徒でないにも関わらず、英語話者でもあり、私とのコミュニケーションは中国語と英語の2言語で行なってくれました。

このような関わりを通して、私は中国の教育水準の高さも身に染みて感じました。観光地では店員さんだけでなく、観光客として訪れる中国人も、多くが日本語や英語を話せる人々であったからです。

一方で敦煌、鳴砂山では現地の子供達と遊んでいた際には、かつての中国の教育水準が現在 のようではなかったとわかる出来事もありました。子供達のおばあ様と少しお話ししたと ころ、彼女は自分は文字を書けない、とおっしゃったのです。

しかし概して今回の訪中で接した中国の方々は本当に私たちに親切にしてくださいました。 そこに教育や学力などは関係がないように思いました。どんな人々も非常に私たちに親切 でした。西安外大のある学生さんが『日本語学科に交流しに来てくれる日本人は、ボランテ ィアをしているようなもので、本当にありがたい』とまで述べていて、大変驚きました。 私たちは多大な歓迎を受けたと思います。

このような機会を持てましたことを、心より感謝申し上げます。

今後はこの歓迎への感謝の気持ちを持ち、中国の人々をより歓迎する気持ちを持ち、この度 親交を持った中国人との意見交換を続けていきたいです。

◆私がこの研修に参加する前まで考えていた中国と日本の関係は、はるか昔から続く深く 長い繋がりがあるにもかかわらず、あまり仲が良くないというものでした。そのような印象 の大部分はメディアから受け取った情報によって成り立っていたことに気がついてはいま したが、なかなかメディアの情報を無視して中国について独自の考えを持つことは難しい ものです。今回この訪中団に参加して一番強く感じたことは、その土地を肌で感じることが どれだけ自分に強い印象を植え付けたか、ということです。その土地の空気を吸って、その 土地の人と会話をして、その土地の食事をとって、その土地で寝る、その一つ一つが自分が 持っていた偏見や前提、先入観を壊していきました。一番心に残った中国人とのふれあいは、 西安で起こりました。夜、班の友達と現地のスーパーの場所を聞くために歩いていた二人の おばあさんに声をかけました。「まっすぐ行ってすぐだよ」私としては、初めての海外で、 初めて海外の人に道を聞けたことで十分でした。しかし、そのおばあさんはスーパーの近く まで一緒に行ってくれると言ってくれました。なかなか会話は難しかったものの、85 歳だ ということ、日本に行ってみたいということが聴けました。人の優しさに触れられ、本当に 嬉しかったこと、一生忘れないと思います。

観光の面では、故宮博物院や頤和園などを見学し、中国の歴史的文化に触れることができま した。どちらも想像したものより何倍も広くて歩き疲れ、この研修は体育会系だなと感じま した。中国の歴史には興味があったため、たくさんの写真を撮りました。見返すたびに思い 出がよみがえり、楽しい気持ちになれます。個人的に 1 番楽しかったのが敦煌の鳴沙山で す。砂漠に憧れもあったため、飛行機の窓から延々と続く砂漠が見えた時からテンションが かなり上がっていました。敦煌の砂漠は想像していた通り素晴らしい景色でした。滑らかな 表面の砂山がいくつも連なっていていつまでも見ていられる景色でした。山の麓から頂上 を見上げるとかなり急な勾配で、登りきれるか不安でしたが班の友達と声をかけつつ登り ました。体力的な問題で頂上には行けませんでしたが、十分眺めも楽しめました。裸足にな って砂山を駆け下りたとき、本当の自由を感じられた気がしました。世界遺産である莫高窟 ではとんでもないパワーを感じ、「すごい」しか言えていませんでした。外はあんなに暑い のに、一歩洞窟の中に足を踏み入れるとひゅっと寒くなり、一瞬で中国古代の中に入り込ん だ気がしました。8つの洞窟を見学しましたが、どれも見入るほどの素晴らしさでした。巨 大な寝そべる釈迦像と周りの無数の弟子の像が囲んでいるものは、もうずっとここで見て いたいなと感じました。 北京では雑技を見ました。これも、今回の研修で心待ちにしてい たものです。パフォーマンスにかける熱い気持ちを感じられとても感激しました。中国研修 最終日にこれを見れてよかった、と心から思いました。

中国に滞在したこの1週間は、あっという間だったな、と感じます。一日一日が濃く、充実していて自分の人生経験に大きく作用していることを感じました。中国の土地で過ごした一週間で自分の中の中国のイメージはガラリと変わりました。もちろん、よくない部分もみたし、改善すべき点も目につきました。しかしそれは、日本も同じことです。大切なのは、そのよくない点だけを見てその国を判断し、毛嫌いしてはいけないということです。メディアから与えられる情報のみを鵜呑みしてはいけないということです。自分の目で見て、肌で触れて、そして初めて自分の心からその国について述べられるのだ、そう気づかされました。私はこの一週間でいろいろな人と出会いました。訪中団で同じ班になった皆、中国大使館の方々、中国で滞在したホテルで働いていらっしゃった方達、中国人の大学生の皆、訪中団引率の方々、旅先で出会った中国人の方々。どれもが私の一生の宝物です。本当にこの機会に恵まれて幸せでした。ありがとうございました。

◆私が日中友好大学生訪中団の一員として訪中をし、「色眼鏡をかけて物事を見ている」ということです。私は、「色眼鏡」つまり「偏見」を持たないように意識してきたつもりでした。しかし、私たちの身の回りに溢れる情報によって、無意識のうちに「色眼鏡」をかけてしまっていると思います。私もその一人でした。知らず知らずの内に、中国の人を「中国人」と一括りにして考えてしまっていました。そして、日本で報道される政治問題や一部の人によるマナーの問題などによって、「中国はこういう国」だとメディアや他人の情報だけで作りあげられたイメージで捉えていました。これは、私だけでなく、多くの日本人にも言えることだと思います。今回、実際に自分の目で中国を見て、中国の大学生と話し、その捉え方は間違っていると感じました。

まず、私たちは「中国人」と一括りにして見るのではなく、「一人一人」を見る必要がある ということ。そして、実際に現地に行き自分で中国を感じること。この二つが日中友好の鍵 になっていると私は考えています。

私たち訪中団員は、北京で国際政治学院、西安で西安外国語大学の学生と交流を行いました。 学生「一人一人」とのディスカッションや頤和園の観光などを行い、楽しい時間を過ごすと ともにプライベートな話から一帯一路やシェアリングエコノミーなどアカデミックな話を し、とても密度の濃い時間を過ごすことが出来ました。私がこの訪中期間に出会った生徒と ディスカッションをして感じたことは、明確な将来の目標を持ち、それに向けて努力をして いる学生が多いということ。日本では、大学卒業後に就職という一般的な進路ではなく、大 学院に進学し、自身の興味学問を専門的に勉強した後に希望している職業につきたいと考 えている学生が多かったことです。それを聞き、大学卒業後に必ずしも就職をしなくてもい いのではないか。と思ったのと、世間一般がどうであれ、自分がやりたいことをやる大切さ を学びました。これらの交流は「日本」と「中国」という国を超えて「一人一人」が楽しみ ながらお互いを理解することができた場でした。

中国の大学生との交流だけでなく、中国の文化・歴史を知るべく多くの場所に行きました。 北京では故宮博物院・頤和園、敦煌では莫高窟・鳴沙山、西安では兵馬俑、上海では田子坊 散策や雑技鑑賞をしました。どの場所もそれぞれ歴史があり、ガイドの方々が丁寧に教えて くださったので、ただ見に行くより多くの知識や関心を得ることが出来ました。また、自由 時間には、夜市に行くなどをして有意義な時間を過ごし、地元の人の生活風景を知るいい機 会にもなりました。このように、実際に中国に行き、中国を感じたことで「自分の考えてい た中国のイメージ」と「実際の中国」が違うということに気が付きました。まさに「百聞は 一見に如かず」の経験をし、多くの日本人が中国にいき、自分自身で感じた中国を知る必要 があると感じました。

最後に、今回「日中双方」の多くの方と出会えたこと、このような機会を設けてくださった 協会・政府の方々に感謝しています。ありがとうございました。

◆私がこの訪中団で印象に残っていることは、中国人大学生との交流です。その交流を通し

て考えたことがあります。それは、「自分も含め日本の大学生がいかに勉強をしていないか」 ということです。これは、手段と目的という観点を鑑みて特に感じました。

私は日本語とほんの少しの英語を話すことができますが、中国語は全くわかりません。そのような状態で訪中したのですが、中国人学生はみんなとても流暢な日本語を話し、なかには英語を話せるトリリンガルまでいました。そして、母国語ではない言語を使って、自分の立場を表明したり、議論をしていました。

日本では、よくコミュニケーションの手段であるはずの言語が目的になってしまうことが 多くあります。それは、英語や中国語などの外国語を話せるのがすごいという私たちの潜在 的な意識があるからだと思っています。現在のグローバルな場では、英語が話せることは当 たり前、さらに第二外国語をも使えることがスタンダードです。

そして、実際の議論では、自分の価値観であったり、政策に対する自分の考え、将来はどういう人間でありたいのか、などのテーマを中国人はとてもロジカルに言語化できていると感じました。国際関係学院で話をした李さんは、将来は自分の好きな洋服を使ってビジネスをしたいと話していました。そのためには資本金が必要であり、まずはその資本を集めるために会社に就職することが必要、そして、そのためには、よりお金の稼げる企業に就職しなければならないため、学部の日本語の勉強に加え、自主的に英語を必死に勉強し、アメリカの大学院に行くと話していました。

私は、この言語能力の壁、そして思考能力の壁を、中国の大学生との交流を通じて強く感じました。この2ステップの克服をどれだけの日本の学生ができているのだろう。中国人学生は日本人より日本のことについて日本語でうまく考えを述べることができるのではないか。そう考えただけで、日本の将来について危機感を覚えました。よく日本の大学生は人生の夏休みという比喩を用いられ、遊びに重きをおく人が多く見受けられます。もっと勉強をすべきではないのか。このまま大学生が高みを目指すことなく、2ステップの克服をやめると、国際的な交渉力が格段に落ち、国の衰退につながってしまうのではと思いました。

私は残りの大学生活で取り組もうと決めたことがあります。それは、もっと様々なことについて友人や出会った人と議論をすることです。そのためには、言語の習得はもちろん、日々自分が何を勉強して、将来的にはどうなりたいのか、様々な事件・政策・決定について自分がどういう立場でいるのかを、常々考える必要があります。しかし、これはあくまで議論をするための準備であり、手段です。そして議論をすることで、大学生の本業である学びをより深くできればと思っています。

◆今回、日中友好協会の大学生訪中団として中国の 4 つの都市を回るという貴重な機会をいただいた。はじめ、正直なところ中華人民共和国という国に対してよい印象を抱いてはいなかった。現在、日本メディアを通して伝えられるこの国の姿というのは世界で覇権を目指す軍事的な要素の強い国として私の目に映っていたからである。また、ここのところの日本と中国の政治的な摩擦はあらゆる面で両国の国民に対してお互いを色眼鏡で見る悪い要因

となっていたような気がするのである。

今回、中華人民共和国という国を期間としても短く、訪れた都市も限られていたものの実 際にこの目で感じ経験することによりこれまでと違った角度からこの国をじかに見ること ができた。私にとって大きかった経験は地元の大学生との交流である。実際にその人と日本 語と英語で交流することによりじかにこの国の国民性と広大さを感じることができた。ま た大学生や中日友好協会の人たちだけでなく英語は通じないものの買い物や散歩を通して 現地の人とかかわる機会があったのであるが彼らから感じたのはエネルギーとこの国がこ れから成長していくという見込みである。私にとって中華人民共和国は幼き頃より、身近で 親しみを感じてきた国でもあるが日本の文化とメディアの影響を受けて教育された私は知 らぬうちに欧米的な歴史観と価値観を身に着けていたのだということも痛烈に感じたので ある。それは普遍的で世界の中心となる考え方出ると信じて疑わずにこれまで生活してき たが、西洋文明から中華文明圏と場所を変えて経験することによりそれは先進諸国で育っ た私の一つの驕りであったと感じた。 つまり、 国家の統治に必要なのはテクニカル的な概念 や表層的な知識ではなく、国民が豊かで国が分断されることのないような実用的な政策と 統治制度であるということである。どの国においても完全な統治制度を持つ国はない。であ るからには国が分断され民衆が混乱のただなかに放り出されるよりは実際的な方策を持っ て支配した方がよいのである。そこに共通する考えは民衆の日常と幸福を守り抜くという ゆるぎない決意と覚悟である。

話がそれてしまったが、中国はとても活気に満ちた国であるということを感じたのである。特に完成していると思っていた北京でさえもいまだに変容し成長しているのである。私が感じ、羨ましく感じたのはこの国の成長と発展へのあくなき欲求と力である。彼らは今の状態に満足しておらず更なる発展と成長を切望しているのである。その点、日本は自分たちが十分豊かになった、そして将来に対する展望からその心は知らず知らずのうちに内側を向いているのである。

その点、我々のマインドセットと共に、経済、政治制度において中華人民共和国から学ぶことはあると感じた。

また経済や政治、つまり北京や上海の重点都市だけでなく歴史や文明という点においても私は多くの点でこの国から影響を受けた。もちろん日本人として数多くの中華史の文献を読み、その歴史に敬意を抱いてきたのであるが、それを実際にこの目で見ることにより自分が持っていた印象以上のものを目にして大いに感銘を受けたのである。始皇帝の陵墓、敦煌の仏教遺跡、西安の城壁、紫禁城を実際に歩き回って肌で感じることにより中華文明の歴史と壮大さを感じることができた。

まだまだ書き足りないことが数多くあるが、それをすべてここに書ききるにはスペースが足りないので、ここにまとめると今回の訪中を通して私が得たものはこれまでの世界観がぶち壊されたということである。とても衝撃的であった。私の信じていた世界観が音を立てて崩れ去ってゆくのを感じた。

先の考えの通り日本は中国と対立ではなく友好を、迎合ではなく協調を、そして競争では

なく連携を目指していくべきであるという考えだけは変わることなくむしろ正しかったと思った。この訪中から私は数多くのことを学び、感じた。それもすべてはこれらの計画をした政府と中国大使館、それに類する中日友好協会の方たち、日中友好協会の方たちに感謝したい。ありがとう。

◆日本大学生訪中団の参加者として1週間で中国の北京、敦厚、西安、上海の4都市を訪れました。今回の訪中を通して感じたことが主に3つあります。

まず、最も印象に残っていることは、北京の国際関係大学、西安の外国語大学での現地の学生との交流です。どちらの大学でも日本人学生一人に対し、現地の学生一人がペアとなりディスカッションを行いました。グループではなく一対一で話し合えたことで、中国政府によるインターネットの規制、台湾問題、政治体制など、互いに率直に意見・考えを伝えることが出来、とても有意義な時間となりました。その中でも私のペアの学生が、中国の知識層はインターネット等が規制されていても国外からの情報を得ているし、この政治体制・社会体制は永遠には続かないと思うと話してくれたことが印象に残っています。確かに歴史を振り返っても永遠に存在し続けるものはほとんどないですが、自分が暮らしている国の現存の体制に対しての考えとしては日本人にはないものであると感じました。

次に、中国が誇る遺跡を訪れたことや、様々な都市に滞在したことにより、中国という国の歴史の深さや地方により特色が大きく異なること、そして何よりも国土の大きさを感じることが出来ました。北京では、オフィスビルが数多く立ち並んでおりさすが大国の首都であるなと感じましたが、20年前にはその場所には平屋の家屋が並んでいたということを知り、驚くと同時に、中国が急速な成長を遂げているということを身をもって感じることが出来ました。その後訪れた敦煌の莫高窟や西安の兵馬俑でははるか昔にあのような砂漠で修行をする人びとがいたこと、集権的な大きな国があったことを学び、中国の歴史が感じられ、最後の上海では活気あふれる都会の雰囲気を味わうことが出来ました。

最後に、政治体制が共産主義である中国ではその思想を呼びかけるポスターがいたるところに張ってあったり、優秀な学生は赤いスカーフを巻いていたりする姿が見られました。私はロシア語を専門として学んでおり、ソ連の時代にあったと授業で習ったそのようなものが今も中国には存在していることに特に興味を惹かれました。また、敦煌では町や人びとの穏やかな雰囲気がカザフスタンやキルギスといった中央アジアの国々と似ているように感じられ、シルクロードで繋がっているということを実感できました。このように自分の専門と関連付けて中国を見ることが出来たのも面白い経験であったと思います。

今回の訪中を通した中国と日本の学生、日中・中日友好協会の方々との出会いもとても貴重なもので様々な面で刺激を受けることが出来ました。特に、上海での送迎会のタンタンさんの「今回は 1 週間で4都市を訪れ、中国のいろんな面を見たように感じるかもしれないが、実際にはもっと多くの側面がある。今回の訪中で見たものだけで中国を判断せず、他の町も訪れて欲しいと思う。」という言葉が印象に残っています。今回の訪中に参加して今ま

で以上に中国に興味を持つようになったので、今回であった方々とのつながりを大切にし、 近い将来また絶対に訪れようと思います。

◆円卓での料理の時、必ず炭酸水が出てきたことには驚きました。

中国の人も、菜種油で料理が重くなっていることに気がついてると思いますが、見た目はみ んな健康で、美味しい料理と会話を楽しんでいました。

中国のサービスは、料理がまだ円卓の上に残っているにもかかわらず、次々と料理を運んでくるので、食べきれない分料理をするのが中国マナーだと体感しました。そこに中国の経済的豊かさや、中国人の寛容さを感じ取ることができました。

北京国際関係学院では、中国の大学生と色々な中国のお菓子、日本のお菓子を持ち寄せ、互いの文化、恋愛観、趣味などについて語り合いました。

私が北京国際関係学院で会話した大学生達は、皆日本のことに興味を抱いており、中国語と 英語が流暢なのにもかかわらず、日本語の勉強にも力を入れておりました。

ある生徒が、先生以外日本語を話す機会がないと言っていたが、中国の大学生は本当に日本 語がうまく、敬語を流暢に使っていました。

どうしたらそれほど勉強に精を尽くすことができるのかと疑問に思い、勉強にとって有害 とされている恋愛について質問を繰り返し尋ねている人も日本の大学生にいました。

私も疑問に思ったので、恋愛は法律で禁止されているのか、皆、親や先生に隠れて恋愛をしているのかと質問をし、ある学生は、「みんな親に隠れて恋愛をしています。」と笑いながら言っていて、中国人もお茶目なところがあるのだなと心の底から感心しました。実際のところは、彼らは中国のエリート学生で、中国人大学生のある一人は外務省に内定が決まったと言っていて、流石だなと思いました。しかしその学生も、高校1年生のとき恋愛をしてたせいで成績が落ち、親から叱責を受けて、当時付き合っていた彼女と別れる決断をしたらしく、自らその決断を下せるところが、大人びた一面も持ち合わせているのだなと思いました。そして何よりも、中国の大学生も日本の大学生と似ていて、恋愛を楽しんでいるところに親近感を覚えました。今回は北京、敦煌、西安、上海を訪れたが、どこの街も青空が限りなく広がっており、心配していた空気汚染については微塵も不安要素は感じませんでした。

6 月は、日本では梅雨の時期ですが、中国の空は快晴続きで、昼間は 30℃以上の晴天下、汗をかきながら頤和園を散策したり、敦煌の砂浜で裸足で歩き回ったことは忘れがたい経験です。日本と違って中国は湿気は少なく、空気は乾燥していました。どこに行っても日差しが強く、この時期、朝 6 時頃から夜の 21 時頃まで空は明るく、日陰に入って涼む地元民を羨み、夕方頃から街は夜市などで賑わい始めて、客を呼び止める喧騒の中、地元客に混じりながら北京の夜市散策を楽しみました。

バスで西安の街を移動中、何棟ものビル群が現れ、ざっと計算しただけでも、30 階建マンションが 1 つのエリアに 30 棟以上も並び、そのエリアがあちらこちらに点在していたた

め、西安の人口が感覚的に私の故郷とは比べ物にならないほど多く、密集しているのだなと 思いました。しかし、土地が広いため、それほど狭くは感じず、東京の方が住みづらいので はという印象を持ちました。訪中を終えて考えたことは、今回の訪中団の一員に選ばれたこ とがとても光栄で、素晴らしい体験をさせていただいたということです。異なる文化に言葉 もわからず飛び込んでみて、自分が無力である故とを思い知らされました。また、中国の大 学生は英語も日本語も流暢で、彼らとの学力の差を身に染みて感じさせられました。実際、 私は今回の訪中団の一員としては適任ではなかったのかもしれません。しかし、その差はこ れからも勉強に邁進することで少しずつ縮められるはずです。具体的に自分がこれからど の道に進むのか、いまだに迷っている部分もありますが、まずは目の前の目標である、英語 を習得し、世界と日本をつなぐ架け橋という役を担えるよう、これからも多くのことを勉強 していきます。今回の訪中のおかげで、未知のことが明確になったこともあり、私自身の世 界が広がりました。また、日本の大学生との交流も貴重な体験でした。同時代を生きる仲間 とともに中国という異国の地で時間を共有したことは、私にとって、かけがえのない財産の 一つです。今回旅を共にした 1 班の仲間たちからも多くの刺激を受けました。素晴らしい 人達と時間を共にでき、私は本当に幸運に恵まれた人だなとつくづく思います。改めて、 今回の旅を計画してくださった中国日本友好協会をはじめとする、中国大使館、中国政府北 京国際関係学院、西安外国語大学などの関係者の皆様にお礼を申し上げます。

◆まず初めに、この七日間で北京、敦煌、西安、そして上海を巡りその中で出会った風景や人々は言うまでもなく私自身に強い影響を与えました。ただ帰国した直後の私にはこの感情がただただ漠然としたものであって、それが何に対しての「影響」であったのか深く今まで考えておりました。その中でもやはり自分の思想に強いインパクトを与えたのは、一括りにするのも知識人や博識ある方々に失礼ですが、やはり我々日本人の報道に対しての「受信&思考リテラシーの向上の必要性」を感じた事がまず第一に挙げられます。漢字で難しく書き記してしまいましたが、端的に言うと情報の受け取り手がその情報自体を吟味せずにそのまま受け取ってしまっている、という事です。勿論この意見は様々な学問、特に政治学や経済学では言われ続けている警鐘の一つではありますが、今回それを身を持って体感致しました。私が経済学を勉強しているので中国関連の書籍を読む機会なども多々あるのですが、それらの中で通説的に言われ続けていた「中国経済は五年以内に終わり

を迎える」というのが経済学者たちの意見だったのですが、それが言われてからかれこれ 10年以上経ちますが、GDP(国内総生産)が落ち込む事は未だになく(無論経済はインフレとデフレを繰り返すので不調な時もミクロ的視点では必ずある)、今回の訪中で北京や上海の町並みを見た限りでは中国経済の「崩壊」などを感じさせられるような一面は無かったと言えます。そのような意味で自分ひいては日本人の情報リテラシーを高めなければいけないと思わされた良い機会でした。二つ目に考えさせられたのは「中国人の性格」についてです。まず一人の日本人として今まで持っていた中国人に対するステレオタイプは、声が大きい、

自己主張が激しい、マナーが悪い、我が儘などネガティブなものが多くありました。もともとそれを払拭するためというかそれをただの一部の中国人を見て日本人が決めつけている固定観念だ、というのをこの訪中団を通じて確かめたかったのですが、やはり私の推測通り一口に中国人といっても様々に人がおり、日本人のステレオタイプに属する人々の方がむしろ少なかったのではないかと思えるほどでした。そこで私が思ったのは日本人としてどの場面で中国人と接するのが多いか、という事でした。その中で自分にとって当てはまる場面の多くが中国人「観光客」との接する場面でした。そこで私が推測するのは、「海外へ観光する中国人は金持ちだからそれに比例して上記のステレオタイプのような性格をもつ中国人を目にする機会が多いのではないか」という意見です。お金持ち=そのようなイメージというのはいささか失礼かとは思いますが1つのアイデアとして、各都市で交流した学生方に同じ質問をしてみたところ、「That is correct」などの大賛成に近い意見を頂きました。なので「中国人の性格を詳しく知りたい」と思われる方は実際に現地に行くのが一番ではないか、というのが私のアイデアです。最後にこの訪中団を通じてお世話になったすべての関係者に感謝申し上げます。ありがとうございました。

◆これまでの人生において、たった 7 日間で自分の知識や考え方がこんなにも変わった経 験をしたことは初めてでした。わたしは大学で中国語を学び、中国語を通して文化や中国人 の考え方について学習を深めて来ましたが、今回初めて訪中して、そこで学んだ通りの事を 実際に目の当たりにすることも多く、すでに学んだことにプラスして様々な知識を自分な りに得ることが出来ました。言葉の面では中国には沢山の方言があって、それぞれかなり発 音が違うということ。わたしたちにスーパーへの行き方を教えてくださった西安の地元の 二人の女性。習った普通語で話しかけたけれど返って来た言葉は西安の方言。かなり発音が 北京と違っていました。最初のうちはその違いに戸惑いましたがすぐにわかりました。方言 は違うけれどこの発音はこれと同じじゃないかなと予想しながら話すこともとても楽しか ったです。また英語は世代や生活環境によって出来る人とできない人の差がとても激しか ったことに驚きでした。日本にいるとき訪日中国人は英語を積極的に使うという印象が有 ったので中国人は英語が日本人よりも得意であろうと思っていました。それは間違っては いません、確かに英語が流暢な方もいます。しかし中国は日本に比べて土地も広い、人口も 多い。場所によって、人によって英語に対する考え方も能力も大きく異なっていました。そ れを通してある一つの集団の側面ばかりをみて判断していてはいけないと思いました。個 人的にとても嬉しかったのは、出会った中国人に英語で話しかけても反応が薄かったりわ からないと拒絶されたりすることもありましたが、中国語で話しかけるとかなり文法が間 違っていてもある程度理解してくれるし、何よりも心を開いてくれているように感じまし た。そこでわたしは言語の力って本当に素晴らしいと思いました。一方環境面で得た見識に ついてですが、訪中前から知っていた通り空気が日本よりも汚染されていると思った箇所 がいくつかありました。また、トイレであったりとか水質であったりとか、気を付けなけれ ばならないことも多々ありました。中国はまだ環境面で改善すべきところが沢山あるなと感じました。そしてわたしは中国の生活環境についてどのようにしたら改善するのか、将来どう変化するのかということに興味を持ちました。

訪中前に予想していなかった事が沢山起き、この一週間は終始良くも悪くもカルチャーショックに出会いました。わたしの場合は中国「人」に対するカルチャーショックの印象がとても残りました。例えばマイナス面では交通機関、道路の規則を守らない人々が多く、すごく危なくて良くないと思いました。プラス面を一つ挙げると、日本人よりもオープンな性格で、よく笑い、仲良くなるととても親切で親しくしてくれるということです。それらは教科書やネットに書いていなかったようなこともありますし、たぶんそれは自分しか感じていないであろうことも沢山ありました。生の中国の現状や中国人と触れあい、自分や仲間の考え方も変わっていったと思います。中国を理解するあまり現地の人の癖や話し方がうつることもあり、面白かったです。わたしを含めて訪中を共にした皆も、何事も規模が大きな中国を体験して、ちっぽけなことにとらわれず大雑把になったり小さなことでクヨクヨ悩むことが少なくなったりしたのではないかと思います。

今回訪中したことでこのように沢山の見識を広げ、良い経験が出来ました。誰の耳も目をも通していない自分で直接感じたことの意義は大きかったと思います。良い面悪い面両方見れてとても良かったです。特によかったと思ったのは人との交流です。中国人と話す機会が沢山あったことです。大学生同士の交流では、日中両国の学生にとって大きな刺激となりました。ホテルの人やスーパーの人、市場の人、道端の人など、皆違う環境で育って習慣も考えも違う。そんな人々と出会えた経験は宝物だと思います。日本にいては決して経験できなかったことです。しかしたった一週間だけで中国をよく知った、と思うべきではないと思います。それはこれまで述べたように、物事の一側面で断定してはいけないからです。ゆえに今回の訪中だけに終わらずこれからも中国の様々な分野の情報について積極的に得、中国人と触れ合う機会を多く持ち、さらに学び続けたいと思います。

◆北京のメインストリートは日本では考えられないくらい幅が広く、上海の色とりどりのネオンとはまた違った統一感のあるライトアップがされていて、北京上海の二都市をほんの一側面から見てもこれだけの違いがあるのかと驚いた。中国という広大な国は、たったの4都市を訪れただけでは到底知り尽くせないが、それでも今回訪中団に参加し、自分の目でじっくりと中国を見たことには非常に大きな価値があった。

西安は歴史的にも有名な渭水が流れる都市であり、緑も多く、整備の行き届いた大都市を 感じさせる。しかし建設中の建物や地下鉄の駅も多くあり、都市全体が開発途中であるとい う印象を受けた。

中国はつい最近まで毛沢東主義のもとで独特の過程を辿ってきた国である。天安門広場を バスで通りがかった時には、班のメンバーと共に写真撮影を楽しんだが、ちょうど翌日6月 3日が天安門事件のあった日であることに思いを馳せると、時代の流れを生身に感じた。 中国は近年急速に発展し、周囲の先進国に追いつこうとしているが、あまりに急速であるため、ある種のアンバランスさ、空洞を抱えた発展の仕方をしてきたように思える。例えば電子通貨の圧倒的な普及の裏で、福祉制度はまだ十分でない。トイレは水が自動で流れるセンサー式が増えてきているが、トイレットペーパーの設置は遅れている。私たちの宿泊したような高級ホテルには、握ると電源の入る最新式ドライヤーや、タッチパネル式のエレベーター、自動開閉式カーテンなどハイテク技術が勢揃いしているが、一般の人々の生活圏に目を向ければ、入り口には未だにビニールテープが下がっている店が多い。自動ドアどころかそもそもドアの設置も未完成である。このようなアンバランスさは中国独特のものであり、非常に興味深く思った。大都市であっても、日本のビジネスの進出余地もまだ多分にあるだろう。

また、中国の都市には至る所に社会主義のスローガンを提示した看板があり、思想統制の様子が伺える。例えば敦煌の鳴沙山を訪れた際、入場ゲートに掲げられた電光掲示板をよく見ていると、はじめは安全上の注意が書かれているのが、徐々に共産党政府の主張へと内容が変化していく。民族団結がうたわれ、最終的には習同志の名前も登場するといった様子だった。

このように中国という国は、日本の隣国でありながら日本と 180 度違った経歴を持つ国であると感じられた。しかし、国の中で生活する一人一人を見れば、思想や生活の違いはあれど我々と何ら変わらない人間である。

北京の学生交流では、中国人学生が日本人学生がトイレから帰ってくるのを待っていた一方で、日本人学生は中国人学生が話しこんでいるのを待っていた、という擦れ違いが原因で班が集合時間に遅れるという出来事があった。バスの出発を大幅に遅らせる結果にはなってしまったが、本質的には両者の思いやりの気持ちが全てであり、学生間の交流がいかに友好的で自然なものであったかということを実感させられた。西安外国語大学の学生も、私たち日本人学生が日本に帰ってからでも連絡が取りやすいようにと、わざわざ VPN を使って LINE や Instagram をインストールしてくれていて気遣いを感じた。

鳴沙山では、旅行に来ていた中国人の家族と親しくなって5歳、6歳の二人の子供と砂遊びをしたり、また蘭州から来たという別の中国人の一行とも話が弾んで一緒に写真を撮ったりもした。私が少し中国語を話せると分かると、彼らは喜んで沢山話し掛けてくれた。この訪中団がどのような団体であるか、参加費は幾らかなどと聞かれることもあった。彼らは日本に興味を持っていて、親しげで、話をするのが好きだった。とても中国人の全員が反日感情を持っているなどとは思えない。

今回訪中団に参加して、中国の人々の活気に触れ、また同じ班のメンバーから刺激を受けながら、大変有意義に一週間を過ごすことができた。私は現在大学では中国語中国文学を専攻しており、将来は研究職に就いて日中友好の一端を担うことを目指している。訪中団への参加は、間違いなく私の人生にとって重要で実用的な経験となった。

このような素晴らしい機会を与えてくださった日中友好協会はじめ中国で関わった全ての方に感謝したい。私はこれからも中国の多様な都市を出来る限り多く訪れ、自分の目で中国

という国を見て来ようと思う。

◆「チャンスはその時しか味わえない一過性のものであるが、だがしかし、そのチャンスは 君の中で一生残る永続的宝を作り出す可能性も秘めている。」これは最近感じていたことに 対する僕の言葉である。この 1 週間による永続的宝は新たにでき上がった僕の人生観であ る。ここではそれらの中から3つ、このチャンスを準備してくださった全ての方々への感謝 も込めて紹介する。

訪中前の中国のイメージは「雑多でなんでもあり」であった。正直1日目の到着した瞬間から道路上の中国人の運転でまさに「雑多でなんでもあり」と感じた。ただ今回の訪中の半分を過ぎたころから、自分の中で少し視点が変わってきたことを覚えている。それは中国が「なんでもあり」の文化である、とは必ずしも言い切れず、日本の方こそが「多くのものがタブー」である文化かもしれない、という解釈だ。実際に僕らが中国で運転したときを想定すると、中国人よりも2倍、3倍、もしくはそれ以上、イラっとするシーンに遭遇すると思う。その事実には僕らが見習うべき大いなる要素が隠れている。

日本のように変に規律を正しくすると許容が狭まり、「他人に厳しく自分に厳しく」となりやすい。半面、中国は「自分に甘く、他人にも甘く」であった。今、僕は後者の方が魅力的に見える。なんでもありとは日本人だけが言えるもので、必要のない部分にまでもきっちりさせようとしてしまう日本人の癖というものを中国の国民性から感じた。

また訪中中では多くの出会いがあった。生まれも育ちも日常の環境もまるで違う日本人メンバーとの出会い、日本語を一生懸命話してくれた中国人大学生との出会い。その出会いはすべて良質なものであった。そしてその良質な出会いこそが僕に大きな気づきをもたらしてくれた。

これまで「良い縁だからこの縁を大切にしよう」と思いつつも連絡を絶たせてしまったりすることも多くあった。しかし、今回の出会いはまるで違うのだ。今でも会いたい気持ちでいっぱいで、メンバーとも西安の大学生とも10日経った今でも苦なく連絡ができている。

「つもりにつもって『人と出会うこと』というものを繰り返してきたけれど『結局これをいい縁とする』というのは自分の行動次第なんだ。そしてその行動というものは『この人と死ぬまで、50 になっても 60 になっても 70 になっても 80 になっても会っていたい』と自然と思えるこの思いによってなされるのだ。」という新たな人生観が生まれた。

それは「縁」というものの持つ義務のような働きから、僕を開放してくれるものであった。

3つ目は「興味の手」という存在である。この訪中で「興味の手が増える実体験」を僕は露骨なほどに、まじまじとできたと感じている。これを表すのは日本と中国の政治ニュース、 街中の中国語、大学内にいる中国人留学生などこれまで見向きもしなかったものに関心を 抱いている自分である。これこそが目で見て、耳で聴いて、舌で味わい、現地を感じる効用だと感じた。この実体験によって自分の中で「興味の手を常に増やすことを心掛け、そのような刺激的な人生の中で死んでいきたい」というある種の人生の理想像を持つことができた。これは本当に予期せぬ気付きであった。

これらが今回僕が紹介したかった3つの宝である。

今回、僕らにこのようなチャンスを与えてくださったことには感謝してもしきれません。 僕らのような恵まれた環境に居れた人が、つぎはそういう人を 1 人でも多く作る番だと思 います。

お世話になったすべての方に伝えたい、 本当にありがとうございました。

◆今回私は、日本大学生訪中団の一員として中国を一週間訪問した。中国を訪れるのは、今回が 2 回目であったが、初めて中国の北京を訪れたのは小学校一年生の時でありほとんど記憶はなかったので、今回の訪中が実質初めてであった。中国で過ごした一週間は、すべての一瞬一瞬が新鮮で、とても楽しく忘れがたい期間であった。実際、上海から日本に帰る日になって「日本に帰りたくない。班のみんなとこのまま中国に滞在したい。」という思いで胸がいっぱいになった。たった一週間ではあったが、中国で様々なものを見て、聞いて、食べて、様々な人と出会うことができた。私は、この訪中を通して中国のことがとても好きになり、それと同時に中国のことをもっと知りたいという思いが強くなった。

訪中前は、「中国」という国のリアルな事情に関する知識がゼロに等しいくらい乏しかったので、不安が期待を大きく超えた状態であった。しかし、今回一週間、団体でとはいうものの中国という土地で生活し、中国に対してのイメージが大きく変わった。4日目の夜、西安で友達とスーパーに行くことになり、ホテルの周辺をさまよっていたが、簡単には見つからず現地の人に近くのスーパーの場所を聞いてみることにした。私は、第二外国語で中国語を選択しており、週二回の中国語の授業を一年半受けてきたので、それなりの簡単な日常会話はできるレベルにあった。そのため、「このような体験は現地でしかできない。」と思い、勇気を出して現地の人に声をかけてみた。すると、どうやら近くに大きなスーパーがあるらしいが、想像以上に早いスピードで道を説明されたので、正確には聞き取ることができなかった。それを察した現地の方が、なんとスーパーの場所まで一緒に行こうと言い、15分程度かけてスーパーまで案内してくれたのであった。また、北京で国際関係学院の学生たちと一緒に夕食を食べた。その時に隣に座った学生が、食事中終始、私のお皿に何もないことに気づいた時、料理をお皿に乗せてくれたり、私のグラスが空になったら飲み物を注いでくれたりした。私は、この人並み以上の気遣いの程度に非常に驚いて、思わず「何でこんなに人

への気配りがお上手なのですか。」と聞いた。すると、「私は小さい頃から、両親に周りをよく見て行動し、人への気配りを大切にしなさいと教えられてきました。」と学生は答えた。私は、この答えを聞いて非常に驚き、そして感動した。このように、今回の訪中を通して私は中国の人々の温かさを感じることができた。たとえこれらの出会いが一期一会であったとしても、私はこの出会いを一生忘れることなく大切にして行きたいと思っている。日本に帰国して、もっと努力して人として成長し、他の人々と温かさを共有できるような心に余裕のある人間になりたいと思った。中国語も単なる必修科目で終わることなく、一生懸命勉強して、今よりももっとレベルアップしたいと思っている。機会があれば、中国への短期留学も行こうと考えている。

非常に刺激的でかつ貴重な体験をさせていただいた日中友好団体に心から感謝致します。 本当にありがとうございました。

◆訪中団に参加させていただいて、「学ぶ」という意味を再確認しました。訪中前の説明会で団長が、「机で教科書を使って勉強することが全てではない。自分の目で真実を知ることが大切である。」とおっしゃっていました。その意味がこの貴重な経験から知るとることができたと考えます。

日本がお隣の国である中国と関わりをもち始めたのは、はるか昔の紀元前 2~3 世紀までさかのぼります。そんな旧友である国に対し、今日の日本では否定的な意見が多く挙げられるのです。

国際関係学院訪問の際、私たちの班はメディアの報道の仕方について話し合いました。日本のメディアが取り扱う中国の話題は、ポジティブな話題よりも、ネガティブな話題のほうが多いという結論に至りました。例えば政治的な話であると、領土問題や歴史上の問題が挙げられる一方、ローカルな人々の問題としては、爆買いのマナーが悪い、列に並ばない、などが例に挙げられます。

いずれにせよ、中国に対しての良い報道を見かけることはほとんどなく、その影響でほとんどの日本人は中国に良いイメージがほとんどありません。また近年では、インターネットが普及するにつれて「匿名」であることを良いことに誰かが誰かを「言葉の暴力」で譏り、傷つけることが容易にできる時代になりました。それゆえ、まるで書き込んだ本人が全ての中国人を知っているかのような口調で、「中国人のマナーが悪い。」、「日本に来るな!」などと批判的な意見を一方的に書き込む日本人もいます。

一方、中国では日本はどのように報道されているのでしょうか。確かに、領土問題をはじめ とする政治的ないざこざは、日本と同様ネガティブな報道が多いようです。数少ないポジテ ィブな話題と言えば、日中首脳会談の後は、日本についての報道の仕方が少しは穏やかになったそうです。また世代別に見るとやはり、戦争を知っているお年寄り世代は日本に対してのイメージがあまりよくないそうで、これは両国で同じことが言えると考えます。

それではローカルな話題はどうでしょうか。同じように残念なトピックが多数を占めているのでしょうか。いいえ、そうではありません。驚くことに、ローカルな人々の報道はポジティブな意見が多いというのです。代表的なものはゴミの分別、時間を守る、電化製品をはじめとした日本人の技術力などです。また日本のアニメ、漫画に強い関心を持ち始めたおかげで日本語を学び始める学生も最近では多いようです。

また今回の訪中で最も心に残っていることは、ある中国人学生の言葉です。それは「中国と日本は兄弟のように親しい関係だよ。だから私は日本語を学んでいるし、日本をリスペクトしているのだよ。」というものです。私はこのとき彼女がいかに日本という国を知ってくれていて、どれだけ好きでいてくれているのかを肌で感じました。それと同時に、自分がいかに中国に対して無関心であったのか、と自分を恥じました。「好き」の対義語は「嫌い」ではなく、「無関心」です。訪中団のおかげでもっと中国を知らなければならない、知りたいと感じました。これからより多くのアンテナをたて、お隣の国の情報に敏感になろうと思います。

最後に、尊敬する一人の中国人の方がおっしゃいました。「中国の1箇所を見て判断しないでください。中国は想像以上に広いので、中国人でさえ知らないことがたくさんあります。他の人の意見を信用しないでください。自分の五感で感じたものを信用してください。」と。この言葉から私が読み取ったものは日中間の関係をより良いものにするためには、国家を変えるのではなく、ひとりひとりの意識を変えることなのです。そうすれば少しずつ友好関係を築き上げることができると信じています。この文章はたくさんの人々に読んでもらいたいという願いから書き上げました。もっと真の中国を知ってください。中国の方々とたくさん交流してください。日中友好のキーパーソンは総理大臣ではありません。

それは私でありあなたなのです。

◆私たちは6月1日から6月7日の間に"2018日中友好大学生訪中団として北京、敦煌、西安、上海を訪問した。中国を訪れることは初めてであり、ましてや海外を訪れるのは初めてであった。また、大学では理工学部ということもあり、第二外国語として中国語を学習していた程度の中国語の学習歴であったが、今回の訪中は非常に楽しみで期待を膨らませていた反面、不安がとても大きいものであった。

私の訪中前の中国に対する印象は、あまりいいものばかりではなかった。中国についての

情報を得る機会としては、テレビやインターネットが主になってきますが、そこで報道されているのは、大気汚染のことや、激しい貧富の差、偽装商品、そういったマイナスなことばかりである。そのため、隣国であるにもかかわらず、中国のことについて勝手なイメージを抱いていた。だからこそ私は、直接訪問して自分の目で"中国"を見る必要性を感じた。

実際に訪中してみて中国の文化、社会に対する見方が変化した。中国の食文化では、地方によって多様であると感じた。例えば、上海と北京と敦煌で比較した場合、それぞれの夜の屋台から見たところ、北京より上海の方が麺をよく食べることが示唆でき、実際に上海では手打ちの麺料理で長寿を願う習慣があるそうだ。また敦煌では、独特な香辛料を多く使った炙り肉の串焼きなどが屋台でよく見かけた。社会面では、印象に残ったことが主に3つある。1つ目は、中国の交通量の多さである。日本では見たことないくらいの交通量で中国の一部の都市では、乗用車のナンバープレート発給を新規に申請する場合、抽選やオークションへの参加が必要であることや、ナンバープレートによって通行できる日を決めているところは日本で考えられないことだった。他にもバイクなどの二輪車はほとんどが EV であったことや公共交通機関には電気を使ったものがほとんどであった。電気モーターの効率はガソリンエンジンのそれと比べてとても効率がよく率先して活用していくところは日本より進んでいるように感じた。

2つ目は、中国の歴史の深さである。北京での故宮博物院や頤和園では王朝の都を散策することができ、敦煌での鳴沙山では、砂漠が辺り一面に広がっており、初めて見る光景でした。また、莫高窟では約1000年の歴史あふれる壁画や仏像を見ることができ、世界遺産を身近に感じることができる貴重な経験になった。

3つ目は、若い人の力強さだ。中国の大学生は日本の大学生よりも勉強熱心で能動的でもあり、問題意識の高い学生が多いように感じた。国際関係学院や西安外国語大学の日本語専攻の学生は、流暢に日本語で会話ができており、教育水準の高さや個人の学問に対する意識の高さを感じた。大学内に学生寮があり、スポーツセンターや、食堂が完備されていて、若いやる気のある人やグループの取り組みをしっかり支える体制ができているので、中国はこれからも発展していけるのではないかと感じさせられた。私は中国の人たちと直に触れ合うことで、中国の発展の原動力を垣間見ることができた気がした。また、中国の発展の要因は、中国人は愛国精神がとても強く、Twitter や Facebook、インスタグラムなど、世界的に有名なアプリをシャットダウンして使えない代わりに、その機能に似た中国版のアプリを使用し普及していることもあると考えられる。

日中友好はアジアの中でも、世界の中でも大きな意味を持つと考えられる。現在の日中関係は領土問題や北朝鮮への対応など簡単には解決しない問題も残っている。様々な問題を平和的に解決し、日中両国が共に協力して国際的な課題に取り組んでいくことが大切である。そして最後に考えたことは、自分の目で見て、耳で聞いて、足で歩いたから多くの情報や学びを得ることができたということだ。今後は中国語を学びもっと世界に目を向けて、大きな視野を常に持つよう意識し、大学生活を過ごしていきたいと感じた。今回このような貴重な体験に参加させていただき、自分の世界への価値観が変化したよい経験となった。このよう

◆私は、日中友好大学生訪中団の団員として、初めて中国に行った。初めての海外というこ ともあり、不安が大きかった。しかし、この一週間は、毎日が刺激的で自分の人生の中でと ても大きな影響を与えることができた。今回、私たちは、北京、敦煌、西安、上海の4つの 都市に訪れた。私がまず、最初に思ったことは、それぞれの都市の大きさである。建物、道 路の広さに圧倒された。そして、様々な歴史的建造物を見た。その中でも、敦煌の莫高窟で の見学、鳴沙山に登ったことは自分自身にとって貴重な経験になった。そして、私が、この 日中友好大学生訪中団に参加して、一番印象に残ったことは中国の大学生の方々の交流で ある。私は、中国に対して、あまりいい印象を持っていなかった。なぜなら、日本のメディ アは反日的であるからだ。例えば、マナーが悪い、日本のキャラクターを真似するなどとい ったことである。しかし、実際に中国の大学生と交流をして、中国に対するイメージが変わ った。今回の日中友好大学生訪中団では、国際関係学院、西安外国語大学の2つの大学に訪 問し、交流をした。それぞれの学生たちは、日本語が流暢だったため、友好的に交流をする ことができた。そして、多くの学生が「日本の文化や、食べ物が好き」と言ってくださって、 とても嬉しかった。交流していく中で、中国の学生たちは、勉強が忙しく、アルバイトをす る暇がないということを聞いて驚いた。だから一所懸命、日本語の勉強をして頑張っている という話を聞いて、私も頑張らなければならないと、中国の学生から刺激を受けた。また、 様々な話をして、同じ趣味や、同じことに悩みを抱えているなどといった、共通する話が多 くあった。そのため、遠い存在から、一気に近い存在に感じることができ、よりよい、友好 関係を築くことができた。

私は、この日中友好大学生訪中団に参加して、一番に思ったことは、中国に対して、偏見を持ってはいけない、そして、今の日本にとって付き合わなければならない存在だと思う。今まで、中国に対して、いいイメージを持たなかったが、中国の学生と交流をして、お互いに文化を理解し合えば、遠い存在から、近い存在になり、友好関係を築けるのではないかと思った。中国は、隣国隣人ということもあるが、日本と中国の関係について、お互いに国の文化を理解し、交流の機会を増やしていく必要がある。そのためには、私たちの若い世代が日本と中国、それぞれの文化の違いを理解し、広めていくという、重要な役割が必要であり、求められる。今回の日中友好大学生訪中団の団員として中国に訪れたことは、非常に貴重な経験になった。私は、初めて中国に訪れ、中国の文化や歴史に実際に触れた。そして、様々な学生と交流し、中国が大好きになった。これから、学問に励み、機会があれば、また中国に行きたいと思う。また、多くの人に中国の良さを広めて、より多くの人に中国の文化を目で見て、感じてほしいと思う。

◆私が今回大学生訪中団第1陣に応募したきっかけは、1万円で中国に1週間行けるからで

す。中国の学生との交流は楽しみでしたが、正直中国への興味はそれほどでもなく、これからの日中関係を真剣に考えたりしたことはありませんでした。その上、中国のこともあまり知らないまま中国に渡りました。

しかし、私はこの訪中を通して自分の考えや、気持ちの変化を感じることができました。まず、最初に訪れた北京で衝撃を受けました。訪中する前、中国が凄まじい速度で発展していることは耳にタコができるほど聞きましたが、実際に自分の目で見て、想像以上のすごさでした。百聞は一見にしかずという言葉を体感した瞬間でした。さらに、北京では車が増えすぎてしまうため、ナンバープレートは抽選で当たらなければ貰えず、車持つことができないことを聞き、自分の常識を覆されました。

さらに、敦煌の莫高窟や西安の兵馬俑を訪れ、ガイドさんの話を聞くことで、中国の歴史を 肌で感じながら学習することができました。この経験は自分の人生でかけがえのないもの になったと思います。

中国の国際関係学院と西安外国語大学の学生との交流では、向こうが日本語がとても上手だったこともあり、両国の詳しいことまで話し合うことができました。私は何度か海外に行ったことがあり、そこでの中国人観光客のマナーの悪さが原因で中国人にあまり良い印象は持っていませんでしたが、交流した学生たちは優しすぎるぐらい良い人たちで、本当に楽しい時間を過ごすことができました。その中でも、西安外国語大学の学生は日本にとても興味があるみたいで、お互いにたくさんの質問をしました。僕は関西出身なのですが、ある学生は関西のノリやお笑い的な面白さを理解していて、とても気の合う人でした。長くても1日という短い時間の交流でしたが、WeChatを交換し今でも連絡を取るほど親しくなることができました。もう少し、交流の時間が長ければ良かったなと今も思います。

この訪中で、中国人に対する印象が良い方向に変わりました。しかし、海外で見た中国人観光客も、今回の交流で仲良くなった中国の学生も、中国全体から見ればほんの一部の人にすぎません。その一部だけを見て中国はこうだ、中国人はこういう人だと決めつけることだけはしてはいけないなと思います。今回の訪中で自分の目で見た事実や、触れ合って得た経験を真摯に受け止めたいです。

最初は中国のこともあまり知らず、ただ金額に惹かれて参加した訪中団でしたが、日本と中国の友好関係を真剣に考え、日本人と中国人がこれからもより良い関係を築いていけるように自分に出来ることをやろうという気持ちになりました。また、今回の訪中で日中だけでなく、全国各地から集まってきた同世代の仲間と出会うことができ、自分の人生においてかけがえのないものとなりました。今回の訪中に関わってくださった方々に感謝し、今度はこの経験を次に続く人たちに伝えていけるような活動がしたいです。

◆私は2018日中友好大学生訪中団第一陣に参加させていただきました。この貴重な機会を 提供してくださった全ての方々、このプログラムの運営に携わった全ての方々および私に 参加へのご協力と応援をくださった全ての方々に感謝しています。 今回訪問した、北京、敦煌、西安、上海で特に印象に残った出来事や訪問先をあげていく。 中国の首都、北京の国際関係学院では学生と、お互いの国の印象、大学生活などを語り、 中国と日本それぞれの現代社会や文化について理解を深めた。その後学生達とともに清朝 の乾隆帝が、母親の還暦を祝って造営したという頤和園を訪れた。暑い中での訪問だったが、 風光明媚な景観、大きな湖はまさに避暑に最適だ、と感じた。

砂漠のオアシス都市敦煌で、約1000年にもわたり石窟の造営が続けられた仏教遺跡、莫高窟は、仏教に関心がある私にとって非常に興味深い場所であった。実際に石窟の中に入ってみると、壁一面に仏教画が描かれ、最奥に塑像が鎮座していた。ガイドの方が一つ一つの石窟を解説してくださった。例えば、ある一つの石窟は女帝則天武后の時代に作られたもので、天井の壁画は男性の象徴の龍ではなく女性の象徴の鳳凰になっていて、その当時は女性の地位が高かったらしい。このように中国の歴史や当時の社会を学ぶことができた。ぜひ再びここを訪れ、700以上ある全ての石窟を見学したい。

かつて唐代の都長安が位置した西安。西安外国語大学での交流では、中国人学生と日本人学生が二人一組ペアになった。私はペアの中国人学生を「みーちゃん」と、彼女は私を「ぱんちゃん」とお互いあだ名で呼び合った。家族と離れて一人暮らしをしていること、少し臆病な性格なところ、夢に向かって勉強しているところ、多くの共通点を見つけては「同じだね。」と笑いあった。帰国後の今でもWe Chat というスマートフォンのアプリを使って連絡を取り合っている。

最後に訪れたのは中国を代表する都市、上海だ。上海雑技を鑑賞した。人間の身体能力を最大限に使い、磨き抜かれたまさに超人的な技の数々は時にハラハラし、息を飲んで驚き、美しさに感嘆するものだった。

訪中団を通して、私にとって親切な中国の方々に出会えたことが大きな収穫であった。訪中前、私は中国のことは好きでも嫌いでもなかった。ただ、「中国の多くの人は日本が嫌いなのだろう。旅行に行ったら石でも投げられたり暴言を吐かれたりすることもあるのだろうか。」と考えていた。しかし、ガイドの方々、交流した学生達など出会った中国の方々は皆親切にしてくれた。施設見学中や、町や市場を歩いていても日本人だからと差別を受けるようなことは一切なかった。写真を撮ってほしいとお願いして快く引き受けてくださったおじいさん、道を聞いたら親切に教えてくださったおばさんにも出会った。世論調査などで見るに、領土や歴史の問題などから日本に良くない感情を持つ中国人は多い。私が今回出会ったのは、日本に好意的な方々、またはそうでなくともあからさまに嫌悪を表すようなことはしない人や国の問題と個人は別と考える分別のある一部の人であるかもしれない。それでも、出会った人々の、日本人と仲良くなろう、私たちが楽しく安全に旅ができるようにしよう、中国を好きになってもらおうという優しさや温かさ、笑顔は真実で、思い出すと胸が温かくなる。今回できた繋がりをこれからも大事にしていきたいと思う。そして、それは日中友好への貢献にもなるだろう。

6 泊 7 日で奇麗なホテルに宿泊し、美味しい中華料理を食べ、美しい景色や歴史施設を見て、純粋に楽しみ、中国について学ぶことができた。しかし、それは広大な国土と長い歴史

を持ち、多くの人が住む中国のごく一部でしかないということも重々承知だ。ただ、訪中団を終えて、私は中国で出会った人々にもう一度会いたいし、中国を再び訪れさらに様々なことを知りたいし、何より中国が好きになった。日本に良い感情を持たない中国人が多いが、逆もまたしかりで中国に良い感情を抱かない日本人も多い。私の訪中団での体験を話すことでそういった人たちの中国への印象が少しでも変わること、中国に興味を持ってもらうことを願う。手始めに、数週間後に企画した訪中団についての大学でのプレゼンテーションを成功させたい。訪中団に参加して終わり、ではなく、今後も中国と関わり、学び続けようと思う。

## ◆初めに使節団を終えて自分にとってかけがえのない経験となったと思う。

訪中前、私は中国という国を全く知らなかった。知っていることといえば、近年中国が日本を追い越すほど発展遂げているということだけだった。中国の文化・歴史も中学校の教科書で学ぶ遺隋使、遺唐使を通して日本が中国の文化を学び模倣をして次第に独自の文化を発展させてきたということだけだった。つまり中国を知っているというよりも模倣した日本を知っているということだった。残念ながら訪中団の中でもおそらく無知に等しい人だったと思う。そんな自分だがこの訪中を通して本当に行ってよかったと思えるほど中国の文化・歴史を真剣に考えることができた。

一番印象的だったのは国際関係学院と西安外国語大学との学生交流であった。国際関係学院との交流では、直接現地の中国の人と話すのは初めてで、日本にいる中国の人と話すのでは雰囲気が違った。中国に住んでいる人の話を聞くとみんな「これも知ってほしい、あれも教えたい」というふうにせっかく来たのだからたくさん教えたいという感じを受けた。これはとてもありがたくとても話しやすかった。話す内容も難しいこともあるけれども大学生がかかえる将来、恋愛、日常など身の丈に合った話も多く、国は違えども考えていることは共通しているのかもしれないと思った。その後の頤和園見学は中国の学生も行き慣れたような感じでツアーガイドのように案内してくれた。この交流を通してお互いの相互理解の大切さを学ぶことができた。

西安外国語大学との交流は国際関係学院の時よりも一層相互に交流できたと思う。その わけは僕のペアがアニメについてよく知っていたからだと思う。そのおかげで僕のほうか らも日本のことを発信できたし、逆に相手側からも質問がたくさん出て交流の30分以上は その話で盛り上がった。交流時間は半日と決して長くはなかったが、十分に満足できる内容 だった。

中国の歴史については初日から故宮、頤和園、莫高窟、鳴沙山、西安、兵馬俑・・・など 多くの観光名称を行くことにより学ぶことができた。日本と違い驚いたことはその建造物 や自然が日本に比べて何千年も歴史があるということである。その分規模も大きく、関わっ ている人が多く現在まで保全・修復・管理など行い着実に受け継がれている。またシルクロ ードを通して中国の都市をつなぎ、ヨーロッパまでつなぐことで中国の強大さも感じるこ とができた。

最後にこの訪中を終えてこれから私たちが中国に対して関心を持ち続けることが大切ではないかと思う。この訪中が無駄にならないためにも日頃のニュース、新聞、直接の対話など多くの手段を通して中国に関心を持ち続ける、その際自分で考えるということが大切だと思う。特にニュース、新聞は第三者がかかわっているのでその信びょう性も疑いながら自分で考える。またこのきっかけを与えてくれたのは紛れもなく日中大学生訪中団なので感謝したいと思う。

◆今回、日中友好協会を始め、様々な人たちの支援のもと中国での7日間を有意義なものにすることができました。ありがとうございました。訪中に対する動機こそは現在の中国の生の状況をこの目で見てみたいということと、中国が現在発展途中の裏で起きている「421社会」の現状を中国の大学生とこちらの高齢化社会の問題点と共に議論できたらと考えていました。後者の「421社会」のことについてはこちらが思っているよりも認知はされているものの対策らしい対策はあまりされておらず、詳しい話ができませんでした。しかし、そのことを考える余裕すらなくしてくる中国の社会、風景、人々、習慣、考え方、全てにおいて圧倒されました。

私の中で圧倒されたというのは、日本と比較した上で中国の現状に感動、驚いたことを指します。中国の4都市を回ってそれぞれに良いところがありました。

北京国際空港では、飛行機を降りてからの空港内の移動手段において、電車、バスがありました。身体検査においては指紋登録から荷物検査と色々細かい印象があり、空港内の至る所に監視カメラもありました。この監視カメラに至っては空港だけに限らず、街中、大学の中、観光地の中と中国全土に監視カメラがあるのではないかと思ってしまうほどの量でした。国際関係学院の大学のとある教室にもカメラが 3 つあったがそれらのカメラはテストの時の監視カメラとして使われているということを生徒が話していましたが、日本人にとって中国の監視カメラの量は防犯のこと、プライバシーのことについて考えさせるほどの量でした。

敦煌は砂漠に囲まれたオアシスと言われるように、敦煌周辺には緑も多く、ホテルを中心とした周りには夜市もあって店も多くあり、北京や西安とは違って1つの場所にスーパーやレストランなどを凝縮した感じだったので歩いて観光しやすかった。飛行機の中から敦煌に着くまでは本当に緑1つ何もない砂漠だったので驚きましたが、驚いたことはもう1つあります。敦煌の夜市でお酒を飲みに行った時の話です。それは夜市の青空レストランのようなオープンスペースでの飲食の精算をするときの支払い方法が現金対応をしてなかったということだ。wechat やアリペイ(日本でのLINE)のようなケータイを使ったモバイル決済か、クレジットカードしか対応してなかったので、中国のキャッシュレス社会を直に感じた一面でした。最終的にはなんとか現金で対応してもらいましたが驚きを隠せませんでした。それまでも北京でコンビニに行った際に現地の人は会計をケータイをかざして済ませてい

た場面を見てはきましたが、ここまで浸透しているのかと思い知らされました。あとから中国の国際関係学院の生徒とのディスカッションでそのことについて聞くと、今じゃ若者だけでなく中国全体でモバイル決済の動きがあるという風に話をされ、その点においては中国の次世代の凄さを感じました。ましてや敦煌は都会ではなく、福井県のような田舎だったので余計に驚きました。

上海や西安では観光地の素晴らしさを感じることができました。西安ではやはり兵馬俑に 圧巻されました。秦の始皇帝がなくなって作られたものが今の時代に残っており、さらにま だ発掘できる状態ということに奥が計り知れない思いです。上海でのよく見る夜景スポッ トの外灘では中国はどれくらい電気代を消費しているのだろうかとふと思うくらい明るく 綺麗でした。他にも地下鉄に一回一回乗る際に空港の荷物検査のようなものをしているこ とにも驚きました。最近は日本で、新幹線の中で殺人事件が起きることがあったので、セキ ュリティの面では中国は1つ飛び抜けているのかもしれません。

最後に、隣国でありながらまだまだお互い知らないことだらけなのだと感じた訪中でした。 中国人のこと、中国の生活のこと、中国の最近の発展度合いのことなど、日本は隣国として 知っておかなければならないことが多いということを感じました。それに中国の大学生と ディスカッションをしたとき、彼らの真面目に学ぶ姿勢には見習わなければならない部分 がありました。このままでは日本が中国に抜かされてしまうと直感で感じました、そして平 和ボケしてる日本の大学生はこのままだとなすすべなく世界に置いていかれると感じまし た。訪中で経験したものは私の考えに新たな一面をもたらしました。この経験を何かの結果 に変えて、1人の日本人としても中国の人々に負けないように人生を歩んでいきたいです。

◆「百聞は一見に如かず」遥か昔、中国から日本へ伝わったことわざである。私が今回の旅 を一言で表すとしたらこの言葉になるだろう。

訪中前、私の抱く中国のイメージといえば、正直に言うとあまり良いものでなかった。身近に中国人の友人がいるわけでもなく、第2 外国語で中国語を選択しているのでもなかった私にとって、中国について知る機会といえばテレビや新聞、インターネットから見聞きするくらいのものだった。そしてそのほとんどが中国や中国人へマイナスなイメージを抱くようなものばかりだった。しかし、隣国であるにもかかわらず、義務教育から英語を学び、英語圏を身近に感じるように中国を身近に感じることのなかった私は、意外と中国のことを知らないのではないか?と、漠然と感じていた。"お隣であり、同じアジアの仲間でもある中国をもっと知ってみたい"そんな私にとって訪中団として実際に現地を訪れ、現地の人々と交流をすることのできたこの機会はとても貴重な体験となった。

今回初めて中国を訪れ、上記のように私は中国や中国人へあまり良い印象をもってなかったが、結果的にそれはこの1週間で大きく変わるものとなった。

その中でも私がこの 1 週間で最も印象に残っているのが、国際関係学院の大学生との交流 である。国際関係学院の学生との交流では、グループディスカッション、頤和園への参観、

夕食会が行われた。グループディスカッションでは中国の印象や日本の印象、お互いの国で 流行っていることや日本と中国の大学生の日常、恋愛観など多岐に渡るテーマについて意 見を交わした。私の今まで知らなかった中国と日本の価値観や文化の違いに触れ、中国・日 本お互いの理解を深めることができた。また、国際関係学院の学生による案内で頤和園を観 光し、大学生の憩いの場ともなっている頤和園についてたくさんのことを知ることができ た。夕食会では国際関係学院の食堂で回転テーブルに並べられた中華料理をみんなで囲み、 中華料理について教えてもらったり、たわいもないおしゃべりをしながらおいしいご飯を 食べ、さらに距離を縮めることができた。中国の友人たちはみな私たちを心から歓迎し、た くさんのおもてなしをしてくれた。こんなにも親切にしてくれる友人達と出会い、とても楽 しい時間を過ごすことができた。その他にも敦煌の莫高窟や西安の兵馬俑などの世界遺産 見学を通して中国 4 千年の歴史に触れ、どこに行ってもスマホ1つで買い物ができる最先 端のお買い物事情を知り、毎日美味しい中華料理を食べ(辛すぎる料理もあったが)、まさに 経済発展・社会開発の進む中国のエネルギッシュな活気を肌で感じ、お店で小籠包の注文の 仕方が分からず、困っていた私たちに日本語も英語もわからずも一生懸命教えようとして くださった中国の方の姿に、私は私が今まで知らなかった中国の姿をたくさん知ることが できた。

今の私がもっている中国・中国人へのイメージにはもう訪中前のマイナスイメージだけではない。親切にしてくださった中国の友人達や人々、都市の美しい街並みや4千年の歴史を物語る雄大な遺産、活気あふれる古き良き街並みの姿が目に浮かぶ。訪中前の私のように、まだ中国へ訪れたことのない人や、身近に中国人のいない人の中にはメディアだけの情報で中国や中国人を判断している人も多くいるだろう。たしかに13億人もいればいろいろな人がいるかもしれない。ただ(これは中国人だけということではないが)、どこの国の人であっても"何人だから"という括りや偏見だけで相手を判断せず、文化や価値観の違いがあれど、その人個人個人として向き合っていくことが大切であると感じた。

私はこの 1 週間で学び、感じた私の中国や中国人への思いを大切にし、たくさんの人に伝え、メディアで知る中国が全てではないことを知らせていきたい。

「百聞は一見に如かず」私は今回、中国で生まれたこの言葉を中国の地で、身をもって感じることができた。そしてまた必ず中国へ訪れたいと思う。

最後に、このような貴重な経験をさせてくださった中日友好協会、日中友好協会をはじめ私たちを歓迎し、親切にしてくださった全ての団体、中国の友人たちや中国の方々に感謝の意を伝えたい。谢谢!

◆今までもっていた中国という国についての意識が変わりました。行く前までは、かなり経済的にも発展した中国だからある意味「日本社会」のようなものを想像していました。日本にあるような建物と道路、乗り物が普通にあるのだと思っていました。しかし、北京の環状線沿いに立ち並ぶ無数のビルは大きな衝撃でした。あれほど大きなビルが一定間隔で視界

の限りに立ち並ぶ。自分はその光景に圧倒されるとともに少し違和感と恐怖心を持ちました。東京のように大きなビル小さなビルが混在しているのは滞在した地では上海が一番近い気がしました。短時間に驚異的な社会発展をするうえで、日本とは異なる強い権力が上にありその指導の下成長していくという光景を目の当たりにした気がしました。

中国で見かけた多くの車が日本でいう「高級車」であったことには驚きました。本当に、日本に帰ってきて一番初めに思ったことが「車が小さい」ということであるほどです。また、日本車がもっとたくさん走ってるものだと思ったのに意外と少なかったことも驚きでした。中国の学生に確認したところ、確かに高級車が多いことはたしかで、中国人は特に社会的なメンツを重視するからだと言っていました。たしかに今経済力がありお金を持っているということもあるけど、無理してでも少しいい車を買う人が多いということを聞きました。日本人はどちらかと言えば軽自動車やコンパクトカーなど実用的な車を選ぶ人が多いから少し感覚が違うなと感じた瞬間でした。

日本文化と共通点を強く感じたのは、庭園の作り方です。おそらく中国発祥だと思いますが、 借景であったり石の配置に様々な意味を含める方法など日本庭園にもみられる方法がたく さんあることにやはり、日本と中国はつながってるなと感じました。

自由とは何か。自分の考える自由と中国人の学生が考える自由はその内容が一部違うと思いました。社会主義の枠の中で考えることが自由であるのか、一方民主主義にも枠があって自分が知らず知らずのうちにそのなかで自由が制限されているのかはわからないが、少なくとも自分にとって中国は少し自由に制限があると感じました。しかしむしろ、道路や表現の制限があるけれど生活に困るほどではない。逆に中国にいる間、一切の制限を感じなかった。確実に日本に比べたらなにかの自由を制限されているのにそれをあまり感じさせない、そのことがすこし怖いと思いました。

いたるところで社会主義の理想を掲げた看板を目にしました。国際関係学院のなかでも 習近平国家主席の社会主義を称賛する言葉を見かけました。自由民主主義体制の日本から 来た自分にとってその光景は初めかなり異様に感じました。自分たちの感覚でそれを考え れば国家による特定思想の強制であり憲法上禁止されている行為だけれど、それが当たり 前の環境で育った中国の人はどう感じるのか。

お隣の国だけれど、社会体制や政治システムが異なる中国は、言語や文化を通して幅広い 関係と似たものを感じる部分は多かったけれど、人々の考え方だったり社会のありようは 大きく異なる部分もあることを痛感する旅となりました。しかし大変興味をそそられたこ とも事実です。上海のお茶屋さんのおばさんに「中国を知りたきや中国語を勉強しなさい」 と言われた通り、もっとこの国について理解したいと思います。

◆私たちは、日中友好協会が主催する訪中団の一員として、6月1日から7日までの1週間、中国の4都市に訪問しました。この事業は、中国政府から招待された大学生が全国から100人集められ、中国の各都市の歴史や文化を学びながら現地の大学生らと交流・ディスカ

ッションをするというものです。今回の訪中で私たちは、国と国を繋ぐ架け橋となる、そんな一端を担えたのではないかと思います。

近くて遠い、そんな隣国中国。皆さんは一体どんなイメージを持ちますか?良いイメージ、悪いイメージ、おそらく複雑な感情を持っている方も多いと思います。私も実は、その一人でした。連日、メディアで報道される中国や中国人の方の姿を見ていれば、誰もがそう思ってしまうのではないでしょうか。しかし、学内外で中国からの留学生の子たちとの交流を深めて行くうちに、彼らはとても優しく、日本に強い関心を抱いていることに気づきました。ここで、メディアのそれは中国の中のほんの一部分にしか過ぎないということが見えてきました。

「中国という国の本当の姿は?」

この疑問がこの事業に参加したきっかけです。自分の目で、耳で、確かめよう。そんな想いでした。

訪中しての感想は、大きくまとめると「百聞は一見にしかず」です。訪中前に想像していた中国の姿とは異なる国がありました。特に、訪問した4都市における歴史的遺構の壮大さは、実際に見てみないとわからないものがあります。北京の故宮博物院、頤和園、敦煌の莫高窟、西安の兵馬俑、これらは中国が奏で続けてきた文化が、いかに広く深いものかということを物語っていました。2大学との交流では、お互いにこれからの国を背負う身として、とても有意義な議論をすることができました。また、大学生らしい、お互いの恋愛話や日常生活、将来の夢を語り合うこともでき、一生涯の友達ができました。中国の国としての姿や国民性は、実際に行かずにわかるものではありません。

太古昔から現在まで、日本と中国は隣国として長い歴史を紡いできました。これからもそれは末永く続いていくことでしょう。お互いになくてはならない存在であるとともに、学ぶべきところを吸収し合い、これからも良好な関係を築いていきたいです。訪中中、団長が何度もおっしゃっていたように、自分の目で見て、耳で聞いて、舌で味わって本当の中国を感じるということが今回の目的の一つでした。しかし、本当の中国を知るのには、4つの都市だけではまだまだ知識不足であり、長期的な交流が必要になると思います。そしてこの事業を終えた今、これからも様々な形の交流を通して、友好活動を行なっていきたいです。

最後に、この事業を通して得た 100 人の大学生と事務局の方々との出会いは、私にとってかけがえのないものになりました。本当に出会えてよかったと思える、とても刺激的な出会いでした。また、中国側からは終始心にしみる温かい歓迎を賜り、こんなにも素晴らしく貴重な体験をさせていただいたことに、本当に感謝しかありません。この感謝を胸に、日中両国の架け橋としての自覚を持ち、これからも友好活動を行なっていきたいと思います。

この事業に携わった全ての人々に心からの感謝と敬意を表して。

◆北京、西安、敦煌、上海。中国に行くことができて、本当によかった。日中友好協会の皆様をはじめ、この旅を実現させることに協力してくれた全ての皆様に、心から感謝がしたい。

ありがとうございました。

中国から帰国した瞬間、私の頭には1つ、どうしても実現したいことが舞い降りてきた。「もっと多くの日本人に、中国に行って欲しい」。そして、メディアなど外部から形成される中国のイメージではなく、自分の内から中国に対するイメージを形成して欲しい、と強く思った。そのため、とりあえず、母校である中央大学で、一人でも多くの日本人学生を中国に渡航してもらうことをミッションとしたサークルを立ち上げた。中央大学から今回の訪中団に一緒に渡航した私以外の2人に協力をしてもらい、今回の訪中を次のアクションに生かしたいと強く思い、行動を起こす事に至った。実際の活動などは、正直まだまだこれから色々と考えて行く必要があるが、中国旅行コンサルタント的な立ち位置で、これから中国に行くポテンシャルのある日本人学生と、中国について良く知る学生・社会人をマッチングさせ、情報共有、ネットワークづくりに貢献し、一人でも多くの日本人学生が中国に行きやすい・行きたいと思う環境を作りたいと思っている。渡航した先で、彼・彼女らが、中国に対してポジティヴ・ネガティヴどちらの感情を抱くかにはあまり重きをおいておらず、彼・彼女らが、自分の目で中国を見て、感じて、何を思うか、それを自分の中国に対するイメージとして持って欲しい、とそう思っている。

私は、中国渡航を経て、やっと自分の中国に対するイメージを持つことができた。そのことが何より嬉しかった。中国渡航以前、私は、「中国」と聞くと、尖閣諸島問題などのニュースが頭に浮かんでいた。今思うと、私の頭に浮かんでいたそれは、私が直接関係したわけでもなんでもない、メディアによって造られたイメージであった。そのイメージがある為に、中国や中国人に対してあまりポジティヴな印象を持たずにいた。それは非常に悲しく勿体無いことであると、今改めて思う。そして、もしもこれが私だけでなく、多くの日本人にも同じことが起こっているならば、もっと悲しく勿体無いことであると思った。この状況をなんとかしたい。そのためには、一人でも多くの人に中国に行ってもらわなければならない。本プログラム、日中友好大学生訪中団は、非常に素晴らしいプログラムであると思う。年に3回も、300名の大学生を中国に派遣することは、私にはできない。だが、私にも必ず何かしらできることがあると思っている。そのため、日中友好協会に比べると非常に微々たる運動であるかもしれないが、今回立ち上げたサークルを最大限に動かし、一人でも多くの大学生に中国に行くきっかけを与えるため精一杯活動したいと思う。私の今の行動の全ては、本プログラムのおかげである。改めて感謝をし、また、この経験を今後の活動に生かして行くという強い意志をここに示したいと思う。

◆「百聞不如一見。」百聞は一見に如かずとは、幼い頃から聞くことわざであるが、今回の 訪中で改めてその意味を体感した。中国は古くから日本との往来の歴史を持つ国であり、そ れゆえ日中双方の民間レベルでの交流も長い歴史を持つ。それほど身近な国でもある中国 に対して良いイメージを持つ日本人はまだまだ少ないのではないかと感じる。今回日本大 学生訪中団として人生で初めて中国を訪れ、自分の中国や中国人に対する印象が変わり、 またこれからの中国との関わり方に対する考え方がより明確なものになった。

訪中以前の私の中国に対する印象は、他の大半の日本国民と同じで、あまり良いものではなかった。特に私は台湾人の友人が多く、彼らから聞く中国への印象が自分の感じ方にも影響を与えていた。台湾は親日で有名であり、日本の震災の際などにはいち早い支援をしてくれる。このような自分の中での台湾への好意が、その台湾と微妙な関係にある中国への印象を悪くしていたのかもしれない。また、国レベルでは発展途上国における資金力に頼る開発、民間レベルではいわゆる「爆買い」のイメージの強い中国には良いイメージはなかった。そんな偏見というフィルターを通してしか見たことのない中国、噂でしか知らなかった中国の現状、生の中国はどういったものなのかを知るために今回の訪中団に参加した。

訪中の間には、中国の大学生との交流や歴史遺産を巡り、文字通り「生の中国」を体感した。この訪中で感じたのは、自分は中国のほんの一部しか見ていなかったということである。特に若者との交流を通して、お互いの国の間には取り除かなくではならない壁があると感じた。それは両国民のお互いに対する偏見でもあるし、またそれを作り出すメディアなどの偏った放送である。私は今回できた中国人の友人といまだに連絡を取り合っているが、この訪中後の交流の中でも偏見が消えていく経験をした。例えば日本人は授業が終わった際などにはお疲れと言ったり、何かを教えてもらった時にはありがとうと言ったりする。しかし中国人は親しい仲の友人にはいちいちそのような言葉はかけないのだという。このようにお互いの文化をより深く知り、お互いの国民性などを理解することがお互いの偏見をなくすことに繋がるのだと改めて理解した。

私はこれからの日中関係のさらなる発展のためには、両国の協力関係、信頼関係をより強固なものにする必要があると強く感じた。なぜなら、国家レベルの信頼関係は、国民レベルでの信頼関係を生み出すからである。例えば、日本はアメリカと非常に強固な同盟関係にある。それゆえ両国民はお互いに信頼し合っている。このような信頼関係を日中両国が作り上げていくことは、民間レベルの友好関係をさらに作り出していくのみならず、両国の発展にも大きく寄与することになる。私は将来そのような両国の関係作りに携われるよう、これからも中国を訪れ、さらに深く中国を理解できるように努めていきたい。

◆突然だが、生まれた場所も、学ぶ大学も、学年すら違う日本の大学生 16 人を集めて、1 つのチームとする。あなたはそこの副班長だ。一日目、顔合わせの日に班長が暴走して班員に嫌われた。

その後一ヶ月強、顔は合わさないがチャットで連絡を取り合う。そこで班員が連絡をぬかり、 班長キレる。班がバラける。いざ今日から班員と班長合わせて15名とともに一週間中国に 派遣される。あなたはこの一週間を楽しむことができるだろうか?

私の経験から言うと、思い出すとにやけてしまうくらい楽しかった。中国で触れた文化はとても新鮮で、現地で食べた料理はとっても微妙で、いざ目の前に迫った中国の絶景の数々は心を動かされるに値するものだった。ここで細部を記すのは控えるが、自身の目と口と肌で

中国を感じれただけでもとても勉強になった。ただ、今回の訪中から一つだけ選んで感想と して述べるとすれば、やはり前述の通り我らが愛すべきチームについてだろう。

私は班に 2 人いる副班長というポジションだった。特にえらいことはしていない。班の点呼、忘れ物確認、あとは移動の際のシンガリくらいだ。我らが尊敬すべき班長は謎の理由にて班員の反対を押し切り LINE 禁止令をしき、不満があればなぜかグループチャットで独り言のごとく呟く、困った人だ。言っている事は筋が通っているのだが、理由をすっ飛ばして結論を言ってしまったり、相手の感情を考えず行動してしまったり、そのくせメンタル弱いから班員の悪口が心にグサグサきてしまう憎めないタイプ。対して班員は行動力抜群で、もうず・自由。自分達の楽しみを追求する人が多かったように感じる。さてあなたが副班長ならどうするだろうか?

まぁ私は、何もしなかったのだが。最初は世話を焼こうかとも考えたが、別に副班長の仕事 にそういったものがあるわけではないし、そもそも彼らが自分の手におえるとも思わなか った。私は私で一団員として訪中を楽しませてもらった。

ただ驚くべきは、彼らは最終的に自分たちで話し合い、お互いの非を認め、最後はみんなで 笑っていた事だ。詳しい経緯は全て省く。胸熱なエピソードなので、是非班員のだれかを捕 まえて直接話を聞いていただきたい。本当に捕まえられたら厄介なので、胸熱ではないと速 攻で前言を撤回をしておく。

私が言いたい事は、たった一週間で、中国に、私含めしがない学生達は、自身の非と他人の 是を認められる人間に成長させられたという事だ。

仲間とともに、壮大な景色に感動し、四つ星ホテルで夜な夜な語り合い、中国の学生と触れ合って危機感を覚えたり。たったの一週間だが、得られるものは感動や焦り、濃い人間関係、そして自身の成長の機会だ。具体的に他者を許容できる包容力と自分を客観的にみれる自己分析力が養われる。

海外に足を向けてる学生は「いまの日本はグローバルじゃない」「外国の方が楽しい」「外人の友人恋人を作りたい」というようなことをよくおっしゃられる。恐縮ながら一言申したい。全く知らない日本人学生とともに外国、特に学生に勢いがある中国に派遣されてこい、と。日本にいる以上に日本人のアイデンティティや日本のあり方、そしてその課題や良いところに気づけるはずだ。

末筆ながら、このような成長の機会を与えてくださった日本中国友好協会の皆様、私たちを 暖かく迎えてくださった中国日本友好協会およびその関係者の皆様に心から拝謝致します。 有り難うございました。

- ◆訪中前の中国へのイメージは以下の通りである。
- ①強か
- ②治安が悪い
- ③統制が強い

## ④語学が得意

⑤第二列島線に基づき、小笠原諸島までの領有を本気で狙っている これが訪中後変化したか否か、そしてどのように変化したか述べる。

まず①の「強か」だが、これは今も変わらない。百薬の効能を自分の体を以って試したという神農の逸話や、他人の家にあるものを気にいると「これをタダで私にくれるか?」と聞いてきたという父の体験談そのほか多数に基づき訪中前にこのような印象を抱いていた。中国現地に行っても、強か、悪くいうとぶっきらぼうであった。しつこく物売りが寄ってくる、物乞いも巷に溢れている、学生は少しぐらいの遅刻は全く気にしないという具合だ。もちろん物売りや物乞いは両国の規制や格差の差であったり、学生の標本数はせいぜい 3 人で我々の班にもそれぐらい時間にルーズな人はいるのだが、とにかく私のこのイメージは変わらない。

②の治安が悪いは、初めから気構えて行ったからか現地でそのような印象は受けなかった。中日友好協会の女性職員である董さんの話によると、人によってはバッグの紐を切られてスられるという手間のかかった犯罪に何度も遭うが、それ以外の人には無縁の話らしい。なんでも国全体が豊かになったせいで、スマホを盗んでもあまり得にはならなくなったからとも聞く。電子決済の普及により多額の現金をスれる見込みも薄いというのもあるのだろうか。いい意味で拍子抜けしてしまった。

③の統制が強いは、やはり節々で反政府組織への弾圧や一部のネットコンテンツの利用の制限を耳にした。しかし、現地の人たちはあまり不便に感じていない印象を受けた。ネットで少し調べてみると、外国人旅行客はもちろん頑張れば中国在住者でも VPN 接続で禁止されたネットコンテンツを利用できるというから、あまり厳しくはないらしい。しかし、その規制で中国由来のコンテンツが急成長したというから、国内のネット産業の発展の後押しとしては十分貢献したと言えるだろう。思ったよりは悪影響を確認できなかった。強いていうなら、今回触れ合うことのなかった自治区の住民の不満が民主化運動として表れ、それを政府は秘密裏に抹殺しているらしいという噂を聞いて慄いたぐらいだろう。

④の語学が得意は、現地でもその通りだった。今回交流した大学生は日本語を専門としているからか英語、日本語どちらもうまかった。特に英語は皆、日本学生のトップクラスの実力を持っていて敬服した。この差がどこから来るのか、私自身の中国語の先生などといった少ない情報から推測すると、とにかく習ったことをすぐ実践させるという指導を主眼に置いているのが大きいと思う。学生から聞いた勉強法もシャドウイングといったさながら予備校のようなものだった。

⑤の領土問題については、中国学生はあまり関心がないようだった。というより、政治そのものに対する興味が薄かった。これは統制によるノンポリ気質なのか、単にそのような学生に当たってしまっただけなのか微妙だが、とりあえず領有の意思は感じられず日本とは友好的に付き合いたいというような印象を受けた。もともと列島線も中国軍部が勝手に打ち出しているだけであって、政府も乗り気なわけではないと聞いていたが、どこまで気を許していいのかわからない。警戒心は薄くなったが今でもなんとなく解きたくない。

イメージの変化は以上である。要するに、我々の間には違うところもあれば同じところもあるのだ。そして、統合するには違いすぎるし、排除するには同じすぎる、だから今の関係のように経済的に時には競争し時には協調する対等なライバルであるべきというのが結論である。同族意識というのは安心面で多大な威力を発揮するが、異端を追い出すのに逃げ場を作らない必要はない。もちろん自分が理解できないブラックボックスは無くした方が安全の確かさは上がるだろう。しかし相手も人間だ。我々が追い詰められると全力で抵抗するように彼らも全力で抵抗するだろう。そして彼らもすぐ潰されるような低能ではない。抵抗が長引き、自国にも無視できない損失が生じるから折れて共存に走るのである。また、他国と比較し自国の方が優れているところを粗探しして精神的な安定性の糧としようとする傾向もある。それは協調によって得られた技術・文化の発展の促進という恩恵に勝るものなのだろうか?私は前者のような相対的な優越に安住せず、後者の絶対的な優越を世界中の人々とともに求めていきたい。

◆私は実際に訪中するまで、中国に対して良い印象は抱いていませんでした。マナーの悪さや尖閣諸島問題など、メディアを通してしか中国を見ていないことが原因でした。良くないイメージから、未だに中国へ行ったことが無く、実際の中国を自分の目で見て、確かめたいと思ったことが、この訪中団に参加したきっかけです。

今回の訪中で印象に残ったことは大きく2つあります。1つ目は、スケールの大きさです。 4 都市をまわるという日程はかなり過密で大変でしたが、中国の東西南北をまんべんなんく 見ることができました。北京では、一つ一つのビルの大きさが、日本の東京と比べものにな らないくらい大きかったり、華美に装飾されていたりして圧倒されました。スケールの大き さを感じたのは、ビルだけではありません。歴史的建造物もでした。故宮へ行った際には、 縦に大きく広がる構造に驚きました。全て同じように見える門も、細かく見れば違っていて、 皇帝の権力の大きさを物語っているようでした。頤和園の長廊の梁にはたくさんの美しい 絵と、そこを吹き抜ける風が大変心地よく、歴史のロマンを感じました。そして、今回私が 一番好きになったのは敦煌です。莫高窟は、外見の質素さからは想像もできないような世界 が内部に広がっていました。壁画や仏像は時代によって全く違う姿をしており、当時の文化 や芸術、宗教の様子を反映しているのが見てとれました。当時の人々はここで何を思い、感 じていたのだろうかと想像に浸ってしまいました。また、真っ青の空と、砂山のコントラス トがすてきな砂漠にも感動しました。私は、日本にある鳥取砂丘に行ったことがありました。 しかし、これこそスケールが違うと感じました。自然が作り出した壮大な景色に一瞬で心を 奪われました。このように一つの中国がいろんな顔をもっていることがとても興味深く、日 本の約25倍の国土面積を持つ中国ならではだと思いました。

2つ目に印象に残っていることは、中国の大学生と交流したことです。2日目に行った、国際関係学院の大学生は最初からあたたかく出迎えてくださり、とても嬉しく思いました。ディスカッションでは、今、流行っていることや、学生の毎日について話が特に盛り上がり、

中国も日本の学生と共通するところがたくさんあるのだと気づきました。お金の支払い方法については、中国は若い世代を中心に携帯電話による支払いが増えているということで、財布をほとんど持ち歩かないと言っていたことに驚きました。携帯電話を無くしたときに大変だというデメリットも聞きましたが、やはり便利そうで、日本でも取り入れたらよいのではないかと感じました。5日目は、西安外国語大学に行き、ペアになった女の子といくつかのテーマについて話し合いました。私は、日本で中国人のマナーが悪いというニュースが流れていることを正直に話しました。すると、そういう大人がいることは分かっていて、そんな人が日本に行ってよいとは思っていないと言ってくれました。想像していなかった返答で驚いたのと、どうにかしようとしっかり考えてくれていることに喜びを感じました。また、親や祖父母に反対されながらも、日本のアニメが好きだからという理由で、日本語の勉強をすることに決めたということも聞いて、うれしくなり、もっと私も中国を知って関係を深めていきたいと思いました。

今回の訪中は私に大きな影響を与えるものになりました。日本と中国の政治の関係は今、良い状態とはいえないかもしれませんが、根本にあるのは人と人との関係だと思います。同年代の学生と交流し、私たちは互いに認め合っていけると確信しました。ひとつひとつの関係作りが国と国との関係作りにつながると信じて、これからも学んだことの情報発信や、関係作りに携わっていきたいです。本当にこのような素晴らしい機会を与えてくださりありがとうございました。

◆私は大学で中国語や中国文化について学んでいる。だから、中国の歴史や文化に知っていたつもりであった。実際、中国の伝統芸能や、地理については人並み以上に知っていた。しかし、その中国の発展はものすごいスピードであると聞き及んでいながらもそれはあくまで知識としてであり、本当かどうか疑っていた部分があった。

今回訪問した都市である、西安は4年前、私は訪問したことがある。中国の歴史に興味を持った私は西安を訪れ、様々な歴史に触れたことには大きな驚きがいくつもあり、とても印象に残っている。西安の地元の人と交流したいと思い話しかけたが英語が通じなかったことは、私が中国語を勉強するきっかけの1つである。中国で初めて訪れ、強い印象があった西安は4年前とは大きく様相が異なっていた。例えば交通だ。訪問当時は道を渡るときにひかれやしないかとびくびくしながら渡ったり、信号がないような運転を車がしたりしていた。しかし、4年ぶりに訪れた西安は人が渡るときに車がきちんと停まるようになり、交通ルールがしっかりとしていた。また、あちこちが整備され、記憶にあるよりも綺麗になっていた。その、変わりように本当に驚かされた。

私は大学に留学生の友人が多い。彼らは日本語が非常に堪能であり、日本に対する理解も深い。そういった彼らと接する機会は大事であるし、貴重ではあると思っていたが、私は常々日本に来たことのないような中国の学生との機会が欲しいと思っていた。留学生の友人は日本に理解があるため、お互いの人間関係にあまり困ったことがない。日本をあまりよく知

らない学生と交流するなかで困ったことや、うまくかみ合わなかったことは民間の日中関 係がどのようなものか、といったことや中国の今まで気づかなかった良さだけでなく、ひい ては日本の良さにも気づけると思ったからだ。北京の大学生と交流し、公園に行ったとき知 らない人が出身地を聞いてきた。日本だと答えたら、すべては聞き取れなかったが悪態に近 いものをつかれた。交流した大学生は、それを言われた私たちの前にすっと入り、追いやっ てくれたと同時に何を話していたのか決して話そうとしなかった。今回分かったことは日 本において SNS 等で中国に対して過激なことを言っている人がいるのと同じように、中国 の人にも日本に対して良い印象を抱いていない人はいる。しかし、相手に不快な思いをさせ まいとする思いやりだとかは国が違っても変わらないのだと感じた。また、学生生活を比べ たときに多少生活の仕方は違えど、友達と話す時間が好きだったり、恋人に夢中になったり、 勉強がうまくいかなかったりといったことは同じで何も変わらないのだな、と思った。 今まで、日中交流・友好と聞いたときに私は重くとらえがちであった。たとえば、政治や歴 史の話などしなければ!などと気負っていたように思う。今回、交流したことで個人として の共通の趣味を見つけ、とても仲良くなることができた。今まで、授業において日本の中国 に対してしてきたことは確かに知らなければならないし忘れてはいけないと思う。しかし、 それは一旦置き、そういったところとは別の場所にいる個人としての日中交流、友好をはか ることはこれからも大学生という立場に居ながら容易にできることであると感じた。最後 に、今回中国の学生と交流したことでますます中国留学したいと思った。懸命に勉強して是 非留学試験に受かりたい。

◆中国に対してのイメージを問われるなら、今までは、人口が多く混沌としている国と答えるだろう。しかし今、訪中を終えて思い返してみると、やはり広大で力強く、幾度も圧倒されたという記憶が大きい。北京でバスから眺めた外の風景、そこには日本の何倍・何十倍もの大きな建物が煌びやかな様子で立ち並び、片車線だけで6レーンもある道路では、夜でも車の列が途切れることはない。敦煌では地平線まで伸びる砂漠と山が延々と続き、いったいこの国はどれだけ広いのだろうかと感動さえ覚えた。敦煌から西安への飛行機の窓からは、ひたすら続く山脈の長さに驚き、太古にすでに勃興した万里の長城やシルクロード、そして一帯一路計画の壮大さをひしひしと感じられた。上海では、日本では見たこともないような奇抜な形のビルに混ざり、見たことがある日本企業をはじめとする外資を目にし、より一層の経済発展、まさにその瞬間に立ち会っている気分になった。普段東京という一都市のみで生活しているため、行く先々によって景色ががらりと変化することは私にとって非常に刺激的なことだった。都市をまたぐと、これまたまったく違う景色を見せてくれる、これほど面白いことはないと気づかされた研修でもあった。

中国文化もこの研修において忘れられないものとなった。食事先や空港先では冷や水が出てくることはついぞなく、代わりに提供されたのは白湯か温かいお茶であった。中国といえ

ば漢方であるように、体のことを内側からいたわろうとした結果なのだろう。中国は方言も 日本とは比べ物にならないほどふり幅が広く、西安のタクシーのおじさんが教えてくれた 方言も、上海のバスガイドが話す上海語も、もはや別の言語に感じられた。中国という国は 56 もの多様な民族によって成り立ち、それぞれの民族・地域において豊かな文化をはぐく まれていることを実感することができた。

しかし学生と交流するとき、同時に私たちと変わらないものも感じた。学校の勉強に励んでいること、恋愛に興味があること、まさに私たちの同世代と同じように青春を過ごしているのだと親近感を感じた。町では写真撮影に快く応じてくれる人、困っていることが伝わったのか、まだ聞いていないのに道を教えてくれる人など、多くのやさしさに触れた。それは日本での中国に関する日々の報道では決して見ることができなかっただろう人間味であり、今回実際に感じることができた。それと同時に当たり前のことが当たり前のように私たちに伝わっていないことについて、あらためて両国における生身の分かち合いがはばかれていることを実感した。もともと日中関係に興味があり今回の研修に参加したが、より一層両国の懸け橋になることができないか、模索するきっかけが増えることとなった。

訪中団の先々で出会うものすべてが印象深く、目まぐるしく移り変わっていった四都市を またいでの研修は、一週間という期間ではあまりにも短く、名残惜しい。いつか絶対に自分 の目で、また中国の広大な土地を見に行ってやろう、そう私は画策している。

◆今回の訪中団を終えてまず考えたのは、「百聞は一見にしかず」、この通りであるということである。私は大学一年生の時から中国語を学んでいること、そして今も近現代中国を専門に学んでいることから知識はある程度持っていると思っていたのだが、一人っ子政策が実施されていた頃と現在の状況や、中国人が考える日本人についてなど、日本で学ぶ中国と直接中国に行って目で見て聞いて感じる中国との違いに驚くことが訪中の間に何度もあった。私が今回訪中団について知ったのは、ゼミの教授からの紹介であった。大学入学当時は中国に関心など微塵もなく、国際関係学科に所属しながらも曖昧な価値観を持っていた。そんななか、偶然選んだ第二外国語が中国語で、その時の担当教授が今のゼミの教授であった。彼の話は授業内容や中国に関する余談を含めてすべてが興味深く、それまで全く関心のなかった中国について、また中国語についてどんどん関心を深めていった。

今回の訪中団には、私の大学からは私一人の参加であったけれども、4月の研修会の時の暖かな雰囲気から、不安は少しもなく参加することができた。3班のメンバーは、学年は異なるものの気を遣いすぎることもなく、1週間共に生活した今は友達以上の関係のように感じるし、彼らがいたからこそ学ぶことができたものも多いと思っている。例えば頤和園に行った時、莫高窟に行った時、何気なく共有し合う感想の中には、わたし一人では浮かばなかったようなものがあり、一人でいる何倍もの学びを得ることができたと感じている。

さらに、旅行ではできない、訪中団ならではのイベントは、現地大学生との交流会である。

わたしの大学は小さな学校なので、基本的に留学生は少なく、特に中国からの留学生はなかなか見かけることはない。現地の中国人大学生との意見交換は非常に有意義なもので、普段日本で読んでいる本や資料からは得られないような、生きた意見を聞くとても良い機会であった。私は自分から発言するようなタイプではないのだが、今回は進んで発言したり質問したりすることができた。また、現地では中国人の大学生側が日本語で話してくれていたので言葉に詰まることはなく、当たり前のように会話をしていたけれども、これはすごいことなのだと後になって気がついた。私にとって、英語で議論して自分の意見を伝えることすら難しいのに、中国語でそれをするのは今の時点ではまだ考えられない。「中国の大学生は熱心に勉強する」というのは、これまで中国語の教科書や教授から学んでいたものの、実際に自分の身をもって感じることができ、日本の大学生との違いを改めて感じた。

上述したように、これまで私が学んできた中国と、実際に見て聞いて感じる中国は異なる点も多々あった。そもそも、日本人の中には老若男女問わず中国に対して偏見を持っている人が多い。その理由は様々あるようだが、私自身も中国について学び始めるまでそうであったように、いわゆる「爆買い中国人」や日本で取られる中国人の態度が主なものと考えられる。しかしこれまでの日本での学びに加え、今回の訪中ではそれはごく一部であるということ、中国人の優しさと努力を知った。これを自分たちの心にとどめるのではなく、すべての日本人に共有していく義務が私たちにはあると考えている。中国と日本は、歴史的にも地理的にも、生涯切っても切り離せない関係にあると言える。その関係は良好であるに超したことはなく、その状況に近づけるためにも、まずはお互いの国の人々が偏見をなくし理解を示していかなければならない。今回の訪中を通して気がついたのは、それは未来を担っていく存在である私たち若者の役目であるということである。

◆私は中国に何回か行ったことがあるが、中国に行く前は正直中国に対して良い印象を持っていなかった。しかし、中国に実際行ってみると私が思っていたイメージとだいぶ違っていた。例えば、中国の料理は日本で食べるものと味が違うことや中国人の人柄などである。私は中国に行ったのをきっかけに中国に興味を持ち、大学では中国語中国文化学科に入学した。私は大学で、中国語や中国の歴史・文化・文学を主に学んでおり、中国語研究会というサークルに所属しており、2017年の訪日団で私の大学を訪れた際に大学内を案内した。その際に友達になった中国人学生と連絡をしており、私は春休みに中国へ遊びに行ったときにその学生が3日間いろんな場所へ連れて行ってくれたのだ。これらの理由から訪中団に参加し日中友好の懸け橋になりたいという気持ちで今回の訪中団に参加させていただきました。

私たちは北京・敦煌・西安・上海ととてもいろんな場所へ行き、中国の歴史や中国の GDP が世界で 2 位である中国の偉大さについて中国に行く以前よりより深く知ることができました。歴史に関しては学校で学んだことにはなかった知り、またその場所ごとで何が行われていたかどのような生活をしていたかを詳しく知ることができました。GDP に関しては、やは

り人口の多さが中国の GDP 世界 2 位にする大きな要因であるように私は感じました。

北京では国際関係学院、西安外国語大学の学生と交流し色々なことを話し合いました。恋愛観の違いや大学生活の違い、文化の違いなどについて主に話しました。文化の違いに関しては私たちが抱いているイメージとは違い中国人学生の話しを聞いていくうちに中国には日本と違う魅力があることに気づきました。大学生活面に関しては学生のほとんどが寮で生活しておりアルバイトをしていないようです。日本と違い外部活動にはあまり力を入れておらず学習目にとても力を入れているようです。

中国に行ったことのない人や中国人と関わりのない方はマスコミなどの影響か中国人は 気が強そうであるなど、良いイメージを持っていないという話しをよく耳にします。正直、 私も中国人の方と実際接するまで良いイメージを抱いていませんでした。それは自分が思 い込んでいるイメージにすぎません。私たちは中国でとても親切な方や優しい方に出会い ました。しかし、日本と同様皆がよい人であるとは限りません。これらのことは、中国の方 がどういう方なのかは実際中国に行って、現地の方と接してみなければわからないことだ と思います。

今回、私たちは色んな場所行きたくさんの方々と交流をしました。このことにより、中国に行く前まで知らなかったことや、思い描いていた国とは違うと感じたことがたくさんありました。中国はこういう国であるということを自分たちで実際に見てきたので、友人やバイト先の人などにたくさん話しています。すると、ある友人に中国は「そういう国であるとはいらなかった。正直、中国に行ってみたいと思っていなかったけれど、是非今度行ってみたい。」と言われました。また、私は中国で仲良くなった学生やお店の店員さんと日本に帰ってきてからも微信で連絡を取って日常生活のことなどいろいろな話しをしています。一人でも多くの人が中国についてよく理解し交流していけば日中関係の改善に少しは役立てるのではないかと思います。なので、私はこれからも中国についての話しや中国の方と交流を続けていき、日中友好の架け橋となりたいと思っています。また、このような機会があれば是非参加したいと考えております。

◆今回、訪中団の一員として中国に訪ねることができて本当に良かったと、帰国後改めて思います。一週間各都市 2 日程度の滞在期間でしたが実際の中国を知らなかった時の私と今の私とでは、中国とは、中国人とはどんな感じかと聞かれた時の回答はかなり違うものになっていると思います。訪中初日、北京の空港に降り立った時、空はとても晴れていて気持ちが良かったです。テレビで北京のことが言われるのは大抵空気の悪さのことばかりなので、それまで北京では青空は見えないものと思っていました。そのために、ただ快晴の空に初めから驚いていました。

目で見る以外にも、北京や西安での現地の大学生や街の人と関わる機会でも学ぶことが多くありました。まずなにより中国の学生は皆とても親切でいろいろと気にかけて下さったのが嬉しかったです。今回交流することができた学生は、日本に少なからず興味があって参

加してくれたのだろうから、一丸に、学生との交流からわかったこととして、中国人は日本 人が好きだ、とは言い切れないかもしれせんが、どの街を歩いていても、すれ違う人たちは 大勢の日本人がいても特に変わりないようでした。むしろ私たちが日本人であることは、良 い意味でどうでもいいようでした。一つとても印象に残っている出来事があります。西安で 学生と交流した日の夜、班の仲間と一緒に街を探索していました。大きな道路の反対側に渡 ろうとしたとき、車通りが多く横断歩道も見当たらず困っていると、そばの路上に座ってい たホームレスらしき中年の男性が察したようで、こちらに向かって何か言っていました。私 は初め、少し怖いと思ってしまったのですが、どうやら中国語でどこから行けばいいのか言 っていたらしく、丁寧に教えてくれました。彼は見返りを求めてくるとこともありませんで した。ちょうどその日の日中の外国語大学の学生とのディスカッションの報告の時、ある班 の日本側学生が、学んだこととして、中国人は人に親切で、見返りを求めないということを 言っていたのを思い出し、本当にそうであることを深く実感しました。正直、滞在中一度く らいは私が日本人であるがために何か嫌な思いをすることがあるかもしれないと思ってい た自分が恥ずかしいです。そのようなことは一度もありませんでした。私がこのような良い 経験、発見をすることができたように、中国の学生も私たちとの交流を通して何か新しい良 い発見をしていてくれると嬉しいです。

私は今回の訪中を通して、上記以外にも、本当に多くの事を身をもって感じることができました。帰国した私たちがこれからすべきことは、仲良くなった中国の学生と繋がり続けること、そしてこの経験をまだ中国に行ったことがない人に伝えていくことだと思います。まだまだきっとお互いに誤解が多いと思います。どちらも素晴らしいということを中国の人にも、日本の人にも気付いてほしいです。私たちには経験を語ることでそう思ってもらえる手助けができると思います。これからの日中関係を築いていくのは私たち若者です。私は、将来、より良い関係を維持するために、今回の訪中団に参加できたことはとても有意義なものであったと確信しています。この素晴らしい機会を与えてくださった方々、訪中の際同行してくだった方々、99名の素晴らしい仲間、この訪中で関わったすべての方々に本当に感謝しています。ありがとうございました。

◆訪中団に行くまでは「英語を話すことができれば十分だ」と考えていた。英語は世界の標準語だし、中国も学歴社会だから英語が通じるにちがいない。しかし、実際に訪れた中国では英語が通じた場面はほんの一部だった。スーパーでココナッツクッキーの在り処を聞いてもわからないと言われる日々。中国では英語がなくても生きていける状況だった。食事を注文したくても漢字ばかりで何を頼んでいるのかわからないまま注文したりもした。8日間の研修を終え、日本に着いた時、中国で、漢字ばかりのメニューに困り、英語の表示が欲しいと嘆いていた自分を思い出した。見渡す限り、漢字とひらがなしかない表示。これでは海外からの観光客はメニューを頼むこともできないし、道を訪ねることができないではないか。訪中団に参加する前は当たり前のように通り過ぎていた標識が目にとまり、日本全体

のグローバル化の必要性を感じた。よくよく考えてみれば、ほとんどの日本人は英語を話す ことができていない。中国人は英語が不必要なほど、経済的にも物質的にも中国だけで完結 できるような環境が出来上がっているのかと勝手に思っていたが、そんなこともない。ただ、 観光客がくるときにしか必要がないから勉強をしないだけである。日本人もしかり。日本で は一時期「おもてなし」という言葉がブームになった。日本の接客が隅から隅まで行き届い ている様子を表した言葉と言える。しかし、その接客の対象は言葉の通じる日本人だけでは ないか。果たしてそのお客さまが海外の方になった場合に日本の誇るべき接客は発揮され ているのであろうか?全てのお店で英語表記を取り入れることは難しいかもしれない。し かし、海外の方が迷っても大丈夫なように地図などに英語表記を取り入れるなど積極的に していかなければならないではないか。実際に中国を訪れて私が感じた苦労は、日本に訪れ た海外の方も感じているはず。この経験を生かして、日本のグローバル化を訴えたいと思う。 また、英語が通じないということで、会話をする共通の言語は日本語か英語になる。私の 場合、中国語を話すことができなかったので、共通の言語を話すことができないだけで、こ んなにももどかしい思いをするとは思っていなかった。言語の壁は想像以上に厚く、高かっ た。自分の伝えたいことを相手に伝えることができない。そんな状況が長く続いた。言葉の 壁によって中国の人とコミュニケーションが取れない場面も多くあったし、そのぶんだけ その人の価値観を吸収できなかった感じがして辛い場面が多かった。私は母国語というこ ともあって、日本語を世界の標準語的地位に考えてしまっている。現在では英語が話せて当 たり前の時代で、英語以外の言語も話すことが望まれている時代である。それゆえに私はこ の経験を生かして、中国語を習得したいと考えている。英語・日本語・中国語という3ヶ国

◆今回この日中友好大学生訪中団に参加したことはわたしにとってかけがえのない思い出 となり、とても貴重な経験となりました。

語を習得することで日中友好の架け橋と自分がなりたいと考えている。

北京に着いて、バスの窓から眺めた景色を見た第1の感想は、「全部が大きい!」というものでした。わたしが、メディア等の報道から感じ取っていた中国の印象は、もっと閉鎖的なものでした。講義などで、中国の経済発展についての学習をしながらも、どことなく人が少なく、インフラの整備ももっと発展途上の段階にあると感じていました。しかし、日本の25 倍近くの国土を持つ中国の道路は、とても広く、ビルは高くそびえ立ち、夜になれば華やかにライトアップされる姿はわたしの想像をはるかに越えるものでした。勢いよく経済発展、成長を続ける中国に、わたしは圧倒されました。そして、日本にいるときよりも、中国の真の姿に興味をそそられ、この国と今後日本は、どのように競い合い、高め合い、協力していくべきなのかを考えさせられました。

今回のプログラムの魅力点であった、中日交流もまたわたしに中国・中国人に対するイメージを変化させてくれました。全く中国語ができないわたしと違い、日本語を流暢に操る 姿はとても印象的で、すごいという感心と負けてられないというやる気を芽生えさせまし た。交流の場を通して、わたしは自分自身が中国(人)と日本(人)の間の差を広く考えすぎて しまっていたのだなと感じました。

印象的だったのは、ディスカッションの内容を中国側の発表者を決めるとき、多くの学生が恥ずかしいと言い、なかなか決まらなかったときです。わたしの中の中国人はもっとがつがつと行動するというイメージでしたが、中には発表など人前で話すことを恥ずかしいと思う学生もいるのだと驚きました。

また、西安外国語学院でわたしのパートナーとなった学生は、台湾の五月天という歌手が好きだと言っていました。勝手なイメージで、中国と台湾は友好的ではなく、台湾の文化などを楽しむことが禁止されていると感じていたので、彼女が台湾の歌手を好み、わたしにその紹介を嬉しそうにしてくれたことはとても驚きました。また彼女が、自分の彼氏について話す姿は、聴いているこちらまでも幸せになるほどでした。

こうした経験から、日本と中国の差というよりは、思っていたよりも違わない点、変わらない点を発見することができました。共産党、一党制という印象が強く、閉鎖的で人々が日々を競争的に生きているというイメージを抱いていたからこそ、日本とは大きく差があると思っていたし、今回の交流でそうした差が多く見つかると期待していました。だからこそ、恋愛やスポーツ、好きなアーティスト話になると盛り上がる姿を見て、彼らも私たちと変わらない日常を送っているのだと感じ、中国(人)に対する壁が低くなり、親近感が湧きました。

日日交流に関しても、本当に良い人たちと良い出逢いができたと実感しています。中国にもともと興味があった人もいるし、なかった人もいて、このプログラムに参加した動機はさまざまでした。当然、このプログラムに参加して得たものもみんな違うと思います。しかし、1 週間という時間を中国という地で共にし、共に何かを得ようと考えながら生活できたことはかけがえのない思い出です。

今回のこのプログラムでは、1週間という期間に感じられないほど多くのものに触れ、感じることができた濃い1週間でした。正直、わたしは今回の訪中で中国のイメージが変化することは当たり前だと考えていました。実際に行く前と行った後では中国に対するイメージは変化しましたが、自分が抱いていたイメージとの差にとても衝撃を受けました。わたしは、国や政治体制が違う中国に対して、違いすぎるイメージを持っていたのかもしれません。実際に触れた中国は、「中国人は○○」と一言で表せるようなものではありませんでした。わたしたちと違う生活をしている中にも、共通点を発見することができました。今回の訪中は、わたしにとってとても実りのある濃い経験となりました。

◆私が訪中前に立てた目標は、現地の中国人大学生や訪中団の参加学生との交流を通して 私が迎える大学院生として今後どんな「活動」を実現するのかを考える材料を得ることだっ た。この「活動」とは、勉強などの私個人のためではなく、多くの人を巻き込んで行う社会 的な活動である。最初に私が中国人の大学生との交流で得た彼らへの印象について述べる。 北京と西安での交流が主になるが、私が驚いたことは日本と異なり、文系の学生でも大半の学生は大学院へ進学すると言うことだ。中国国内では就職の競争が日本以上に激しく、大学院進学を通して専門性を高めることで企業から見た個人の独自性と価値を良くしようと大学院進学をする。実は私はこの事実を日本国内で中国人留学生から聞いていたので全く新しい情報というわけではなかったが、改めて現地で多くの中国人大学生から直接聞くとその事実に実感を持つことができた。一方日本の大学院進学の実情は周知の通り理系の学生が研究職や開発職に就くために進学をするのが大半を占め、文系のほとんどの学生は大学卒業後就職をしている。ここで日本と中国で共通して言えることは、大学院進学の有無は就職活動との結びつきが大きいということである。中国で大学院進学率が大変高い理由として就職口が卒業・修了生に対して少なく、競争率が高いからであるというのが中国で訪問した大学での主な意見だった。

この考え方が直接日本でも当てはまると仮定すると、日本人大学生も大学院進学をすれば国内でもより良い就職先が見つかるということになる。しかし、一般的に日本では文系の学生が大学院に進学するのは教授になる以外にあまり好まれない現状にある。理由としては①社会に出遅れるから、②これ以上勉強をしたくないから、③就職が不利になるからなどが共通している点だ。この中で私が特に気になるのは、①と③である。①は日本独特の点であると認識している。私は大学の留学生寮で生活のアシスタントとして働いているが、中国や韓国などの東アジアだけでなく、西洋や北米の大学生に共通しているのは卒業後には海外に1年以上留学をしたり、インターンシップを一年以上経験したりしてから就職活動を初めて行うなどの海外の就職活動のあり方を知る機会が多い。この他にも日本の就職活動は他国と比べて異なる点が多い。ここで③の事実を持ち出すと、日本社会全体が大学院に進学するよりも、なるべく早く大学を卒業して社会に出て働くべきであると主張する世論を感じずにはいられない。

大学院進学を控えた今、このような海外の国と比較した時の日本の大学・大学院教育・就職活動の現状を生み出しているのは何かと考えることが多い。私は日本国内が十分に豊かであることが大学院進学率や一年以上の留学経験率を低くしていると考える。具体的に、それは語学や深い専門知識を持って海外で雇ってもらうために日本を出て行く必要が他国よりも比較的低いと感じている。実際に日本は現在中国に次いで GDP 世界 3 位であり、その差は三倍である。しかし同時に人口を比較すると、中国の人口は日本の 100 倍であり実際は国民一人当たりの年間の生産額で考えると、日本の方が十分に豊かな国であると言える。訪中で中国一の都市である北京や上海などを見たが、私の印象は東京の方が十分に大きな都市であると感じた。実際に世界の都市 GDP は東京が世界一位であり、国内の需要を企業は無視できない。

以上から、冒頭で述べた私の大学院生として行いたい「活動」の結論は、市場の大きい日本国内での就職活動をアシストする団体・事業を設立することだ。大学や大学院での過ごし方や海外留学など、ほとんどの大学生・大学院生の活動は就職活動に直結していると言っても過言ではない。それだけ重要視されている市場でこれまでしてきた「勉強」だけではなく、

学生としての最後の期間に、実際に社会の役に立てる行動をしたい。訪中を通して日本国内での生活で勉強のみで凝り固まっていた自分を解放し、現地の中国人大学生やプログラムに参加した日本人大学生との交流で自分の立ち位置を再確認することができた。まだまだ決まっていないことが多いが今後の自分の目標を明確にして再出発ができる状態になれた。訪中の機会を与えてくださった全ての方々には感謝の気持ちでいっぱいだ。

**•** 

・ 訪中前と訪中後の中国(人)に対する気持ち・考え方の変化

私は今回の訪中以前に中国を訪れたことはありませんでした。しかし、私の大学には中国 からの留学生が多く、また私は英語圏に行った経験があり、それらによって中国人学生と関 わることは以前からありました。そして、中国人留学生と交流するにつれて、マスコミが報 道している半日運動や、日本内でのマナーの悪さは本当に存在するのかという疑問を抱く ようになりました。訪中、中国人留学生と関わる前の私は中国に対し、よいイメージがあま りありませんでした。上記のマスコミ報道や中国製品の品質問題、環境汚染物質の日本への 流入などによるイメージが強かったためです。私が今回の訪中で最も印象的だったことは、 反日感情を感じることがなかったことです。むしろ、中国人が日本語を流暢に話したり、ホ テルの入り口で「こんにちは」と声をかけてもらったり、日本に行ったときの写真を見せて くれたりと、日本後を学んでいる中国人学生だけでなく、一般の方からも日本への興味を感 じることができました。大学生交流の際に「反日感情はあるのか」という質問をした際、「大 学生世代にはほとんどそのような感情はないが、一部の年配の方々にはあるかもしれない」 という回答をもらい、過去の事例からそのような感情を持つことは仕方ないと思う反面、そ れらの感情が緩和されつつある現在をうれしく思いました。そして、日本でのマスコミ報道 は過剰なことがほとんどで、実際に自分で確かめることが重要だと再確認することができ、 これからも周囲の中国人との関係を大切にしようと思いました。

・ 日本はそして自分は、隣国隣人として今後どのように中国(人)と付き合っていくべきか

私は環境学を専攻しています。そのことを中国人に話したところ、「西安の大気を改善してほしい」、「中国は環境問題に対して過去の日本と同じ道をたどっている」などの意見をもらいました。日本と中国は隣国で人も物も、はたまた物質も物理的に交流しやすい環境にあります。環境問題のみでなくその他分野でもそれぞれの国の強みがあり、協力し、手を取り合うことで双方の成長につながると思います。

また、今回の訪中で感じたことは、他国に比べ、町や人に親しみやすさを感じたことです。 その理由は、古くからの交流にあるのではないかと思います。その主たる例は言語です。私 は中国語を勉強したことがありませんでしたが、今回多くの中国語に触れることで日本語 と似ていることや、漢字からある程度の意味を読み取ることができることなど、他国ではあ るが、根本的に似ている部分を発見することができました。また気候帯が似ていることから、 建物や街の雰囲気が似ていると感じました。これらの親しみやすさや、古くからの交流で日 本は多くの恩恵を受けてきています。これからもこの関係を維持し、より交流のある隣人と してよい歴史を築いていけることを願っています。

## 人生にどのような影響があったか

私は中国人大学生の勤勉さに感心しました。日本人大学生は、大学時代に中国人ほど勉学に励まないことが多いと思います。皆アルバイトをし、部活やサークルを楽しみます。この点が日本人大学生と中国人大学生の大きな違いだと考えます。中国人大学生は、大学付属の寮で生活し、食事なども食堂で済ますことができ、通学や家事に取られる時間が少なく、勉学に集中できる環境が整っています。しかし、一方で中国人大学生から「アルバイト等をしないため社会経験の機会が少ない」という意見もあり、日本側と中国側の双方にそれぞれの強みがあり、その強みによる弱点も確認することができました。私が交流した大学生は、母語である中国語と日本語、英語の3つの言語を使用することができ、それによる利点を聞くことができました。このことから私は、今後国際的に活動していくために必要なことと目指すべきことを得ることができました。

◆2018年6月1日から6月8日の一週間にかけて、日本友好大学生訪中団第一陣の一員として訪中をしてきた。たった一週間の滞在ではあったが、自身にとって初めての訪中にしてはとても一週間とは思えない程に濃く、充実したものであった。この場をかりてまず、このような貴重な機会を提供して下さった日中友好協会、中日友好協会、中国政府の方々に深い感謝の意を申し上げたい。また、各都市を一緒にまわっていただいたガイドの方々、一緒に交流してくれた現地の大学生の皆さんにも本当に感謝している。支えていただいた方たちがたくさんいたお陰で今回の訪中が実現できたことを考えると、今回の経験を自分の人生の糧に、また社会に還元できるように、これからの道を歩んでいきたいと考えている。

さて、今回自分が参加した訪中団は、中国の学生との交流を通して相互理解を深め、中国という現地を実際に訪れて文化や雰囲気を理解することが目的とされていた。まさにこの目的を達成したいと思い、今回訪中団に参加しようと決意した。両国の国民がお互いに良い印象を抱いていないというのが世論調査で明らかになっているように、自分も正直中国に対してあまり良い印象は抱いていなかった。それを形成させた大きな要因は、尖閣諸島をめぐる領土問題である。外交や政治面において、いつも中国は日本と対立してくるという印象を抱いていた。しかし、爆買いを代表するように多くの中国観光客が日本を訪れて、街中を歩いていても中国人をよく目にするようになると、実際に中国を訪れてこの目で見てみたいという思いが芽生え始めた。そして、大学で国際系の学部に進学して勉強をしていくうちに、また何か国か初めての国を訪れた経験を通して、自分が抱いている中国に対する悪いイメージは実際に訪中すると変わるかもしれないと思い始めた。だから今回中国という国に

自分の目や肌で見て触れたいと考えて応募した。

訪中を終えて自分の中国に対する悪いイメージは払拭された。北京、敦煌、西安では中国の文化的な遺跡や自然の遺産を訪れて、上海ではその街並みを体感したが、それぞれの空気感や雰囲気は自分にとってどこか居心地が良く、また中国独自の文化的・自然的遺産は日本では味わえないものでどれも感動させられた。また、実際に自分の足で中国の地を歩いている最中に、たしかにお互いの世論が抱いているイメージは悪いかもしれないが、日本人だからといって突然殴られたり、嫌な視線を送られたりするようなことは一度もなかった。むしろ敦煌の夜市などで買い物をしていると、日本語で話しかけられたり、自分のつたない中国語にもきちんと対応してくれたりした。驚いたことに、簡単な日本語を喋れる中国の人々が意外といて、どこか嬉しい気持ちにさせられた。そして現地の大学生との交流を通して、大学や勉強に対する真面目な姿勢や日本語を学んでいる理由から、恋愛観やアニメなど幅広いことについて話すことができた。日本や日本人に対する嫌悪感など微塵もなかった上に、自分も中国の学生相手に悪い印象を全く感じなかった。

最後に、自分は訪中している間に何度か中国語で話しかけられたことがあった。おそらく相手は自分を中国人だと思って話しかけてきたのだろう。日本人と中国人は考え方や価値観は全く異なるかもしれないが、顔は似ているかもしれない。そして、地理的に見てもお互いに隣国同士である。だから、「日本と中国」はとても重要なパートナーであることは誰が考えても納得できることである。2018年は日中平和友好条約締結40周年という節目の年である。その年に訪中したという自覚と今回の自分の経験を生かして、これからも日中お互いに良い関係が続いてくために自分は寄与していきたいと強く決意させられた。

- ◆6月8日訪中団の活動をすべて終え、成田空港に帰国した。総じてあわただしい中での帰国であり、忙しさが私のいわば充実度のバロメーターとされていたのだから、このバロメーター通りならばそれは充実した活動だとされて当然だ。しかし今回はどうだったのだろうか。疑問符がつかざるを得ない1週間だ。今私が思うことと言えば、『あの7日間で何をしたかったのだろうか。』ということだ。3月下旬に訪中団として選出していただいて以来、中国に関する授業を受講し、文献を読むなどして中国に関して理解を深めていた。それは実情を把握するという目的だけでなく、ディスカッションやティータイムトークなどの時間で本音を聞き出すための準備と位置づけていた。それが生かされたのだろうか。答えはノーだ。はっきりと言えてしまうのは正直言って寂しい限りだ。友人との会話や訪れた場所に関心が行きすぎ、自制することができず、明確な目的意識が訪中後に欠落してしまったのが原因だ。私の残りの大学生活の針路ともいうべき重要なプロジェクト。その始末、物足りないというほかない。
- ・日中友好団での初の訪中
- ~改めて考える自分自身の実力値~

訪中団の歴史を見ても、私のような感想文を帰国後に書いてくる学生は多くはないだろう。良かった、楽しかったと限りなくポジティブな(若干の反省や、今後の希望を書きながら)そういった内容の感想文を書く学生が多いと思っている。1972 年に当時の周恩来総理が日本の田中角栄総理を招き、日中共同声明が発表された。以後両国の関係は浮き沈みを幾度となく繰り返しながら今日に至っている。ただ、日中両国の関係が今後途切れることはない。未来永劫に受け継がれていくものだと信じている。直近だと尖閣諸島問題で日中の関係性は極度に冷え込んだ。歴史認識に敏感な中国はここぞとばかりに日本を非難した。あの時の情勢は繰り返してはならない。ひいては日本が戦時中、中国に及ぼした悪しき行為の一つつの解決に力を注ぐべきだ。

と。曲がりなりにも自己主張を持ち、訪中した。可能ならば歴史問題について議論したかった。なぜなら、決して見過ごすことのできない側面であるのと同時に、若年層同士の考え方を共有したかったからだ。しかし、この希望は全く果たされず今感想文の執筆作業にあたっている。今日は火曜日。帰国して4日が経過するが、悔しさがまだ心に残っている。確かに日程はかなりハードであった。明朝3時半、4時に起きることは日常生活ではまずない。しかし、その中でも日本代表として確固たる信念をもって立ち向かうべきだったのではないか。自分自身に再度問うてみたい。ここに問題の本質がある。

まずやるべきなのは、今回の訪中の検証作業だ。改めて今の実力を数値化して、改善すべ点を見極め、どう今後に生かすかが焦点となる。早速、今日中国外交を専門とする大学教授に話をしてみた。1つのアウトプットの手段としては最適な相手だ。案の定、1週間で中国の全体像を把握するのは不可能だと門前払いを食らってしまった。当然である。

1 人の学生として感じるのはまだまだ準備と覚悟の両輪が同時並行的に進んでいないということだ。バランスが大切だ。次回訪中するのはいつになるのだろう。次訪中するその時に思いを馳せつつも自分自身の課題と正面から向き合うことが最も重要なことだと肝に銘じておきたい。

◆今回の訪中は自分にとって初の海外でした。初の海外ということは 日本と海外の違いに 生で触れるというのも今回が初めてでした。そして、今回触れてみて「日中の違い」という 点においてわかったことをいくつかこれから紹介して行こうと思います。

まず、初めに両国の人々の価値観の差異について書いていこうと思います。中国人の価値観は一概に語るのは難しいですが今回の訪中で思ったことは彼らは現実的なビジョンを持ちながらも見栄を張ろうとするということです。例えば、国際関係学院の生徒たちとの討論の際に出たテーマの恋愛観という点において人対人の関係において中国の人々はとても現実的で金銭力等を見ることを知りました。しかし、その「金銭力を見る」というのは年収という指標だけで見るのでなく、マンションの購入、車の購入など明らかに結婚初期には必要ない投資の観点で見ています。これらの話を聞いた時僕にとって先ほど申した見栄と現実的価値観の共存を感じました。

しかし、日中の価値観は違うところだけではありません。同じようなところもしっかりとありました。異性を好む条件は似たようなものであったり、学生同士の会話内容も同じようなものであったりと ルールや常識が異なるだけであって日中両国の人々の基礎となっている価値観は似ているのではないかと感じました。

また、中国では両親の意見が恋愛においてかなり重要であるとも感じましたが、一方で今の若い方に話を聞くと反対されたら意地でも説得するというような意見も数多く見聞きすることができこれから中国の価値観はさらに変わっていくような気配を感じることができました。

そして、価値観の差異の次は行動の差異について書こうと思います。しかし、行動の差異は価値観の差異によって左右するため価値観の話もかなり混ざった内容となります。

例えば彼らは値切ることを前提に値段につけていて また、買い手もそれを知っているため値切ります。それらの行動の理由として僕が考えたことは、中国人は安い高い関わらずお 得感が好きだからというものです。

つまり、例えそれが原価よりかなり高かったとしても値切った側から見れば 値切れたから 自分はうまく買い物を出来たのだと感じることができるということです。

しかし、これら行動については今回の訪中では時間が足りずあまり分析等が出来ませんで した。

よって、今回の訪中経験を糧にして今年の9月にもう一度一人で2週間中国に滞在することを決めました。 それらの経験を通して今回の訪中で学びきれなかったことを学んで行きたいと思います。

そして、今回の訪中がなければこのように思うこともなかったので訪中団関係者の皆様には大変感謝しております。これからも日中研究を重ねていくつもりですのでこれからもまだ訪中団関連の人々と会うことがあるかもしれませんがその際はよろしくお願いします。

◆ 今回、私は初めて中国に訪れ、自分の思い描いていたものとどれほど違ったかに驚かされました。初日、北京で飛行機から降り、まず驚いたのが空港の大きさでした。しかし、大きいのは空港だけではなく、紫禁城、頤和園、天安門、道路から建物のつくりまで、中国の全てにおいてスケールの違いに愕然としました。その贅沢な場所の使い方は、日本がどれほど土地を有効活用しているかを再認識させてくれました。

「微信(We Chat)」でのモバイル決済、アプリでの出前、「Ofo」や「Mobike」などのシェアバイク等、どこに行っても最新の文化が浸透している中国。不思議なことに、日本ではまだ頻繁に現金を使います。外国の友人に、「日本はどうしてまだ現金を使っているの?」と聞かれたことがあります。キャッシュレスに不慣れなのか、小物を買うときは、小銭をジャラジャラさせて払うのが好きですよね。ただ、それも少しずつ変わっていると最近実感します。「UberEats」などの出前サービスが始まり(Uber 自体は普及せず)、「AirBnB」などの民泊サービスも議論され始め、街には時折シェアバイクが見かけられるなど、新たな

サービスが導入されつつも、中国や他の国と比べると、まだまだ日本は遅れをとっているように見えます。しかし、それはそれで良いとも感じます。日本人の性格として、長期的な計画が得意とも言われていますが、ゆっくりと確実に変えてゆくのも大事だと思います。

大学でのディスカッションでは、少し敏感な話題だと知りつつも、私がずっと気になっていた質問に、学生らは快く答えてくれました。同年代である学生と一対一で話せる機会は、とても貴重で、プログラムの中でも一番学びが多いものでした。政治、教育、日常生活から価値観の違いまで、一日中話していたのに、時間が足りないくらいでした。食堂で、たくさんの現地学生と一緒に食事をしたり、廊下で多くの現地学生とすれ違ったりするだけで、とてもワクワクし、まるで1日留学をしたかのような高揚感を感じたのを覚えています。

また、新鮮であったのが、中国では一般の人々が英語を全く話す事ができない(或いは、話したがらない)ことでした。私はアジアのいくつかの国を訪れた事がありますが、どこの国も多少の英語は通じました。しかし、私が中国で「你说英语吗?」( "英語は話せますか?" )と尋ねると、「不会。」( "話せません。" )と返ってくることが大半でした。それは、我が国の状況と似ていて、日本に訪れる外国人観光客という興味深い視点で日本を振り返る事ができました。世界でも英語が通じない国というのは稀有になりつつあります。一方で、面白いことに、英語が通じないということで、逆に新たな魅力も感じました。それは、英語という共通語の手段に頼らずに、中国語を使わざるを得ない環境に強制的に置かれたからです。世界のどこに行っても英語を話す事が当たり前とされている中、中国の屋台や道端で、身振り手振りと限られた語彙の中国語で会話をし、コミュニケーションが成立した時には大きな高揚感を覚えました。

我が道をゆく、そんな中国には、強いローカリティと、独特さが健在していました。欧米文化やグローバリゼーションの波に奮闘しながらも、自国の文化や風習を変えない強さは、日本も見習うべきだと感じました。今回の初めての訪中では、中国の歴史、大衆文化、テクノロジーや学生交流など、様々な面での「中国」を肌で体感することができました。そして、このプログラムに参加し、「もっといろいろな世界を見てみたい」という飽くなき欲求が高まるのを実感しました。中国語の学習を続け、一年後に留学として戻ってきたいと考えています。豊富な資源や労働力を持ち、世界の経済で顕著になり続ける中国で、今後どう発展して行くのかを体感したいです。卒業までには中国語をマスターし、日本と中国、そして世界を繋げていく人に成長したいと思います。

今回の訪中団に参加し、自分を再確認することができることができる貴重な体験ができたことを、非常にありがたく思うと共に、次に進むために何をすべきか考え続けていきたいと思います。

◆ 訪中前からなぜ多くの日本人はこんなにも中国人に対してよくない印象を持っているのか、と疑問に思っていました。まず、"中国人はうるさい"というイメージを持って

いる日本の方は多いと思います。私もそう思っていました。実際に北京を訪問した際、現地の学生同士が会話していて、あまりにも強く話しているので喧嘩しているのか、と冗談交じりに尋ねました。その学生は笑いながら、ただ会話しているだけだ、北京の方言だということを教えてくれました。これには自身の勝手な思い込みで人を判断してはいけない、ということがどれほど大切か感じました。

北京の国際関係学院、西安外国語大学の学生と交流して、思ったことは、想像していたよりもはるかに私たち日本人学生と似ていた、ということです。性格や人生観など、同じアジア人として似ている部分がとても多く感じました。これには今まで"中国人"としてしか見ていなかったため、大変驚きました。逆に彼らとの違いで学ぶことも、特に勉強面でありました。中国の今回訪問した大学は全寮制で、アルバイトをせずに勉強に集中していると聞き、これは、自身のアルバイト生活を見直すきっかけとなりました。それに、頤和園を国際関係学院の学生と訪問した際には、英語班のパートナーがずっと歴史を解説してくれたおかげで楽しく回ることが出来ました。彼らの知識量に驚いたとともに、私も中国の歴史はもちろん、日本の歴史についてももっと勉強しなくてはならない、と勉強に対する刺激を受けました。彼らと1日ともに過ごす中で、優しさと歓迎の気持ちが溢れるように伝わり、中国の学生をよく知ることが出来た、と思っています。日本に戻ってからも連絡を取り合うまで仲良くなることが出来ました。ちょうど今日は大阪在住の私に地震の影響が無いか、心配のメッセージが届き、優しさに感動してしまいました。

私たちの日常生活の中で、中国人とコミュニケーションをとることはほとんどなく、また中国についての情報はほとんどがメディアから来ています。もちろん機会がない方にとってはメディアがすべてであり、そしてなぜかそのメディアでは中国に対していい印象を与えることがほとんどないのが現状です。私は訪中後、このギャップにとても驚き、他の人にもこの事実を知ってもらいたいと強く感じました。中国人と日本人の間には大きな言葉の壁が存在します。交流を通して、私たちはただ話す言語のみ違うだけのように感じました。両国とも互いの言語の学習が足りないと感じます。上海で買い物しようとした際、中国語を話せない私は、簡単な英語で店員の方と意思疎通を図ろうとしました。アメリカでの留学経験がある私は英語に自信があったため中国で困らないだろうと軽率な憶測を立てていましたが、全く通じませんでした。これは北京でも同じでした。そこで、日中はともに言葉の壁により互いを正しく理解できていないのでは、という考えが生まれました。これは一般国民に言えることです。日本と中国が言葉の壁を乗り越えて、互いがコミュニケーションをとれば、偏見を持つことなく、相手のことを知ることができます。それが友好関係の向上に繋がると考えます。同じアジアの距離的にも近い中国と日本はもっと個人レベルで、友好関係を向上することができる、そう信じ、願っています。

最後に、一週間共に過ごした日本人大学生の団員の方からも、沢山の刺激を受けました。私は関西に住んでいるため、普段他の地域の学生と触れ合えることがほとんどありません。しかしこの一週間で、彼らの活動、語学力、また将来に向け今力を入れてがんばっていること、など沢山話を聞きました。彼らから学ぶことは多く、影響を受け、それらに対す

る意欲が増しました。このように大変貴重な良い日日交流もできました。

今回の訪中団で実際に見て、聞いて、体験したことは、私の想像以上でした。ただの旅行ではこんなにも中国の魅力に気がつくことは出来ません。このような素晴らしいプログラムに参加してよかった、と心から思います。たくさんおもてなしをして下さった中日友好協会の方々、そして日中友好協会の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。学んだ事を周りの人に伝え、今後生かして生きます。ありがとうございました。

◆「必ずもう一度中国に行きたい。」これが、今回の訪中を通して強く思ったことです。世界遺産を見学し、美しい自然を眺め、現地の方々と交流したことで中国について少し知ることができました。それと同時に、まだまだ知らないことだらけである事を再認識し、もっと知りたいと思いました。これまでも大学の授業やメディアから中国に関する情報は得ていました。しかし、実際に訪中してみて体感した中国はそのような情報とは少し異なっている部分もありました。特に印象深かったのは食事と現地大学生の勉強に対する態度です。食事については出発前、口に合わないだろう、変わった生き物を食べることになるのではないか、と周囲の人からは言われていました。実際は、初めて食べるものがほとんどでしたがとてもおいしかったです。また、カエルやイヌを中国では食べると聞いたことがあったのですが、中国の中でも地域により食べる文化の有無が異なっていることが分かりました。また、現地大学生との交流の中でお互いの勉強について話す機会があったのですが、私が一緒に話した方はとても勉強熱心でした。中国人の方が勉強を頑張っていると始めに聞いた時、私は将来の為に仕方なくしているのだと思い込んでいました。しかし、彼女の場合、好奇心で学問の探求を行っていて、学生としてのあるべき姿を見せてもらったような気がしました。このように外側からだけでなく、自ら内側に飛び込んでいくことで発見できたことが多くありました。

ある対象を見る視点の違いによって見える物事も変化する、というのは、人と人との関係についても言えると思います。日本にいると中国人の方々は電車の中や学校で見かけるくらいで直接関わる機会はあまりありません。だから、つい「中国人」という大きな枠で捉えて、私自身、無意識に心の距離を感じていたような気がします。しかし、現地大学生やガイドさん、お店の店員さんと接したり、現地の方々のふだんの暮らしを見たりする中で「中国人」という枠がいかにただのイメージでしかないかを痛感しました。そして、イメージに縛られずに一人ひとりと向き合うことでよりお互いを深く誤解なく知ることができると考えました。

私は、今回の訪中で、積極的に自分の目で見て、耳で聞いて、舌で味わって、中国を堪能することができました。そのおかげで、中国に関する知識は以前よりも増え、友達もでき、愛着も湧いてきました。1週間でこんなにも中国に愛着を持つようになるとは予想もしていなかった事で驚いていますが、私はこの愛着こそが、日中の友好な関係を継続させ、さらにはより良くするために重要だと考えます。「好きこそものの上手なれ」ということわざがあ

るように、何かに愛着や好意的な感情を持って向き合うことには大きな力があるのではないでしょうか。愛着は、相手のことをもっとよく知りたい、仲良くなりたい、といった気持ちを支えてくれる大きな力だと思います。この気持ちを持ってこの先も中国やそこで暮らす人々と関わっていきたいです。

◆北京、敦煌、西安、上海と中国を代表する都市を訪れ、故宮や頤和園、莫高窟、兵馬俑な どの中国が誇る遺産を見学し、中国の方々の手厚いおもてなしを受け、中国に魅了されただ けでなく、現地大学生との交流で、中国の実態をよく知ることができました。彼らとの会話 を通して、私たちとの違いを知って驚くだけでなく、共通している点を認識することが異文 化理解のはじまりだと考えました。今日では、異文化理解や多様性といった言葉をよく耳に します。相手の立場を考え、なぜそのような言動をするのかを理解し、それを受け入れるこ とでさらなる平和や発展を手にすることができるとまで言われます。しかし、異文化を理解 しなさい、多様性を受け入れなさい、などと簡単に言いすぎやしないかと私は思い始めまし た。あらかじめ言っておきますが、私はこれらの動きを否定するつもりは毛頭ありません。 ただ私は、異文化理解だとか、多様性の受け入れは、人類史上もっとも難解な取り組みなの だといいたいのです。これまでの人類の歴史は戦争の歴史でした。戦争とは、自分たちの中 の問題を解決しようとするときや、さらなる発展を目指すために起こされます。戦争の相手 は我々の生活とは関係がない上、手を取り合う必要もないのだから、戦争をおこすのは自然 なことといえます。戦争とはある意味で一番簡単な手段といえるのではないでしょうか。戦 争とは、自分の中の矛盾や怒りのはけ口を周りに八つ当たりをしているようなものだと私 は思うのです。しかし今、私たちは戦争をなくし、周りの人々を知り、受け入れようとして います。自己の中に生まれた問題を自己の中で解決しなければならい上に、周りの者たちの 問題まで考慮し始めたのです。自分の家族だけでなく、隣の家の家族の問題も考えなければ ならなくなったようなものです。このように言うと、異文化理解や多様性の受容は不利益な のかと思えてしまうかもしれません。しかし、もう少し考えてみると、自己の問題を一緒に 考えてくれる他者が増えたと気づくことができます。課題は増えてくるかもしれませんが、 そのぶんだけ解決をしようとするものたちが現れたとも言えます。課題があるということ は解決したときの成長幅があるといえます。課題を解決するたびに一つずつ階段を上るよ うに、私たちはいままで見たことのない景色をみることができます。つまり、くりかえしに なりますが、われわれは異文化理解を通してより発展ができるとういことです。

異文化理解、かみ砕いていえば、他者を知る、ということの本質は、自分を知るということです。相手が自分とは違う、自分と似ている、と思えるということは自分を理解しているからです。いろんな人を知れば知るほど、自分がどのような人間かが見えてきます。仮に、一つの部屋の中で一人だけで過ごしていたら、自分が何者かわからないままでしょう。他人が持っているから自分には無いとわかるし、他人は持っていないから、自分には有ると気づけるのです。自分を知るとうのは時として非常に残酷なものです。自分には何ができて、何が

できないのかを知ってしまった時、自分自身に絶望してしまうかもしれません。だからこそ 私たちは周囲のことをよく知った上で、自分にしかできないことをみつけそれを大切にし ていく姿勢がもとめられているのだと思います。

◆私は、この事業に参加する前は、中国に対してよい印象をもっていなかった。なぜなら、 日本のマスコミは、中国に対して、あまり良い報道を行っていなかったからである。小学校 の頃は、日本の首相が靖国神社を参拝した際に、中国で、日本の国旗が焼かれている報道が あった。また、中国人の爆買いで、中国人は並ばない、中国人はマナーが悪いなどといった 報道があった。私の出身地は、京都である。京都は、外国人観光客が多い。中国の人もかな り多い。その人たちの言動を見て、あまり関わりたくないと思うことも多々あった。これら のことから、私は、中国に対し、全然いい印象を持っていなかった。また、私の周りの人も、 中国に対してあまり良い印象を持ってない人も多いと感じた。しかし、今回の訪中から、こ れらの考えは、日本の報道から生まれた中国に対する誤った印象であるということを実感 した。

今回の訪中で、中国人に対する印象がかなり変わった。きっかけは、北京の国際学院、西安の西安外国語大学の大学生との交流である。同じような年代の人とお互いの考えていることや、価値観、恋愛観や休日の過ごし方といったプライベートなことまで話すうちに、日本人も中国人も同じような考えを持っているということが分かった。さらに、中国人の方は、とても親切で、私たちに、とても親切だった。北京の故宮観光の際には、観光ガイドを行ってくれ、北京の魅力を伝えてくれた。西安外国語大学での交流の際は、私たち日本人学生に中国の魅力を伝えてくれた。いままでは、中国人はマナーが悪いと思っていたが、実際に中国人と関わると全然違っていた。今までの自分の固定観念をなくしてくれた交流だった。また、交流の中で、気づいたことがある。それは、中国の大学生は、日本の大学生よりも、勉強時間がかなり多いことということである。彼らは、自分の夢を叶えるために、毎日熱心に勉強に取り組んでいることを知った。そのため、私たち日本人学生は、勉強面に関して言えば、中国人をもっと見習っていかないといけないと感じた。

また、今回の訪中で、日本と中国の違いというものを感じることができた。例えば、中国はキャッシュレス社会であり、ネット社会である。タクシーを呼ぶアプリがあることや we chat ペイによりスマホで決済ができることなどとても便利な社会であると感じた。日本と中国お互い違う国であるが、お互いが学ぶべき点は多いと感じた。

今、私は、自大学で外国人留学生の支援を行っている。例えば、日本語授業のサポートや来日してからの市役所等での手続き等のサポートである。自大学は中国からの留学生で半分以上を占める。そのため、これからも彼らに関わっていきたいと考えている。実際に、私は、中国人に本当に多くの親切をしていただいた。そのため、その親切を返していきたいと考えている。また、中国人との関わりからもっと中国について知りたいと思うようになった。そのため、彼らとの関わりから、中国に対する見識を深めていきたい。

私は、今回の訪中から、中国と日本の交流の懸け橋になりたいと感じた。今年は、日中平和条約40周年である。これからどんどん、日中の距離は短くなっていくと予想される。そのため、私は、中国との関係をもっと深めていかなければならないと考える。そのため、今回出会った中国の大学生との交流を継続して行っていき、私たちが、日本と中国の関係をよりよくしていけるようにしていきたい。また、今回の経験で得た学びを周りの人たちに伝え、誤った中国への認識といったものを少しでも直していきたい。私の将来の夢は、教員になることである。今回の訪中での経験や人とのつながりを学校現場に還元し、日本の子どもたちにも中国について知ってもらうきっかけにしたい。

◆ 初めての訪中にして 4 都市を回ったこの派遣事業は、とても有意義な一周間であった。今回の訪中における自分のゴールは、日本のメディアから作られた悪いイメージと、日本在住の中国人との交流から感じた本来の中国人の姿とのギャップを確かめることだった。

まず一番印象的であったこと、それは中国語の響きが優しいこと。以前の私は中国語に対して、当たりが強くキツイ、という印象を持っていた。同時にそれがひとつの中国人への印象でもあった。それはきっと日本の中国人観光客の姿などから得たイメージであろう。しかし実際に現地で耳にした中国語からは、優しく柔らかいという間反対の印象を受けた。さらに言葉の印象だけではなく、それを話す中国人に対する印象も大きく変わった。これは実際に現地へ足を運んだからこそ気づくことが出来た部分であると思う。この気づきを通して、少なく限られた情報源から、自分の中で中国という国に対するイメージを作り上げてしまっていたことを実感した。

また今回の訪中を終えて、中国語習得への興味を持った。英語の公用語化の進むこの時代、英語を修得すれば英語圏以外の全世界の人々とも繋がれる、という考えのもと、大学では英語コミュニケーションを専攻している。そして世界中の人々との交流を通して様々な価値観に触れ、世界観を広げることが学生生活の目標だ。訪中前、中国は日本よりも英語教育が進んでおり、話せる人が多いというイメージを持っていた。しかし実際に足を運んでみると、街中の店やレストランでは度々英語が通じないことがあり、少し衝撃を受けた。いくら英語教育が進んでいる国だとはいっても、日本の何十倍も多くの人口を抱え大きな経済格差も残る中国では、国民の割合で考えると英語の普及は日本同様まだ発展途中であるのだろう。さらに印象的だったのは、流暢な中国語を話す同じ班の団員の姿である。私自身、中国語を聞くことも話すことも一切できない。しかし、団員と中国人のコミュニケーションの雰囲気から、本来の中国人の国民性を垣間見ることが出来たように感じた。やはり現地の言葉を話すことができれば、その国民との心の距離もおのずと近くなり、国民本来の姿を見ることができる。いくら英語が異なる言語圏の国を結ぶ橋渡しになっているといっても、現地語に勝る言葉はない。中国語を修得すれば13億人という莫大な人数と交流できるということ、そしてさらに深く中国の人々を知ることができる、ということにとても魅力を感じた。

大抵の場合、一度の渡航で訪れる都市はぜいぜい1つか2つだろう。限られた時間の中で、 近隣の都市を回ることが一般的だ。しかしこの訪中団では、北京、敦煌、西安、上海という、 立地的にも離れたこの4都市を訪問することができ、中国という国を多角的に見ることが 出来たのではないかと感じる。初めて訪れる国では、訪れたその都市の印象が、その国への 印象になる。中国のように広大な国土を持つ国では、都市によってその特徴が大きく異なる。 だからこそ、4つの都市訪問を通し中国に対して偏った印象を持たずに済んだのでないかと 思う。

この7日間は、自分の中でとても印象深いものとなった。中国という国際関係上も立地的にも近い国、しかしながらどこか日本人の心の距離は遠い国。日本のメディアにより植え付けられた悪い印象を持ち、偏見に満ちた目で中国をみる日本人がまだまだ多いからこそ、私はそのイメージを払拭したいと思った。この経験を通し、これからの世の中を担っていく私たち世代がその偏見を拭い、正しい見地から中国という国をみることが出来るような活動に携わっていきたい。

◆7日間の訪中を終えて、私は将来日中友好の架け橋になると心に決心することができたことが最大の成果となった。この思いに至るまで、私は中国に対して正しい認識を求めてきた。報道や客観的に見られる中国イメージに捉われずに、実際に自分の目で見ることや中国人と交流することを大切にしてきた。今回の国際関係学院と西安外国語大学との学生交流では、特に中国人というイメージを変えるような交流となった。交流の中で、日本人との共通点や違いを楽しむことができた。こうした国による違いを楽しむことができれば、交流というものがもっとよりよいものになると感じた。多くの日本人は中国人を全体として見ており、個人として見ていないように思われる。交流によって、個人と個人が意見を言い合い、相手を理解していく中で友達になることができれば、マイナスなイメージである偏見というものはなくなるのではないかと考えた。私たちに必要なことはこうしたマイナスイメージを知ってすぐに全体をマイナスとして捉えずのではなく、相手と交流して理解していくことであると気づいた。

また今回の訪中では、数多くの名所旧跡を訪れることができた。私は大学で東洋史を専攻しており、主に中国史を学んでいる。そのため、古代の兵馬俑から近代の故宮博物院を見学できたことは私にとって大変興味深かった。北京・敦煌・西安・上海のどの都市にも数多くの名所旧跡があり、全部を回ることは難しいけれども、今回それぞれの都市を訪れたことでそれぞれの都市の色が見られて、次回訪れるときはもっと深く見てみたいと思った。中国は一つの国ではあるけれど、一つの都市から違う都市に移れば、そこはまた違う雰囲気であり、この違いが中国の魅力的部分の一つであると感じている。中国の歴史を学ぶためにも、今回のように実際に現地に足を運んで見ることができれば理解が深まると思った。

今回の日本大学生訪中団に参加できたことは私にとって日中友好の架け橋になるためのスタートであると感じている。私は今年の9月から北京に留学に行くため、現地での学生交流

を積極的に行っていきたい。学生交流があってこそ、その国と国は友好であり続けられるものであり、今私ができることとして交流を通じて日本を発信するのと同時に、中国をより理解することが必要であると感じている。私は将来、中国のスペシャリストである外務省専門職員として日中友好の架け橋になりたいと考えている。そのためには更なる語学力向上だけでなく、中国の正しい認識をもっと持たなくてはならないと感じている。今回の訪中では、7日間という限られた中でも多くの発見を見つけることができた。これから先、私は日本に対して自分の得た中国の認識を広げていきたい。そうすることで、偏見を出来るだけ無くしていき日本と中国との間で交流が盛んに行われていき、友好な関係がこれからもずっと続いていくことを願っている。その役割を将来私が担って、日中友好の架け橋になりたい思っている。

◆7日間に渡る中国訪問を終えて、今まで中国について誤解していたことを痛感し、またその理由について考えることが出来ました。

訪中前、私の中国のイメージは、「発展が著しく、利益だけを求めるビジネス大国・爆買い 等のマナーの悪い観光客・反日デモ」といったマイナスなものしかありませんでした。多く の日本人もこのイメージを持っているのではないかと思います。しかし、実際に中国を訪れ てみると、そのような人を1度も目にしませんでした。道を聞けば親切に教えてくれるし、 頼めば写真も撮ってくれました。むしろ東京で7日間過ごしていた方が「せっかちなビジネ スマン・マナーの悪い人・過激な意見を駅前で主張する人」をたくさん目にします。しかし 私たちは、「日本人=それらのマイナスなイメージ」とは思いません。ではなぜ、中国につ いてだとマイナスなイメージを持ってしまうのか。それは、情報量の違いだと考えます。私 たちは普段日本で生活していて、常にありとあらゆる日本に関する情報をニュースからだ けではなく、五感で得ています。なので、日本についてのマイナスな情報を得ても、情報数 の母数が大きいのでその情報の与える影響力は小さいです。一方で、私たちは中国に関する 情報のほとんどをメディアから取り入れています。メディアが取り上げる情報は、良くも悪 くもインパクトが強いものが多いです。そのため、過激な情報を得る機会が多く、且つ情報 量が少ないため、それらの情報が私たちの印象に与える影響はとても大きいです。この偏っ た情報のインプットによって、私たち日本人の中国に対する偏ったイメージが形成されて いるのです。

では、この偏ったイメージをどうすれば、変えることができるのでしょうか。私は、韓国が良いモデルだと思います。韓国と中国は近接する国であるのに、日本人がそれらの国に対して抱くイメージは大きく異なります。日本人が韓国について良いイメージを抱きやすい理由の1つは、メディアによって伝えられる過激な情報以外の韓国に関する情報が、韓流ドラマや K ポップなどのコンテンツによって日本に伝達されていることだと思います。それによって、韓国に関する情報量が増え、過激な情報の影響力が小さくなり、偏ったイメージを抱きづらくなります。

しかし、中国は政府によって情報統制が入っているため、中国の人が情報を発信するのは他の国に比べると難しいです。そこで私たちができることは、中国について正しく認識をしている人が、自ら中国についての情報を発信することによって、中国についての情報量を増やし、偏った情報に流されにくくすることだと思います。私は、訪中後 SNS で訪中の写真や訪中の感想を発信しました。それを見た友人から「中国のこと聞かせて!」とたくさん声をかけられました。私1人で発信できる情報量に限りはありますが、中国を五感で感じ、正しく中国を認識した人たちが中国についての情報を積極的に発信していくことで、日本に存在する中国についての情報量を増やしていくべきだと思います。

◆訪中を終えて、まず帰国した自分がとった行動はLINE payのアカウント登録を行い、利用し始めたことである。これが訪中したことによって最も影響された点に関わることであり、この点をはじめとした中国に対する気持ち・考えの変化、またこれからの人生において中国とどう向き合っていくかなどについて、本レポートで述べていきたい。

まず、冒頭で述べた方中で私が最も影響を受けた行動の変化についてまとめる。この中国から受けた影響とは、モバイル決済の浸透力についてである。距離でみると日本と海を挟んだだけの地域であるにも関わらず、キッシュレス化の進み具合にここまで差があるのかというほどの違いを実際の目で確かめることができた。北京に滞在している間、留学中であった同じ大学の友人に会い話をする機会を作った。その友人もすっかり中国社会になれており、中国では財布を無くすよりスマホの充電がなくなった方が大変だと言っていたほどだ。ここで私が感じたことは、日本でのキャッシュレス決済比率の状況を見てみると現在 18.4%と明らかに世界の先進国と比べても遅れをとっていることだ。経済産業省が掲げるキャッシュレス決済日いつ目標は「2025年に 40%」とあるが、現在の状況では厳しいであろう。自分が帰国後、LINE pay を利用し始めて気づいたことは日本人にはまだまだモバイル決済の新湯度が足りていない、またそもそもモバイル決済自体の認知度が低いということだ。LINE pay 利用可能な店舗でも、自分がその決済方法を選択すると店員があたふたしているほどであった。結論として今回自分が感じた影響は間違いなく今後の日本の購買行動の変化に関わってくることであろう。世界の動きに伴って日本も変化しないといけない時期であるということを今回の訪中で強く感じた。

二つ目に私が今回訪中するにあたって考えたかったことがある。それは日中間の個人間の互いの国に対する印象についてである。日中の国家間と個人間における印象には差があると思い、またそこを問題視していくことが私の卒論の研究テーマでもあった。私の理想としては個人間の関係性や対日・対中への印象の向上により日中関係そのものが良好になっていくことが理想的である。今回の訪中で私は訪問した大学の学生、引率してくださったガイドの方々など幅広い年齢層の方たちからこのことについてヒアリングすることができた。多くの人は日本や日本人について良い印象を持つ人が多いと言ってくれたのとともに、興味を引くことを言ってくれた学生がいた。その学生は、国際関係学院で交流した学生で彼女

は日中におけるこの印象について「政府の問題と私たちが考える日本への印象は全く別のことで、対日意識について考える際、政府関係のことを一緒に考えてはいない、だから純粋に日本のことに興味がある人は多いし、特に若者はそういう考えの中国人が多いと思う。」こう答えてくれた。私がこのことを聞いた時、やはり中国についてメディアの情報しか知らなかった自分にとって、訪中した意味があったと感じたし、これこそがこのような事業における意義ではないかと考えた。実際の生の声を聞くことができたこともこの方中において大きな収穫の一つに違いない。

こうしたたくさん学びや、発見があった訪中であったがこの経験を今後自分が架け橋となって周りの友人や家族に伝えていくことでさらに日中友好関係の促進になると考える。 この訪中をきっかけに今後も継続して日中関係について考えること、また今回つながりができた現地の友人たちとの関係性を保ち続けていきたい。

最後になったが、今回このプログラムに関わった皆様、訪中を実現させてくださった全て の方々に感謝申し上げたい。

◆この日中友好大学訪中団を終えた今思うことは、どれだけ自分が一週間で新しい刺激を 受け、将来の日本と中国の関係を考えるきっかけをこの旅で得られたかということです。 今回の訪中団では、中国全土を飛び回ったと言っても過言ではない位、一週間のうちにシル クロードの町である敦煌から、中国で最も発展している都市の一つである上海まで、計4都 市を訪れることができました。中国を訪れる前は、大気汚染やインフラ整備の課題など、ネ ガティブなイメージを少なからず持っていましたが、北京の空港からバスに乗った瞬間飛 び込んできたのは、日本に比べたら遥かに広く、整備された道路がある光景でした。中国の 広大な国土は道路から見て取れるのだな、とその時はとても感心した覚えがあります。 中国の大気汚染に関していえば、日本のメディアが映し出すイメージしか私は今まで持っ ていませんでした。しかし現在の中国政府がどのように大気汚染という問題に取り組んで いるのか、訪中を通して実際に目の当たりにすることができました。例えば、北京の街中へ 入ると、まず先に目につくのが Mobike や Ofo 等のカラフルなシェアバイクです。四国並み の大きさを誇る北京の街では、シェアバイクを設置することによって、余分な排気ガスを減 らす試みをしていると、バスのガイドさんや、中国人学生との交流の中で知ることができま した。中国の都市の中でも田舎と言われている敦煌でさえ、シェアバイクがあり、中国政府 は大気汚染に本気で取り組んでいるのだと見て取ることができました。また個人的に感心 したのが、キャッシュレス化が驚くほど進んでいる点です。アリババ Pay や WeChatPay 等、 QR コードを読み取るだけで決済ができる気軽さから、携帯があればどこでも支払いができ る点は本当に便利だと思いました。北京の売店にて、お札で会計した際に印象的だったのが、 店員さんが一枚一枚お札を光に照らして、偽札が入っていないか確認していたことです。日 本では偽札が入っているかだなんて疑問にも持たず、日々買い物をしているので、このこと からも、中国のキャッシュレス社会が発展した背景があるのではないかと考えるようにな

りました。確かにネット決済にすれば偽札をつかまされる心配もないし、現金を持ち歩いていて奪われる心配もありません。空港のカラオケボックスから、兵馬俑の前にいた水売りのおじさんまで、キャッシュレス社会の波は中国に浸透していました。個人的に、WeChatPayを体験して見たかったのですが、ただの観光だとアカウントを作ることができなかったので、今回はできませんでした。しかし、また中国に訪れる際は必ず、体験して見たいです。ここまで、中国の都市やテクノロジーの発展について述べましたが、それよりも自分の心の中に残っているのは、現地の中国人との触れ合いです。中国人は少し怖いというイメージを持っていましたが、見事に覆されました。敦煌の街の子供達、西安の地下鉄で席を譲ってくれた女性たち、そして何より今回交流した中国人学生の方々。一週間という短い間でしたが、自分の中のネガティブなイメージを払拭するには十分すぎる位、優しい中国人に恵まれました。特に国際関係学院の学生とは、一対一で一日中交流したおかげか、日中関係はもちろん、学生の悩みや恋愛相談など、深く話し合うことができました。別れの際にバスまでついてきてくれて、見えなくなるまで手を振ってくれた光景は今でも覚えています。また彼女に会うためにも中国を訪れたいです。

最後に、訪中期間の一週間と、研修の時間を通して、貴重な経験をさせてくれた日中友好協会の方々に感謝を申し上げたいと思います。この体験は自分の中の中国という国を 180 度変えてくれました。近い将来、また中国へ訪れるのを楽しみにしています。

◆訪中前、中国に対してはただの隣国としてか認識しておらず、あまり興味を抱いていませんでした。いい意味では中国に何か悪いイメージを持つのでもなく、悪い面では中国のことをよく知ろうとは思いませんでした。しかし、訪中してみると、俄然興味が自然とわいてきました。今回の訪中では歴史的建造物を多く訪れましたが、そのうちのほとんどの規模が大きく、壮大な印象を受けました。日本の寺社仏閣と比べてもその比ではありません。比べるのは無意味かもしれませんが、わびさびの文化の日本と比べるとその差は歴然としています。中国の文化の発達度、人々のパワーを感じました。歴史の教科書で様々な価値のある建造物が中国にあるとは知っていましたが、その魅力を知るにはやはり直接訪れるのが一番でした。

また、敦煌の砂漠や移動中の航空機から見えた雄大な自然も中国の魅力です。広大な国土を 持つ中国ならではのものです。高校の地理の授業で中国の地形について習った時には何も 感じていませんでしたが、実際に自分の目で見て、肌で感じるとどれだけ魅力のあるものか 分かりました。

私は中国をただの隣国に過ぎないと考えましたが、訪中によりその歴史や自然の魅力に触れることで、もっと詳しく知りたい、色々なところを訪れたい興味の対象になりました。 訪中では学生との交流も印象的でした。日本のことを好きだと言葉で表してくれて、私たち日本人を温かく歓迎してくれた同世代の中国の学生たちと会ってとてもうれしかったです。 日本人のシャイな雰囲気と違って自分の考えをはっきり伝えてくれる学生たちにつられて 自分たち日本人も本音で語ってました。彼ら彼女らの勉強熱心なところも見習いたいです。 大学から日本語の勉強を始めて日本語であれだけコミュニケーションが取れるようになる のは相当な努力が必要です。自分の大学生活への考えも引き締まりました。勉強をするのは もちろん、何か自分の興味の持てるものを見つけその目標に向かって努力ができるように したいと感じました。

さて、日中の歴史的な関係からか日中の人々の中には相手国のこと、人々をよくなく思ってる人もいます。このことに関して私はずっと一つの考えを持っていました。それとは、日本人だろうが中国人だろうがその他の国の人だろうが所詮は人間に過ぎないというものです。同じ人間という動物が地域別に分類されているに過ぎないのです。訪中してその考えは正しかったと思いました。交流した学生たちはもちろん、各都市の道端やお店で出会った人たちも何ら日本の人と変わりませんでした。中国からの観光客はマナーが悪いと報道されることもありましたが、その事実はあったとしても私はこう考えます。日本人の私たちも海外でマナー違反を起こすことがあることを認めるべきですし、中国の人の中にもマナーのいい人は多いですがそもそもの母数が多いからマナーの悪い人も多いのです。中国政府が気に食わないという考えは説明できるかもしれませんが、中国人が気に食わないという考えをうまく説明することはできないはずです。何か外国人と会って嫌なことがあっても、同じ人間だと考えてほしいです。

◆今回始めて中国を訪れて、自分にとって良い経験がたくさんありました。その中でも特に 心に響いたことが3つあるので、それについて書こうと思います。

1つ目は中国に対してのイメージの変化です。私がこの訪中団の活動を知ったのは大学から推薦してもらったのがきっかけで、それまでは中国という国にあまり興味はありませんでした。マナーの悪さや著作権侵害のニュースが多かったため、イメージもあまり良くありませんでした。しかし、国際関係学院や西安外国語大学の人達との交流で中国人に対しての考え方が180度変わりました。なぜなら、中国人の真面目さや日本をとても尊敬していることが交流によって気づいたからです。特に勉強に対しての真面目さは日本と大きく異なっていて、学生時代は勉学に集中するため恋愛はしてはいけないということを聞いて驚きを隠せませんでした。この交流を通じて、今までの授業に対する低い意識を改善して、まずは遅刻欠席が一度もないよう心がけています。

2つ目は自動車です。これはどのような車が走っているのか以前から気になっていたので 移動時間や自由行動時に注目していました。インドやフィリピンなど東南アジアでは日本 企業の車が多かったので、中国も同じく日本企業の車が多いと思っていました。しかし、中 国の道路を走っている車は外車がほとんどでした。学生交流の際に理由を聞いてみると、現 在中国では大気汚染の影響でガスエネルギーの車を製造しない方向にあるとおっしゃって いました。自分の予測ですが、これはより燃費のいいハイブリッド車に力を入れている日本 企業に対して、電気自動車に力を入れている外車は中国の空気を綺麗にするために最も適 していると感じました。

3つ目は、中国の支払い文化です。世界中でカード支払いが一般的となっているが、まだ日本には紙幣で支払うことがほとんどで、カードで払う事が珍しいです。そこで中国の支払い文化はどのようにするのか気になっていました。すると、レジの横には必ず QR コードが存在し、WeChat でそれをかざして支払いを済ませていました。これを見て、WeChat などの人気 SNS で支払いを終えることは、誰でも使えるし、とても便利だと感じました。

今回の訪中団で非常に中国に興味を持ったため、大学の授業にある中国語と中国事情について深く学ぼうと思いました。私は東京ディズニーシーでキャストとしてアルバイトしていますが、中国からの観光客と毎回コミュニケーションをとることが難しく、心地よい接客ができませんでした。そのことがきっかけで語学勉強に現在力を入れており、職場で英語と中国語を話せる証明のピンバッチを手に入れ、多くの外国人観光客に楽しんでもらえるようにすることが今の目標です。それに加えて、国際関係学院で交流したうちの1人が自分の大学と協定校だったため、9月から半年間留学して来ます。そのために、日本や大学のことを色々紹介しようと思っていて、この訪中団で出会った仲間とも今後たくさん関わっていこうと考えています。日中友好協会の皆さんを始め、準備、歓迎してくださった方々、本当にありがとうございました。

◆今回、大学生訪中団に参加して、実際に自分の目で見て感じたことや考え方の変化についてまとめていく。

まず、訪問前の中国人のイメージと、訪問後の中国人のイメージの変化について考える。訪問前の中国人のイメージとしてはニュースでよく目にする仏頂面の政治家の印象が強く冷たい心を持っていると思っていた。しかしホテルのエレベーターで一緒になった人や夜市のキャッチの人やタクシーの運転手など愛想がかなり良く、接していてとてもユーモアさやフランクさを感じた。もう一つ訪問前に感じていた中国人のイメージとしては「うるさい」というイメージだ。コンビニやバスや電車の中でかなり大きな声で会話している中国人に出くわすことが多くこのイメージがついていた。でも実際自分が逆の立場で中国のコンビニや地下鉄に乗った時に興奮して友達に「あれ見て日本にもあるお菓子売っている!」「座席の上に変な標識がある」など少し騒いでしまった。普段見ない物や見慣れない景色を見たらその場にいる友達とそのことを共有したくなるのは当然のことで日本に来ている中国人もただうるさいのではなく、観光して気分が高揚しているのかもしれないということに気づいた。人を見るときに何人と国籍で見ている時点でナンセンスなのかもしれないが、今回の訪中で中国人のイメージが冷たい感じからフランクであると変化したし、声がでかくなってしまうのも仕方がないことであると感じた。

次に日本は隣国として中国とこの後どのようにかかわっていくかについて考える。団員が「日本と中国の関係は世界で最も重要な関係である」と言っていた。確かに経済がこんなにも進んだ国が近くにあるのは世界的に見ても珍しい。互いの悪いところばかり見たり、足

を引っ張りあうのではなく、手と手を取り合って仲良くしていく必要があると考える。自分は将来、観光に携わる仕事がしたい。今回の現地大学生との交流で中国人の若者の観光ニーズを獲得することができた。これはかなり大きな収穫でありそれいかして、観光客の行き来をもっと増やしていきたい。

最後に、今回訪中団に参加して自分の人生にどのような影響を与えたか考える。多くの友との出会いがあったことが自分の人生にいい影響を与えたと考えている。自分の大学で生活しているだけでは出会えないような参加者が多くいた。みんなしっかりとして考えや信念をもって活動していてとても同じ年代の学生とは思えないような人や、人とはちょっと違った価値観を持って生活している人本当に多くの友に出会えた。みんな自分の人生に誇りをもっており、めちゃめちゃ自信があるように見えたし、大きく見えた。自分はまだまだだなと実感できたし、これからさらに頑張ろうとかなりモチベーションが上がった。またいつかみんなに会う機会があるとしたその時には今の自分のより成長した姿をみなさんにお見せできるように日々の生活を実りあるものにしていきたと強くおもった。

◆今回の訪中団に参加したかった理由はいくつかあるが、一つ挙げるならば私の周りの人は中国に行ったことがない、ましてや中国人と話したことすらない、にもかかわらず、中国人や中国の国民性に対して真実かどうかもわからない噂を作り上げ、彼らのことを悪く言う。しかし何人かいる私の中国人の友達はとても親切で楽しい人たちばかりだ、かといって日本に留学に来るのだから親日なのは当然ともいえる。「百聞は一見に如かず」ということもあるので機会があれば、実際に現地に赴き真実を自分の目で確かめたかったということである。

実際に中国で過ごしてみて最初の感想は「空気が日本と変わらない」ということだった。昨今日本のメディアが取り上げている中国の環境問題は誇張どころかフェイクニュースだといっても過言ではないと感じた。また中国で出会った方々はたとえ日本語を話せなくても、英語や身振り手振りを使って積極的にコミュニケーションを取ろうとしてくれた。テレビでよく見る反日的な印象は無く、私の中国人の友達と同じように親切で温かかった。また中国人大学生と一緒に過ごす機会が2回あり、お互いの休日の過ごし方や日本と中国との学校生活の違いなどについて腹を割ってリアルなことを多く話せた。さらには彼らとSNSを交換して今度日本に来るときに会う約束もするほど深い繋がりができた。これは自分にとってかなり大きなことである、なぜなら、常に中国の近況を知ることができ、お互いにたくさん刺激を与えあえる貴重な存在だからである。この繋がりを絶すことなく、今後の日中関係に小さいながら貢献をしていくことが今回の訪中に関わって頂いた方々に恩返しできることの一つであり、訪中団として今回参加させてくれた日中友好協会の方々からの汲み取ってほしいメッセージでもあったのかなと感じる。

今回他に大きく私に影響を与えたのは他大学の学生との交流です。同じ大学の人とは留 学などで毎日の生活を共にしたことはあるが、考え方も生活の仕方も似ているので感じる ことはさほど変わらない。しかし今回は他大学の学生と生活を共にする、ましてや私は訪中団の中で唯一の道民だったので、生活の中で良くも悪くも新しい発見や価値観に出会うことができた。4班のメンバーは特に個性が強くて面白い人が多く、周りに恵まれた旅だったと改めて感じる。心残りがあるとすれば万里の長城に行けなかったことである。それがまた良く作用し、中国を訪れたい動機にもなっているので再び中国に赴く日も近いだろう。

一週間、中国でさまざまなものを見て、聞いて、感じたすべての経験が自分の見聞を広げてくれた。帰国後、感じているのは大きく二つあり、一つは自国のあらゆる分野における技術の高さに満身することなく、海外のさまざまな変化に目を向け、柔軟に受け入れていく姿勢を取ることが今の日本が改善すべき課題の一つであるということだ。もう一つは自分の目で確かめてみた結果、やはり周りが抱いている中国人の印象と実際のところでは、乖離している部分が大きいということだ。今の自分にできることとしてそのギャップを少しずつでも埋めていくような活動を積極的に行っていきたい。

◆この度の中国訪問、大学生との交流、街人との交流全てを通して新たな発見があり直接自分の目で見て聞いて感じることができ、とても有意義な時間となった。

中国は、自分が想像していたより広く、力があり、長い歴史をもつ国だと感じた。また、 勝手な中国のイメージが作り上げられていたことを実感した。

北京、敦煌、西安、上海それぞれ世界遺産や歴史的建造物を見学し、今まで社会の教科書でしか見たことがなかったものを目の前にすると言葉にできない感動と迫力に圧倒された。建物一つひとつが大きく迫力があり、広大な敷地、人工的な池、どれも規模の大きさに驚いた。また、どの建造物もとても長い歴をもつものの風化を感じさせず、その時代にタイムスリップしたような不思議な感覚に陥った。中でも、敦煌で見た景色、鳴沙山は印象的だった。飛行機から見える景色は全て砂漠で、鳴沙山では人間はこんなにも小さいのかと思うほど規模が大きく、砂山が連なっており、自然風で作り上げられた曲線美に人工物にはない素晴らしさに心を打たれた。

国際関係学院と西安外国語大学の学生と交流した時、真面目で勉強熱心な印象を受けた。日本に興味をもったきっかけは様々であるものの日本語を勉強して、一生懸命コミュニケーションをとろうとする姿勢は、言語を勉強する身にとって見習うべき姿であった。大学生になって学習し始めた日本語を2年程度で通常に会話できるレベルにまで到達しており、ひたむきに勉強を続けたら外国語が上達できていたのかなと自分に照らし合わせて考えた。特に西安外国語大学の皆さんは、日頃日本人と接触する機会がほとんどなく、今回の交流が初めてであると言っていた。私のパートナーは、「日本人の友達はあなたが初めてで出会えて本当に嬉しい。来年から日本に留学しますが、その時には今よりもっと日本語が上手になってあなたに会いたいです!」と言われ、こんなにも歓迎されると思っておらず涙が出そうなくらい嬉しかった。交流をしながら、プライベートな話や言語を学ぶ難しさについて話した。年齢が近いため恋愛の話が弾み、日中で相手に求める条件が異なることに気づいた。中

国の女性は、賢い男性が好きであるのに対し、日本人女性は賢さが絶対条件ではない。賢さを重視する理由を聞いたところ、学力競争が激しくなっている中、賢いほど将来安泰という考え方があるようでとても現実志向であった。また、学力の邪魔にならないよう、恋愛が高校卒業まで禁止であることに驚いた。言語を学ぶ上での苦労として、接続詞の難しさやモノの数え方で「ほん、ぽん、ぼん」と変化することの謎を質問され一緒に考えた。中国語を学ぶ私は、発音の難しさが悩みでコツを教えてもらったり、発音の矯正をしてもらったり直接中国の方に教えてもらう機会がないためとても貴重な時間となった。

今回の訪中で、現地の方と直接触れ合う機会が何度もあり、中国人ならではの主張や行動は必要なものであるのではないかと感じた。日本人は控えめであるといわれることが多く、逆に中国人は主張が激しいといわれる。物は言いようであり、「主張が激しい」といえばネガティブな印象を受けるが自分の意思を持ち発信することができるととらえれば、それはポジティブな印象となる。日本の10倍以上の人口である中国は、自分の意思がないと埋もれてしまうのではないかと考えた。実際、並んでいたとき、私たちの隙間にどんどん中国人が割り込んできた。日本人はパーソナルスペースを保ちたがるのか相手との一定の距離感をとるのに対し、中国人は空いている隙間があれば入り込んでしまう。それは、わざとではなくただ隙間があるからという理由からだろう。どちらが悪いわけでもなくこれは国民性からよるもので、捉え方の違いで不快に思うかそう思わないかに分かれると思った。日本人は、細かいことを気にしすぎではないのかとも思い、きっとお互いの認識の差がなくなれば解決する問題であろう。

総じて、現地で経験するということは国を理解する上でとても大切な過程であると思った。 現地に足を運ばなければ分からなかった生活習慣や家庭料理などでカルチャーショックも 受けたが、より中国に魅了された。また、国内は広く中国の方でも足を運んだことがない地 域が多いと聞き、今回の機会は大変貴重で恵まれていたと実感した。貴重な体験を提供して いただき、ありがとうございました。

◆今回の訪中では、様々な経験をさせていただきました。一週間で4都市を駆け巡るハードな旅ではありましたが、その分密度の濃い充実した一週間だったように感じます。各都市での故宮や莫高窟、兵馬俑の見学を通して、中国の悠久の歴史を自分の肌で感じることができました。さらに北京や西安、上海ではさすが中国経済の勢いをまざまざと思い知らされるほどの高層ビルの数々に目を見張りました。そのような中でも、私が今回の訪中で最も大切にしていたことは2つの「交流」です。

まず一つは、中国の大学生との「交流」です。普段の生活の中において、中国の大学生とゆっくり話し合う機会はなかなか無いため、今回の訪中このような機会をいただけたことは大変貴重な経験になりました。中国の学生たちは総じて皆とても真面目で勉強熱心な印象を受けました。私が今回出会った日本語学科の学生たちは、全員大学に入学してから日本語の勉強を始めたと言っていたのですが、そのようには思えないほど皆とても流暢な日本語

を話していて驚愕しました。そして同時に、私も中国語を勉強する身としてそのような姿勢 を見習わなければいけないな、と感じました。

このように、中国の学生たちが日本の学生よりも勉強熱心な理由の一つとしてアルバイトが挙げられると思います。日本の大学生は多くのひとがアルバイトをしていて、そっちに時間が取られてしまうために勉強が疎かになっている場合が多いように感じます。実際に私の周りの友人にも、アルバイトのために十分な勉強時間が確保できずに成績に影響してしまう例を見てきました。なぜ中国の学生はアルバイトをしないのか、不思議に思った私は交流のペアに訊いてみたところ、驚くべき事実が分かりました。中国ではアルバイトの時給が驚くほど低いということです。私は現在日本で一時間あたり1000円の給料をもらっていますが、ペアの彼女は一時間あたり11元(日本円で187円程度)しか貰えないのだと話してくれました。このことは、アルバイトをする際にはとても不都合なように感じますが、一方でこのことが中国の学生たちがアルバイトに明け暮れることなく勉強に集中できることに一役買っているのだな、とも思いました。

そしてもう一つの「交流」は他の団員との交流です。この訪中のために日本中から集まった 団員たちとの出会いは、普段の学生生活ではなかなか得難い貴重なものだと私は感じています。そのため、この団員たちとの交流も私にとっては今回の訪中の目的の1つでした。私 が所属していた4班では、北は北海道から南は熊本、さらに私も含めて5人の関西の大学生 といった地方色豊かなメンバーでした。そのため食事の際などには、よく各地方の話で盛り 上がりました。特に方言に関してはとても盛り上がり、話題が尽きませんでした。印象的な ものとしては、同じ関西地方でも大阪と和歌山で全く違う言い回しをすることです。大阪で は使わない言い回しの一つとして、和歌山出身の団員が青あざが出来たことを「にえた」と 言っているのがとても奇妙に感じたのを覚えています。

さらに、私は現在大学三年生で就職活動を目前にして、自分の将来について悩んでいました。 今回一緒に過ごすなかで、同じ班の団員とそのような悩みを共有したり、先輩から就職活動 についてのアドバイスをいただけたことは、とても嬉しかったです。

今回私が出会った中国の学生たちや団員たちは、全員素敵な人たちばかりでした。彼らと過ごした時間はとても楽しいものでした。さらにこの交流を通しての気づきも多く、大変有意義な経験をさせていただきました。この貴重な出会いを決して無駄にしないよう、今後も積極的に連絡を取り続けたいです。

◆今まで海外へ行った経験は多く、これから訪れたい国も多くある。しかしそんな中、中国 へ行ってみたいと考えたことは一度もなかった。なぜか、自分でも無意識のうちに隣国であ る中国を避けていたように思う。

訪中前の中国のイメージはそれほど良くなかった。中国にある日本の企業の建物が、中国の 人々によって壊されているのをメディアで目にしたことが初めの印象だった。また、中国人 は「爆買い」をし、列には平気で横入りし、話声も大きく品がないような、周りの人のこと は考えない振る舞いをするものだというイメージが自分の中でできてしまっていた。

しかし今回この訪中団へ応募したのは、他でもない中国の人々に興味を持ったからだ。春休みにシンガポールで開催された、アジア各国から学生が集まって交流をしながら、リーダー育成を目指すという 1 週間のプログラムで実感した。そこでは台湾を合わせて中国語話者が過半数もいた。ルームメイトも中国人で、このプログラムを通して、中国の人たちが自分の抱いていたイメージと違うことに気が付いた。彼らは優しく、日本の友達といる時のような心地よさを感じた。そして自分も中国へ行ってみたいという思いが出てきて、ちょうどそのタイミングでこの訪中団のことを知った。

中国を訪れてみて率直に感じたことは、中国の人はフレンドリーな人が多いという事だ。 ナイトマーケット等を散策していると、お店の人が首にかけていた名札を見て、名前を呼ん でくれたりした。ホテルのビュッフェで食事が終わって食器を下げてもらった時、美味しか ったかと聞いてくれた。また多くの人が、謝謝という言葉を言うだけでにっこりとほほ笑ん でくれる。北京や西安で大学生と交流した時も、一生懸命に観光地の案内・説明をしてくれ た。日本と中国の間で多少の違いがあるのは当然だ。しかし若者の恋愛観などの話題で、根 本的に似ている点も発見した。一方で勉強に対する考えが日本人学生よりもしっかりして いる等、彼らと話す中で日本の大学生の甘さも感じた。自分のこれからを考える上でいい刺 激をもらうことができた。普段の旅行では経験することのできない、中国の若者との交流は 自分の中での中国人像を変えてくれるきっかけとなった。中国人はマナーが悪いといった 見方などは、全体を見ず一部しか見ていない意見だと思った。

今回の訪中では4都市を訪ねることができた。この旅を通して色々な人と交流し、自分の目で中国のことを見ることが出来た。しかし中国は広く、4都市を訪ねたとはいえ、それだけで中国がどんな国なのかを判断するのは不十分だ。また、1週間という比較的短い期間だったので深いところまで知ることはできなかったように思う。そして日本でも東京や大阪をはじめとする都市や地方の都市で雰囲気が違うように、中国でもそうだと考える。私自身、ある国を知るにはその国の人と関わることが一番良い方法だと思っている。そのため、大学生訪中団をきっかけとしてこれからも中国との関わりを持ち、色々な場所を訪れたい。その中で、交流する姿勢を忘れないようにし、日本と中国の関係がさらに良い方向に進むようにしたい。

◆今回、私がこのプログラムに参加しようと思ったきっかけは、大学で中国学を専攻していて、この4年間で中国語を話せるようになることを大きな目標としているため、今回この中国訪問において、何か得ることのできる大きな経験ができるのではないか、またこの訪問をきっかけに中国に対する考え方がさらに変化するのではないか、といった期待を抱いて今回応募しました。

私は2年前に、中国の山東省にある済南市を訪れたことがありました。それが中国に初めて訪れたときでした。しかし、その時は中国語を学習して半年くらいで、ほぼ話すことがで

きず、英語でコミュニケーションをとるほかありませんでした。あれから2年たった今回、 以前より中国語を使って会話することができ、何より自分の発音がちゃんと伝わったとき が一番嬉しかったです。もっと中国語を頑張って勉強しよう、と強く思いました。

今回、1週間という短い期間にも関わらず、北京、敦煌、西安、上海といった4つの都市を訪れることができました。中でも印象深いのは敦煌の莫高窟です。この莫高窟は50年後には遺産を保護するために閉鎖され、もう見られなくなる遺跡です。このような貴重な遺産を生で見ることができ、本当に良かったです。同じく敦煌にある砂漠のオアシスと呼ばれる鳴沙山は、本当に一面が砂漠でスケールの大きさに圧倒されました。この砂漠は中国人でさえもなかなか来ることができないらしく、私は一生に一度かもしれない貴重な体験をさせていただき、良い経験となりました。

北京の国際関係学院の学生、また西安にある西安外国語大学の学生の皆さんと交流したときには、中国人の学生の日本語の上手さに驚きました。「何年くらい日本語を学習しているの?」と尋ねると、ある学生は2年と答えました。この時、自分自身も中国語を学習して約2年という同じくらいの期間であるのに、「私はこんなに流ちょうに話すことができない。どうして?」と、そう感じました。学生と交流を進めていくうえで、その答えがわかりました。中国の学生のほとんどはアルバイトをしていません。なぜなら、学生はみな学内の寮で毎日生活し、朝から晩まで勉強漬けの日々です。また、学費は親が払うのが当たり前だそうです。日本ではほとんどの学生がアルバイトをしています。中には学費を自ら稼いで払っている学生もいます。このように、中国と日本の学生はまず、勉強に対する意欲に違いがあることが分かります。この点においては、私たち日本人は中国人の学生たちを尊敬し、真似すべき点であると思いました。

この1週間天候が悪い日はなく、暑すぎるくらい毎日天気が良かったからか、PM2.5 は全く 気になりませんでした。しかし、特に敦煌は湿気がないので過ごしやすいのですが、かなり 乾燥しているため、喉は壊しやすいです。また、食べ物に関しては、比較的脂っこいです。 毎日がバイキング形式の食事で、どれだけ食べたらいいのかわからなくなって、私は4日目 くらいからずっとお腹を壊しました。食事に関しては、自分で制限することを学びました。 私はずっと中国への長期留学を迷っていました。ですが、この訪中を終えて長期留学する決 心がつきました。そのきっかけとなったのは、現地で中国の学生と会話を交わし自分の中国 語がまだまだ未熟だと感じたからです。しかし、もう一つ理由があって、それは同じ班の学 生が中国へ 1 年留学するということでした。その学生は 1 年間大学を休学する決心で 1 年 留学することを決めたと聞いて、私の学校では周りの友達が休学してまで留学するという 話を聞いたことがなかったので、かなり驚きました。しかし、留学したいのなら、それくら いの決心が必要なのだと私は気づかされました。今回のこの訪中では現地の学生から学ぶ ことだけでなく、日本全国から集まった 100 人の学生からも刺激を受けることが多くあり、 普段得ることのできない刺激を得ることができ、本当に良い経験となりました。私はこの訪 中団としてこのプログラムに参加することができ、今回関わってくださったすべての人の 出会いに感謝し、今後も日中友好の懸け橋となれるような人になりたいと私は思っていま

◆北京に着いた時、東京よりはるかにパワーを持ち、しかも底知れない潜在的なパワーも持っていることがすぐに分かった。4 車線の道路、綺麗な空港、キャッシュレス社会。一方で、次から次へと建てられるビルの建設現場では竹の足場が使われている。高度な先進性と微かな脆さを持ち合わせた北京の街は、もう進歩の余地がないように見える東京に住む私にとって刺激に富んでいた。だがさらに驚いたことは、西安や上海も同じように発展していたことである。もうもはや、「日本で例えるとここは~」が通用しない。ほぼ東京と同程度の機能を持ち、その倍以上の面積の土地を持つ都市が中国には 4~5 つくらい存在している。日本の 25 倍の面積、13 倍の人口を持つこの国が持つ潜在能力は計り知れない。

さて、そんな中国に行き、我々が吸収してくるべきものは何だったのか、派遣を終えた今でも、正直分かりかねる部分が多い。例えば日本政府が主催する国際交流事業ではもっと少人数で、人と人との関わり合いからその国の良さを知るような事業が多い。もちろん今回も現地の同年代の人と関わる機会は設けられたが、いささか薄い交流に終わってしまった。今回の派遣は日本人学生 100 名という大規模であったため、日本人同士の交流も中途半端なまま派遣を迎えたことにより、人を介してその国の魅力を知るということは少なかったように思える。

しかし、派遣を終えて味わう、圧倒されたような充実感はやはり、中国という国が持つ強大なパワーによって与えられているのだろう。その根底にあるのは、「自信」だと思う。中国人は自分という人間やそれを形成するアイデンティティ、それに根ざす国民性に自信を持っていた。だから、タクシー運転手は英語で話しかけても全く通じず自分が正しいと思った道に進む。このプログラムで人と人との交流が少ないのも、我々日本人に本当の中国を見てもらえれば必ず好きになってくれるだろうという、中国という国が持つものに中国人は少なからぬ誇りを持っているからなのではないかとも思える。だが、国際関係学院の学生は、「中国が持つ素晴らしい文化的遺産を、中国人の国民性が邪魔している。日本人に触れ合うために日本に観光しに行くことは多いが、中国人と触れ合うために中国に来る外国人は非常に少ない。」と嘆いていて、中国人の意識変革の必要性を感じていた。そういう焦りを世界一の国に成り上ろうとしている中国が感じている点を見れば、日本も今持つ文化や国民性にあぐらをかくことなどあってはならないと、日本人としての自分の「意識」を更新する機会に恵まれた。

今までいくつかの国際交流プログラムに参加して来たが、外国との交流を通じて自分の 内面とその国を見つめ直し、自己成長を図るプログラムが多かった。双方向的な意思疎通で ある。しかし今回は我々から与えたものはほとんどなく、一方的に素晴らしい経験をしただ けで終わってしまい、若干の心残りではある。しかし今、我々の心の中に存在する満足感は、 中国という国が持つパワーや魅力によるものだろう。また、中国人と直接接したことで、自 らのアイデンティティや主観に自信を持つことと、それに安住せずに意識を更新していか なければいけないことを学んだ。多くのものを与えられたため、今は簡単に整理できるものではないし、時間をかけて咀嚼していくべきだと思う。しかしそう遠くない将来で、「あのとき中国に行っておいて良かった」と思う日が来ることは間違いないと確信している。

◆今まで中国に行ったことがなくメディアや人から聞いた話で中国のイメージを作り上げていました。中国人の知り合いがいないなど中国となじみのない日本人は中国に対して悪い印象を持っているように感じていました。私は中国から来た仲の良い友達がいるため、そこまで悪い印象は持っていませんでした。中国という国には少し良くない印象もありましたが、それ以上に中国人の友達はみんな優しく友好的で、おまけに勤勉と尊敬できる人々なので、いい印象があり、ぜひ中国にて現地の大学生と交流したいと考えていました。

実際に中国に行ってみて、現地の学生との交流や観光を通して、今までの想像してた中国とは違う本物の中国を見ることができました。向こうの大学生は想像していたよりずっと勉強家でした。中国は日本より言語教育が進んでいると思ってましたが、もちろん教育の質も高いですが、それ以上に努力ゆえに成果を出しているという印象でした。日本の大学生は勉強もサークルもバイトもといろいろなことをしますが、中国の学生は勉強が主であり、中には一日8時間などたくさん勉強するという違いに驚きました。また、大学卒業後についても、日本ではほとんどの人が就職しますが、中国の学生は、ほとんどの人が院試や公務員のための勉強を続けます。中国が技術や発展が目まぐるしく経済大国といわれるゆえんはここにあるのではないかと考えました。中国の教育と日本の教育どちらが良いとは一概には言えないが、こういう国もあるんだと知れてよかったです。

中国の料理は日本と全然違いました。何が、と言われると説明が難しいのですが、食材や味付けの好みが変わっていた気がします。なぜなら、中国から帰ってきたときに日本食を食べて感動したからです(笑)。 やっぱり日本食と中国の料理は違うんだなと思いました。

中国のいろいろな都市を回りました。北京、敦煌、西安、上海を回るのはとてもハードなスケジュールでしたが、たくさんの場所を訪れることができてよかったです。中でも敦煌に行けたことが良かったです。莫高窟の壁画には大変感動しました。言葉で表すのは難しいのですが、何か引き込まれるような魅力を感じました。また、砂漠に行けたのが大変印象に残っています。日本にはそのような場所はないので今回の機会は大変貴重なのではないかと思います。天気も良くきれいな写真がたくさん撮れました。いわゆる、インスタ映えというやつですね(笑)。

敦煌の他にも、北京や西安、上海も素晴らしい町でした。故宮や頤和園では中国の雄大な土 地を感じることができました。

一方で、空港や観光地のお店で日本語も英語も通じないことに驚きました。というのも先ほど述べたように中国の大学生は大変勤勉家で英語も日本語もできるからです。空港でさえ英語が伝わらないことには驚きました。中国は社会格差が大きいと聞いていましたがそれを肌で感じることができました。

◆今回の訪中団で私は初めて中国に行きました。訪中するまで、中国のことについてはよく理解していませんでした。ですが、訪中してみて中国の都市部はもちろん地方も発展しているということがよくわかりました。敦煌・西安に行くと言われたときは、人々の移動手段は徒歩が圧倒的だと思っていたし、高層ビルなんてないと思っていました。しかし、実際に行ってみたらビルは乱立していて、夜でも街頭で明るく車は行きかい、とても発展していることがわかりました。日本にいても、夜までにぎやかな街はなかなかみないのに、中国は本当にすごい国だと実感しました。これは、実際に中国を目で見て、舌で味わって、向こうの空気を吸い、雰囲気を感じなければわからないことでした。素晴らしい経験を積むことができたことが幸せです。

また、向こうの学生はとても勤勉で日本の学生とは全く違うこともわかりました。中国の学生は学費が安く、また親が生活費を出してくれるからバイトをしないで勉強する時間があるんだよ、と教えてくれた学生がいましたが、豪遊しようなどと考えず、勉強しようと思えることが素晴らしいです。私もこれからは真面目に勉強しようと心に誓いました。日本の大学は、入学するのは大変ですが、入ってしまえば卒業するのはとても簡単なので、授業をさぼり遊ぶ人が多いですが、中国に行ってそんな考えを持っていることが恥ずかしいなと感じました。

今回の訪中で、中国への印象はだいぶ変わり、以前よりも好印象を抱くようになりました。 これからの日中関係が良い方向に進んでいくのではないかと、明るい未来も想像できまし た。隣国に対する印象が良い方向に変わることはとても素敵なことで、今回の活動に参加で きてとても嬉しかったです。しかし、悲しいこともありました。それは、帰国してからの出 来事で、バイト先の店長に中国なんて変な国だし、中国に行こうなんて思う人の心が知れな いよ、と言われたことです。実際に行って、中国を肌で感じたこともないのに、そういった 発言をすることは相手にとても失礼ですし、上の世代の人達には、中国に対するイメージが 悪い人がまだまだいることを改めて実感しました。イメージが良くならないのには、メディ アの情報の伝え方にも問題があると思います。中国人はマナーが悪く、傲慢な人ばかりであ るといった情報ばかり流しているように感じます。国や地域に関係なく、マナーの悪い人や 傲慢な人はいます。中国は母数が他の国よりも圧倒的に多いために、そう見えているだけだ と思います。日本と中国は古くから交流を続け、これからも日中関係は途切れることはない と思います。隣国といえども使う言語も文化も違います。ですから、相手の悪い面ばかり見 るのはやめて、いかにうまく付き合っていくかをこれから両国で考えていくべきです。 最後に、中国の実情についてまだまだ誤解している人も多いです。 少しですが、中国事情を 理解しているものとして日中の懸け橋になれるような活動をしていきたいです。

◆私はこの3年ほど中国人の先生から中国語を習っていたり、オーストラリアに留学した

際に中国人の留学生の友達ができたりなど、中国人と接する機会が多くありました。私の知っている中国人は親切な方ばかりで、私の目からは自分と変わらない生活をしているように見えていました。しかし、日本にいると中国人の爆買いや、観光地でのマナー違反についての報道が目に付くと感じます。また、周囲の人も私が中国を訪問することを伝えると、治安は大丈夫なのか、列に並ばないと聞いたことがあるなど、中国や中国人に対しよい印象は抱いていないようでした。私が今まで実際に中国人と接して得た実感と、周囲の人が抱いている印象が違うのはなぜか。私はその理由を自分はたくさんいる中国人のうち、外国にいる中国人としか接したことがないからだと思い、中国で中国人がどのように生活しているか見たいと思い訪中しました。

訪問した国際関係学院と西安外国語大学で交流した学生とは、普段どのような生活をしているかについているいろ話を聞きました。すると彼らも毎日の授業についていくために熱心に勉強し、就職や進学について悩んだり、テレビドラマを見たりするなど私の普段の生活と全く同じようでした。私は、朝は公園で太極拳をするのか、公園に卓球台を置いて見知らぬ人と卓球をするのか、中国の大学は敷地内に学生寮や教職員寮があってまるで町のようになっているのは本当かなど今まで自分が聞いたことのある中国人の生活に関するうわさを尋ねました。すると、「朝に太極拳をやるのはお年寄りだけだよ」、とか「田舎の方ではお年寄りや子供は公園や道で卓球をするよ」、「郊外にある大学では学生や教員のための寮が団地のように立ち並んでいることもある」など実際の中国人の生活について聞くことができました。貴重な経験だと思いますし、話を聞けて楽しかったです。

また、大学での交流以外でも、中国人と接することができました。私は兵馬俑を見学するために列に並んだ際、他の団員とはぐれてしまい、きょろきょろしていたのですが、列に並んでいた中国の人が、指差して他の団員がいる場所を教えてくれて、快く列に入れてくれました。ほかにも、鳴沙山に登った時、私は体力が無くてゆっくりと登っていたのですが、後ろを歩いていた方が頂上に着くまで話しかけたり、励ましたりしてくれました。

私には中国に住んでいる中国人も礼儀正しく親切で、自分と変わらないように感じました。ならば、私が今まで、そして今回の訪中で実際に話して感じた中国人に対する印象と私の周囲の人が抱く中国人の印象との差異はなぜ存在するのでしょう。中国人と大きくくくるのは難しいかもしれませんが、中国人はまだ私が知らない一面も持っているのかもしれません。中日友好協会の方が、中国はとても広くて、たくさんの人が住んでいて、中国人の自分でも、自分の出身地から遠い地域やそこに住む人についてはわからないところがある。だから、一度ある地域に行って、それだけで中国と中国人全体の印象を決めないでほしいとおっしゃっていました。

私は今回初めて中国に行きました。そのため、行く前は自分の目で見て中国がどのような国なのか、どういう人が住んでいるのかを見極めたいと思っていました。しかし、私は広い中国のたった 4 都市に短い時間滞在しただけです。もっと長い間滞在すればほかの一面も見えてきたかもしれません。また、どの都市の方も一様に親切でしたが、他の地域ではもっと全く違う人に出会えるかもしれません。ほかの都市でなら公園で太極拳をしているお年寄

りや町のようになっている大学を見ることができたかもしれません。私にとって広大な国 土にたくさんの人口を抱え、知らないことがまだまだたくさんある中国は大変魅力的な国 だと思います。私は今回の訪中でその魅力の一端に触れて、もっと中国や中国人について知 りたいと、そしてぜひまた中国に行きたいと思いました。今回の経験を大切にして、いつも 中国や中国人に関するアンテナを高くし、私が実際に見てきた中国や中国人について積極 的に発信していきたいです。

◆私はこの度の訪中で得たことが大きく二つあります。それは、「偏見の怖さ」と「人脈の大切さ」です。

まず、偏見の怖さについてですが、私は訪中する前は、中国という国家や中国人に対して 悪い印象を持っていました。それはメディアにより流された悪質なイメージで僕の潜在意 識まで浸透しているものでした。特に中国人に対する悪いイメージが強く、自己主張が激し い人や人の話を聞かない人が多いという偏見がありました。その偏見のせいで私は海外に 興味を全く持つことができず、国内に閉じこもり、ひたすら偏見を増殖させていました。し かし、今回の訪中では私の間違った偏見を見事に打ち砕いてくれました。実際に会って話し た中国の学生は皆、謙虚な姿勢で私の言葉に真剣に耳を傾け、同意を示し、疑問点があれば 率直に尋ねる素直な一面を持っていました。おかげで僕は終始、中国の学生と生産的な議論 を交わすことができました。実際の中国の学生は私が抱いていたイメージとは大きく違っ たものでした。以上のことから、私は偏見の怖さを学びました。もし、私が今回の訪中団に 参加せず、中国人に対する偏見を抱いたままであったら、きっと私の世界は広がりを見せず、 人としての成長が見られなかったと思います。また、悪いイメージを周りの人や子供に伝え る危険性がありました。偏見は世界を狭め、その人の可能性や未来を潰す恐れがあることに 気づきました。間違った偏見を抱いていたことに実体験を通じて自覚できたことは私の人 生において大切な学びでした。他にも、中国人だけではなく、中国という国家に対して抱い ていた偏見も、実際に街を訪れ、街を歩き、食べ物を食べ、自分の目で見ることによって解 消されていきました。

次に人脈の大切さですが、私は今までの学生生活で大学内の人としか関わりを持っておらず、かなり閉鎖的な学生生活を過ごしておりました。しかし、今回の訪中団で私は中国の学生だけではなく、日本の学生とも繋がりを持つことができました。一緒の班になった班員を中心に会話を通じて、意見や考えを交換することでたくさんの刺激を受けました。特に私は今まで閉鎖的な学生生活を送ってきておりましたので、海外に何回も訪れ、ボランティアに積極的に参加している仲間の話を聞くのは大変興味深かったです。今回の訪中団で出会った仲間たちとつながることで、私は行動の動機を得るだけではなく、行動範囲と自己の可能性の広がりを感じました。また、今後も会う約束をすることができ、将来何かを成し遂げたいとき、夢を叶えたいと思ったときに力を貸してくれる存在を作ることができました。また、多くの新しい繋がりを持つことで私は幸せで安心した気持ちになりました。人脈という

のは仕事や人生の成功に必要なだけではなく、人の幸福度を高めるものなのではないかと 思いました。今度も今回であった仲間を大切にしていきたいと思います。

以上の二つが今回の訪中で私が学んだことです。これからの人生では偏見をなくすこと、自分の抱いている偏見を疑い、積極的に新たな人と関わり、人脈の形成に努めていきたいと思います。今後の日中関係をどのようにしていくべきか、という問いに答える回答を私は持ち合わせていませんが、政治にせよ経済にせよ、はじまりは「人」であり、その「人」との関係の改善がもしかすると国家の関係の改善につながるのではないかと思いました。心より中国に行けてよかったと思います。貴重な機会を与えていただき、誠にありがとうございました。

◆今回の訪中では驚きばかりで様々な発見がありました。その中でも特に、大きく分けて三つのこと、中国人に対する印象、電子決済、文化について印象深く心に残りました。 訪中前、正直に言うと私は中国に対して良い印象を持っているわけではありませんでした。中国人の友人は何人かおり、彼らとは良い関係を築いていましたが、テレビなどの印象から中国国内に住む中国人は日本人に対して冷たいのだろうというイメージがありました。 しかし、実際に中国に行くとその考えは変わりました。現地にて交流した日本語学科の学生たちは笑顔を絶やさず観光名所の案内やディスカッションに取り組んでくれました。また、上海にて私のつたない中国語でスーパーまでの道を尋ねると、一緒にスーパーまで歩いて連れて行ってくれた中国人もいました。他にも、自由行動の際に街で接した一般人に対しても親切な印象を受けました。私たちには日本人、中国人というラベルが貼られ区別されていますが、結局は人と人との付き合いです。メディア等に影響されず、偏見を持たずに、個人個人が目の前の相手に真摯に向き合うことが大事だと感じました。

電子決済に関しては街の小さな商店のような所でも導入されていて、多くの人が利用しているのを目にしました。携帯電話一つで簡単に決済でき便利だと思いました。また決済アプリに記録が残ることで家計の管理もしやすいようになっていました。そこで、なぜ日本ではこのシステムが普及しないのかと疑問を持ちました。一般に保守的だと言われる日本ですが、良い面は素直に取り入れていくべきだと感じました。この急激に世界が変わっていく時代に変化を受容する心が無いと自国の企業の発展を遅らせることになると思います。アリババなど中国の大きい企業が短い間で発展したのは電子決済等、新しいものを国民が受け入れたからではないかと考えました。

文化に関して、私は中国の文化・歴史に興味がありませんでしたが、訪中し文化・歴史に触れより深く中国の文化・歴史を知りたいと思いました。特に鳴沙山・莫高屈・兵馬俑はスケールの大きさを感じ、このような壮大なものを古い時代の人間が成し遂げたということに感動を覚えました。また、恥ずかしながら、中国に砂漠があるとは知りませんでした。私は大学の授業で中国語を学習していたのですが、中国に興味が無かったので全く身につきませんでした。文化・歴史に興味を持ち、もう一度中国語を勉強しようと思いました。

百聞は一見に如かずと言いますが、まさにそれを実感する訪中で、訪中前は自分がここまで 中国に関心を持つようになるとは思いませんでした。私が興味を持っていなかったのはメ ディアで報道される中国だったと気付きました。本当の中国を目で見て、肌で感じ、舌で味 わうことで、中国に対する見方が大きく変わり、より中国のことを知りたい、日中友好・日 中協力の架け橋となりたいと思うようになりました。

最後に、このような機会を与えてくださった日本・中国の友好協会のスタッフの方々に感謝 したいと思います。この感謝を忘れず、日中友好の架け橋であり続けるように努めてまいり ます。ありがとうございました。

- •
- ① 訪中前の自分の中国に関するイメージ
- ② 中国の良いこと・もの探し
- ③ 中国の良さや魅力を伝える
- (1)

まず訪中前、中国に関して、発展が著しい活気のある先進的な国というイメージと同時に、 日本と雰囲気はあまり変わらないのではというイメージがあった。私の友人に中国の清華 大学に留学していた人がいる。彼からは中国は都市の発展が目覚ましく、人々も活発であっ たということを聞いていた。私と同じ大学に通っている中国出身の友人たちも皆まじめで、 勉強熱心だ。それゆえ最初に述べたイメージが私の確固たる中国のイメージとなっていた。 また、中華思想や三国志、中国共産党、国土面積が大きい、国連の常任理事国などの知識か ら、「強い国」・「勢力のある国」という漠然としたイメージもあった。それらを含め、私は 訪中前元々中国に対しては良いイメージを持っていたと思う。しかし残念なことに、私は日 本で中国人への誹謗中傷や悪い偏見を耳にすることが多々あった。私の出身地である鹿児 島県南さつま市や近くの枕崎市には多くの中国人の方々がおり、幼い頃から日頃彼らを目 にしてきた。言葉が通じない、もしくは理解できない言葉を話す彼らを奇妙に思う日本人が 少なからずいた。私は彼らを嫌ってはいなかったというよりは、気にかけてすらいなかった。 大学生になって中国人に良心的になれたのは、中国人の友人たちのまじめさや人柄の良さ のおかげだと本当に思っている。ではどうすれば日本のそう思っていない人や以前の私の ように関心すらない人に、中国に対する良い印象を持ってもらえるのか。そのことを念頭に 置いて私は今回の訪中団に参加した。

(2)

良いイメージ・印象を持つためには、中国の良いところを知る必要がある。ここでは私が中国で学んだ中国の良いところ3つをあげる。まず中国の最新科学技術・ハイテク機器事情について。空港の入国検査の前には混雑を防止するために指紋認証の機械が沢山使われてい

たり、夕食会の式場にはAI案内ロボットがあったり、コンビニエンスストアの支払いが無 人機で行われており、日本ではまだまだ見ることのできない、実装されていないものばかり だった。また、キャッシュレス技術も確立されており、若者からお年寄りまで誰もが端末機 器で支払いを済ませられる環境が整えられていた。西安外国語大学の学生から聞いた話に よると、このようなキャッシュレス制度が進んだのはここ 3,4年だという。主に利用され ていた支払いツールは、「Alipay」と「WeChat」の2つ。少数の特定ツールに絞ることで、 複雑にならないようになっていた。便利なもの・最新のものをどんどん取り入れていこうと している中国の積極的な姿勢は見習うべきだと私は思う。次に中国の食べ物について。昔の 段ボールギョーザ事件の影響か、あまり中国産の食べ物に良い印象を持っていなかったが、 日本にはない独特の味の数々を経験して、中華料理に興味がわいた。また、日頃私たちが中 華だと思って食べていたものは、日本人用に味付けされていることに気付かされた。また、 果物がとても美味しく、特にスイカはどの都市でも美味しかった。これらの魅力的な味の料 理や、おいしい果物があることを知り、私の中で中国の食べ物の印象はとてもよくなったと 思う。最後に中国の大学生について。日本での中国人の友人から推測するに、現地学生もま た勉強熱心であろうと考えていた。勉強熱心であることはあまり変わりなかったが、自分が することに一生懸命打ち込んでいるという印象が強かった。勉強も頑張る、自分の趣味もと ことん深めるというような感じだった。日本人はまじめなイメージがあると、現地の学生に 言われたが、中国のほうが必死に頑張っているように感じ、なぜ日本人にまじめなイメージ がついているのか考えさせられるきっかけになった。勉強、将来のことなど、国は違えど同 じ悩みを抱えて必死に努力している彼らに同じ大学生として親近感がわくとともに刺激も 受け、日本でも離れている彼らが奮闘していることを思い出して頑張ろうと思った。

(3)

訪中を終え、私がすべきことはこれら中国の良いと思ったことや魅力を周りの人に伝えることだ。自分の家族や学校の友人などに、話したり SNS を活用したりしてより中国に親しみを持ってもらえるよう頑張ろうと思う。また、私や同じ訪中団の仲間のそういった活動によって、広く中国の良さが伝わることを願う。

◆訪中を通じて、"ありのままの、自分の目の前に広がる中国を見て、聞いて、体感できる滞在になった。" 私は、中国に行く前、このプログラムに参加する前まで、中国へのイメージは、どちらかというとマイナスな印象しかなかった。近隣国であり、爆買いをしに日本に来てくれるにも関わらず、中国の中身について自ら知ろうとせず、流れるニュースをそのまま、解釈したり、聞き逃したりしていたように今では感じる。興味がなかった自分が情けない。現地へ行ってみると、想像していた何倍も何十倍も面白かった。近隣であるのに、文字、標識の違いから、人の性格、学生の学びへの姿勢、食べ物、文化の違いが異なっていた。国が違うから異文化は当たり前だと言われるかもしれないが、私にとっては同じアジアで

顔も似ている中国がここまで異なる文化や考え方をもっていることが新鮮で驚いた。 人・日常・今後という3つの観点から書きたい。

1つ目に、中国・現地の方の表情は、無愛想に見えて温かった。敦煌での夜市で、飲み物を商店で買おうとした際、拙い中国語、言語ではほぼ通じなかったにも関わらず、携帯で伝えようとしていて、身振り手振りでコミュニケーションを図ろうとしてくれた。言語で通じないのならば、良いやと適当に対応されそうだが、付き合ってくれたし、楽しそうに中国へ来たことを歓迎してくれた。道を尋ねた際や、今回の滞在で2回、大学生と交流の機会があった。国際関係学院との学生交流が私は忘れられない。テーマを決めず大学生活の話、寮生活や、流行りのもの、男女の恋愛観比較など、たわいのない同じ若者ならではの交流が出来、中国の若者も、私たちと変わらない面ももっていることがわかったし、優しさや思いやりを感じて改めて中国人の印象が変わったし、楽しかった。全力で踊ったソーラン節は、会場の雰囲気を変えることができたし、とてもかっこよかったと中国の学生から声をかけてもらう機会になったし、踊りで思いを共有することもできることができて嬉しかった。2つ目に日常という観点からは、みるもの全てが斬新であったように感じる。働き方がフレキシブルであるということ、自由に接客をすることも多い、携帯を触わっていたり、話して

いるなど日本の従業員教育の素晴らしさや、サービスについての質も異なるように感じた。 コンビニは日本と同様に多かったし、日本にあるものとよく似た名前やマークも多かった。 日本のもの、特に化粧品は高く販売されていることから日本の品質の高さや需要があるこ とを感じさせた。その中でも、日常で一番、衝撃を受けたのは、トイレかもしれないと私は 考える。中国での洗手间は、トイレットペーパーを置いているところが極端に少ない。ある ことが当たり前な私たちは、ホテル、空港では見かけなかったため、ティッシュを持ち歩い た。流すか捨てるかも分からず戸惑ったし、日本の綺麗なトイレが少し懐かしく感じた。い 和園散策中に見つけた星4つの公共トイレは採点基準の不明さが面白かった。私は、交通面 で衝撃を受けることが多かった。車線が多いところでは、片道5車線あり、両側合わせると 10 車線であったのには思わず笑ってしまった。車が多く、車線変更も頻繁に行うし、クラ クションはよく鳴らす。中国は渋滞対策でナンバープレートの走行規制していることがガ イドの方の話から興味をもって調べたことによってわかった。北京では抽選制度で抽選に 当たらなければ車を買えないこと、当選率の低さより、人口増加や環境汚染へ向けて生活の 難しさが客観的にでもわかった。ナンバープレートの方が車より高いというジョークのよ うな本当のことには笑えなかった。ナンバープレートの色は、青、黄色、黒、白、緑などと 日本と同様、外交官や、車種により異なることがわかった。バイクではないモーターサイク ルも道路にはよく走っていて、小さいにも関わらず2人乗り、3人乗りがいること、自転車 と同じ車線を走っていた。モーターサイクルよりも大きく軽車両よりは少し小さなよくわ からない乗り物を乗っている人も見かけた。交通に関して、緩いように感じたし、見ていて とても興味を持った。

3 つ目に、今後、本当の中国を伝えていきたいし、メディアから流れる情報を鵜呑みにしないで、自分で調べること、現地へ見に行くこと、今回関わったことで繋がったコミュニテ

ィを大切にして聞いてみたいと考えている。また、日本のサービス業について、逆輸入の商品、物流や IT・電子通貨について中国から追って追われる新しい環境を構築していくことが必要である。隣国同士、交流を続け、支えあい、共に経済発展を目指していきたい。また、中国の大学生への勉学への励む姿勢や、日本人との大学生との交流により、多くの魅力な点、尊敬すべき点があり、自己成長のために、今後も学び続けて挑戦しなければいけないと強く影響を受けた。私は、訪中中から訪中後、中国が好きになったし、興味を持った。中国語を話してコミュニケーションをとり、中国人と関わりもっと知りたいと思った。そして、日本の当たり前の暮らしは当たり前でないと気づき、もっと日本についても好きになった。学生時代のうちに訪中の経験ができ、このような学びの場に大変感謝している。

◆私は、6月1日から7日までの6泊7日の日程で中華人民共和国の4都市を訪問した。今回の中国訪問では、紫禁城や頤和園、莫高窟、兵馬俑など中国の歴史における、欠くことのできない重要な遺跡を数多く見学することができた。世界史好きの自分にとっては興奮の連続であり、とても充実した時間となった。もっとも印象に残っているのは、国際関係学院の学生と共に訪れた頤和園である。園内にある湖は、対岸が霞んで見えるほどの大きさであり、湖を造成する時に掘り出された土砂で作られたという山はとても高く、日本では考えられないほど圧倒的なものであった。日本の25倍の国土を持ち、10倍の人口を誇る中国を体現している様であり、「チャイナ・パワー」を感じた瞬間であった。頤和園と言えば、高等学校の世界史の授業で、日清戦争敗北の原因の一つであると習った。時の権力者であった西太后が、アロー戦争によって破壊された同園再建のために、当時「東洋ー」と謳われた北洋艦隊の予算を流用し、艦艇の整備や改修、訓練などに悪影響をもたらしたからだ。上記の話に少し疑問を持っていたが、訪れてみて合点がいった。

多数の遺跡以上に、今回の訪中でもっとも心に残ったのは、国際関係学院や西安外国語大学での現地大学生との交流である。渡航前には、全国人民代表大会の様子や抗日戦争勝利 70 周年の軍事パレード、THAAD の配備に対抗した韓国製品不買運動などメディアから伝わるイメージや日本で「爆買い」を行う中国人団体旅行客などを見て、中国に対して「画一的」な印象を強く抱いていた。しかし、現地の大学生らと交流したことによって、多様性にあふれた側面も持っていることを知った。この多様性は、人民政府が進める一大プロジェクトである「一帯一路」に対しても同様であった。ある学生は、素晴らしい政策であり、中国はもちろん、一帯一路に参画する国々、そして日本にとっても利益をもたらすものであると話してくれた。一方で、別の学生は、一帯一路について映画「アベンジャーズ」と同じくらい達成不可能なものだと言っていた。この発言は、中国は党国体制の国家であり、共産党の指導が絶対であると聞いてきた自分にとっては、とても衝撃的なものであった。

また、これまで大学の授業で学んできた事柄の裏付けを多く得ることができた。一つ目は「档案」という中国独特の制度である。本人は一切見ることができないが、その本人に関する個人情報が記載されており、入試や就職、昇進などに大きな影響を与えるものだ。当初、

私はこの「档案」制度に対してとても異質なものであると考えていたが、学生たちから話を聞くうちに、高校入試や大学入試で志望校に提出した「調査書」の拡大版の様なものであることを知った。二つ目は、単位社会についてである。中国の人々は、必ず何かしらの「単位」に属し、その単位内において多くの場合、生活を完結させている。共産党は単位を監督することによって、国民の末端まで支配をいきわたらせることができた。改革開放とそれによる経済発展の影響で単位に属さない人も増えていると聞くが、中国の大学では、寮生活が原則とされ、大きな病院や購買部なども設置されており、学内でほとんどの事柄を済ますことができ、単位社会の一端を垣間見たように思う。三つ目は、西安郊外をバスで走っている時に、「中国兵器」などと書かれた大型看板と他の工場とは違う「軍需工場」とおぼしき工場群を見た。確証はないが、ベトナム戦争の頃に、中国が将来の戦争に備えて軍需工場の内陸化を進める「三線建設」を毛沢東の指示のもと行った名残ではないかと思いを巡らせた。

今回の訪中を通して、改めて抗日戦争期に日本が与えた甚大な被害を克服し、大躍進や文 革などの紆余曲折を経ながらも、世界第2位の経済大国にまで上り詰めた中国人民の活力・ アビリティに感服すると共に、改革開放以来の共産党政権の指導力の強大さに改めて驚き、 畏敬の念を抱いた。

最後に、日中平和友好条 40 周年、改革開放 40 周年の節目の年に、中国を訪問することができ、さらに、現地の大学生や中日友好協会の方々など、中国に関わる様々な人々に出会えたことをとても嬉しく、光栄に思う。ありがとうございました。

◆日中国交正常化から 45 年、日中平和友好条約締結から 40 年、李克強首相や王毅外相が 来日し、日中関係が改善されてきているこの時期に訪中し、現地の大学生たちと交流したこ とはかけがえのない経験であった。日本では2010年の尖閣諸島漁船衝突問題以降中国の姿 が頻繁に報道され、メディアを通してデモや人々の発言を見て中国は民度の低い国だなと 感じていた。それからも、自分の目で中国を見る機会や中国人と触れ合う機会はなく、メデ ィアだけにより形成されたイメージで中国を見ていた。しかし、この度実際に現地の中国人 と接してみる事によって、訪中前と訪中後では中国人に対するイメージや考え方が大きく 変わり、彼らと今後どのように付き合っていくべきかということも深く考えさせられた。 現地の大学生交流では、自分と同じぐらいの年齢の学生が何をし、何を考え生きているのか を知ることができた。日本の大学生の多くは生産性のないサークルでお酒を飲み、馬鹿をし ているだけだが、中国の大学生は全く違った。彼らは自分が将来何をしたいかという目標を しっかり持ち、それに向かって日々勉強に励んでいた。例えば、私のパートナーは将来日本 で職を持つという目標を掲げ、一年の勉強だけで日本語を難なく話せるようになっていて、 心から感心し尊敬した。彼らと比べると普段の私の生活はいかに無駄な時間が多いかと反 省した。パートナーと互いの国のイメージについて話した時、彼は「日本の政治は本当に好 きではないし、メディアが報道する日本も好きではない。しかし、それが偏向報道だという ことは理解しているから、自分の目や肌で確かめるまで日本人に対して悪いイメージを持 たないようにしている」と語った。メディアから得られる情報は偏っていると割り切り、自分でその国を感じるまで下手にイメージを作らないという姿勢に感心するとともに、メディアから得られる情報だけで中国の悪いイメージを作っていた私との精神年齢の差に驚いた。この交流を通して中国人(少なくとも大学生は)はかなりの努力家であり、寛大な心を持ち、大人であるな、と感じた。

2011年に日本のGDPを抜き、世界二位の経済大国となった中国が隣国にあるというのは日本にとって大きな意味があると考えている。訪中までは中国はまだ発展中であり、インフラも整っておらず、町自体のレベルが低いと思っていたが、実際は全く違った。キャッシュレス社会が進み、地下鉄もバスもかなり整備されていた。中国は GDP で日本を追い抜いても尚、日本から技術を学び、どんどん自分の物にしようという貪欲さがある。一方で日本は、自分が先進国であると騙るだけで、他国から学ぼうという姿勢が無く、レベルがどんどん落ちていっていることに気付いてすらいない。隣国に凄まじい発展を遂げている"中国"という国があるのだから、そこから学ぼうという姿勢に改めなければいけない。安倍首相が「日中は競争から協調の時代に入った」という通り、"互いに"学びながら経済を発展させていかなければいけないと強く感じた。この度の訪中を通して、努力家の中国人の姿勢が国全体の経済発展に繋がっているということを学べ、また私たちは中国から学べることは沢山あると強く感じた。

◆本年6月1日から同月7日まで、私は日中友好大学生訪中団第1陣の一員として中国に滞在しました。そして北京・敦煌・西安・上海と4都市を巡る密度の濃い旅程の中で、非常に貴重な経験を数多くさせていただきました。この度の訪中を通じて最も強く感じたことを一言で表すとすれば、それは「百聞は一見に如かず」ということだと思います。

私が訪中団への参加を希望したのは、中国の歴史や文学に対して高校時代から一貫して 関心を寄せてきたからです。しかし、書籍や論文から得られる情報というものはどうしても 限定的であり、そのため自分が学んでいるものを実際に目で見て体感したいという思いを 強く持ち続けてきました。そうした背景もあって、中国各地の重要な史跡を訪れたこの度の 訪中は、私の知的好奇心を大きく刺激するものとなりました。例えば、私は高校の卒業研究 で西太后を扱ったため、西太后が再建に関わった頤和園を訪れることが出来たのは私にと って大変喜ばしいことでした。規模の大きさや建築物の美しさに感嘆ことは言うまでもあ りませんが、その細部にまで西太后の権力欲を意図した仕掛けが用意されていることをガ イドの方の解説を通じて知り、非常に驚きました。敦煌では莫高窟の仏像が、インドのガン ダーラ美術や西域の風俗の影響を受けていることや、壁画には漢民族に限らず、様々な民族 の姿が描かれていることを実際に見て、シルクロードの中心都市として繁栄した敦煌の国 際性を感じました。西安では始皇帝陵を見学し、兵馬俑の数の多さとその一つ一つの完成度 に圧倒され、古代中国の技術水準の高さに感心しました。また、私は大学で中国文学のゼミ に所属しており、上海を舞台にした作品を読むことも多いのですが、伝統と近代の両方が根 付く上海の街を実際に体感することが出来たのは貴重な経験となりました。このように、中国に実際に赴き、自分の目で見て耳で聞き、そして肌で感じることで、机上の学習だけでは到底得られないような知識を得たり、感覚を養ったりすることが出来ました。日本では中国に関する書籍が多く出版され、メディア等を通じて伝聞で得られる情報も多いですが、それらの中には不正確なものも少なくないばかりか、それらだけを頼りにして中国の実態を掴むことは困難であるように思います。この度の訪中団を一つの契機として、今後も中国の様々な地域に実際に足を踏み入れ、それぞれの地域の歴史や文化を体感し、中国の生の姿に対する理解を深めたいと強く考えるようになりました。

中国の人々との交流についても似たようなことが言えるのではないかと思います。私は今まで自分と同年代の中国人学生と接したことがさほど多くなく、北京での交流会の前には不安もありました。しかし、いざパートナーとのディスカッションが始まると、会話も大いに弾み、最終的には強い友情関係を築くことが出来ました。また、私は北京では司会、西安では発表担当を務めましたが、時間や言語といった様々な制約はありながらも、パートナーと一生懸命打ち合わせを行い、そして話す内容を決めていく過程で、パートナーとの信頼関係も醸成され、交流会終了時には非常に強い達成感を得ることが出来ました。異文化との接触には不安がつきものです。しかし実際に中国を訪れ、現地の同世代の人々との交流に成功したこの度の経験は、自分にとって大きな自信となりました。今後も可能な限り中国の人々との交流を深め、相互に学び合うことで、日中の友好に微力ながら貢献出来ればと思っています。

最後になりますが、日本大学生訪中団という贅沢な学びの機会を提供して下さった中国 政府や中国日本友好協会の方々、そして訪中の間私たちを親身にサポートして下さった日 本中国友好協会の方々をはじめ、全ての方々に心より感謝申し上げます。本当に有難うござ いました。日中両国の架け橋のような存在になれるよう、今後も日々精進して参る所存です。

◆私が以前考えていた中国と日本の関係は、距離が近く、他国と比べると遥か昔から多くの交流があるわりに、あまり仲が良くないという印象でした。私は、今までメディアで報道されている中国しか知らず、中国に対して正直あまり良いイメージを持っていませんでした。しかし、大学に入学して、中国人の先生の授業を受講したり、中国からの留学生と出会ったりして中国の印象が少しずつ良い方向に変わりました。そして、実際に中国に渡り、現地を自分の目で直接見てみることで新たに気づくことがあるのではないかと思い、今回の大学生訪中団の参加を決意しました。実際に訪れてみて、たくさんの良い思い出を作ることができたと共に、本当の中国の姿を見ることができ、とても勉強になりました。

上海では、故宮博物院や頤和園などを見学し、日本とはまた違う文化に触れることができました。国際関係学院の学生との交流はとても楽しかったです。例えば、大学生のアルバイト事情や恋愛観など中国と日本で違いが見られるものもあれば、流行っているものや人など共通点があることを知ることもできてとても嬉しくなりました。中国の学生さんは皆さん

勉強熱心で日本語がお上手で、とても刺激を受けました。

1週間の滞在を通して1番楽しかったのが敦煌の鳴沙山の訪問です。景色がとても綺麗でしたし、班のメンバーと一緒に楽しんで登ることができ、より班のメンバーの仲が深まったような気がしました。日本人同士ですが、全国各地から集まったメンバーと交流することができ、高い学力を持っていたり、豊富な人生経験を積んでいたり、自分とは違う価値観を持っていたりする方々と仲良くなり、会話することができてとても嬉しかったですし、刺激を受け自分の今後を深く考えるきっかけにもなりました。世界遺産である莫高窟は圧巻でした。洞窟に足を踏み入れた瞬間、雰囲気がガラッと変わり、タイムスリップしたかのように思えました。壮大な建築でありながら、装飾が繊細でとても美しかったです。

西安での西安外国語大学の学生との交流では、1 対 1 で対話することができたのでたくさん話すことができてよかったです。短い時間でしたが、いくつかのトピックについて深く語り合うことができ、日中の相互理解をお互いに深めることができたと思います。自由時間では、鐘楼と大雁塔を訪れました。鐘楼では、少数民族の方々が市を開いていらっしゃりとても賑やかで、中国の多様性を肌で感じることができました。大雁塔はホテルからとても遠かったのですが、ライトアップされていてとても綺麗で、見に行ってよかったと思いました。海外の地下鉄やバスを利用することは初めてだったのでとても良い経験になりました。中国の交通機関はとても安くて便利で羨ましく思いました。

北京で 1 番心に残っているのは雑技の鑑賞です。同じ人間とは思えないパフォーマンスに始終圧倒されました。田子坊はたくさんのお店が並んでいて、にぎやかでとても楽しかったです。

中国に滞在した1週間を振り返り、本当に訪れて良かったと強く思います。メディアでは爆買いやパクリなどあまり良くない点が多く報道されがちであるように感じ、また、悪いところばかりが目に留まりやすいようにも思えますが、実際に訪れてみると日本より良い所もたくさんありました。今まで中国人というと気が強そうという漠然としたイメージがありましたが、現地の方々の温かさ、優しさに触れ、印象が大きく変化しました。今後、日中両国がお互いを支え合いながら共に発展していってほしいです。 これから日中の友好関係を継続させるために、少しでも貢献できるよう頑張りたいと思います。この機会でお会いした中国の学生さん、日本の学生に負けないよう、私も自分の学力を高め、知識を広げていけるように努力したいと思います。

◆私は今回、日中友好大学生訪中団に参加させていただいて初めて中国を訪れ、様々なものを得ることができました。以下、今回の訪中によって変わったこと、得たもの等について述べていきたいと思います。

まず、訪中前と訪中後の中国に対する気持ちの変化について述べます。私は訪中前、中国 に対してメディアによってつくられたイメージを持っていました。具体的には、中国人は我 が強く、マナーが悪い、製品の質が悪いなどの偏見を持ってしまっていました。しかし、実 際に中国を訪れ、中国人や中国の大学生と交流し、中国のホテルや空港、観光案内などのサービスを利用していくうちに、上記のイメージは中国のごく一部の人、物をメディアによって強調されたものであり、中国の本当の姿ではないということを感じました。私自身が交流した多くの中国人は非常にマナーがよく勉強熱心であり、周りに気配りができる人ばかりでした。また、ホテルや空港では日本ほどの堅苦しさはありませんでしたが、だからと言ってサービスの質が悪いわけではなく非常に良いサービスを受けることができました。

また、上記のように実際に中国を訪れることでメディアの報道が正確ではないと分かった経験から、何事も自分で実際に経験してみないと本当のことはわからないということを学ぶこともできました。そのため、テレビや新聞などのメディアの情報や、インターネットや本などから得た情報のみでその事を分かった気になってはいけないと感じました。これからは、情報をメディアやインターネットから得て満足するのではなく、積極的に行動することで実際にその場所に行ったりその事をやってみたりする癖をつけ、物事の実態をとらえられるようにしていきます。

次に、この7日間が自分の人生にとってどのような影響があったかについて述べます。私は今回の訪中団に参加するまでは、日本以外の国に特に興味を持っていませんでしたし、現在の学校などでの知り合い以外の知らない人と関わりたいとは思っていませんでした。しかし、今回訪中団に参加して中国に対する正しい理解を深めていく中で、世界中の他の国のことについても知りたいと考えるようになりました。また、現地の中国人大学生との交流や、一緒に訪中団に参加した他の日本人大学生との交流をしていく中で、世の中には様々な自分とは違う性格、価値観を持った人がいることを実感することができました。さらに、そのような様々な人たちと交流することでお互いの理解を深めることがお互いにとっての刺激となり、いい影響をもたらすということも感じました。以上のことから、今まで自分が所属している集団の人以外とは積極的に関わろうとせず閉鎖的でしたが、考え方が変わり自分とは違う集団にいる人や、外国の人と交流したいと考えるようになりました。

他には、今回の訪中団で交流した人の姿を見て、学習意欲が足りないということを痛感し、もっと積極的に様々な分野の学習をしなければならないと思いました。今回交流した国際関係学院の大学生は日本人と変わらないくらい日本語が非常に流暢であるとともに、日本の文化や他国の文化についての理解も深く、普段から様々なことに興味を持ち自ら学習している結果ではないかと思いました。さらに、他の日本人大学生を見ても、中国に対して強い興味を持ちその文化や歴史について詳しく理解しているのはもちろんのこと、他国の文化や歴史についても理解が深く、また英語や他の言語の学習が進んでいる学生が非常に多かったです。それに対して、自分はあまり他国の歴史や文化、言語について深く学習しようとはしておらず、また言語の学習についてもおろそかにしており、自分の学習姿勢がいかに悪いかを改めて認識することができました。これからは、積極的に中国を含む他国の歴史や文化について学習をすることで、他国についての理解を深めるとともに、少なくとも英語については流暢に話せるように学習を進めていきます。さらに、これらの学習を進めていくと同時に、様々な国の人と交流する機会があれば積極的に参加し、世界中の国の人々との相互

◆今回の訪中団参加は、私が経験してきた海外での学習のなかでも最も印象深く、学び取れるものが多かった7日間であった。中国に行く前と行った後と自分を比較しながら、自分がこの訪中団で何を得たのかを考えていこうと思う。

まず、第一に中国での生活において最も問題意識を痛感したのは、「言語」である。第2外国語として、私は中国語を専攻してはいるものの、中国語を話すことに不慣れな自分が本当に嫌になるほど、この7日間を通して言語の大切さを思い知らされた。地元の人々が話す中国語、交流した大学先の先生方や学生たちが話す中国語、街中でのアナウンスの中国語などに囲まれて、最近では日本も中国語表記や使用が多くなっているにもかかわらず理解が追い付かなかった。自分はまだまだ中国語に対して勉強しなければならないと改めてやる気が満ち溢れた。自分の語学力の低さを思い知らされた分、「今私は日本ではなく、中国にいるのだから!」と奮起して、スケジュール的に外へ出ることができる時間があるときは、実際にカタコトだったと思うが、中国語で会話する経験を少しでもしようと、お店の人やテーブルで相席になった人などに自分から積極的に話しかけてみた。同じ班には、中国語が流暢なメンバーもいて、あこがれると同時に心底悔しかった。しかし、今はできなくても、できるようにするための第一歩を現地の中国で踏み出せたこと、この悔しさを糧にしてこれからも精進して語学も含め、中国について勉強していこうと強く思う。

第二に毎日目まぐるしく変わっていた、それぞれの街並みの違いである。私は、中国に行 くのは今回が初めてで、ネットで見ることのできる観光地の写真や、ガイドブックにあるよ うな前知識を入れていったつもりであったが、実際に目で見るのとでは、迫力や体感が全く 違った。飛行機での移動が1週間で5回と、移動が多かった7日間であるが、飛行機の中か ら見るその都市は、それぞれに違っていて、おり立つ前からワクワクさせられた。北京、敦 煌、西安、上海、これら4都市は上から見るとすべて線がまっすぐ引かれたような条坊の形 であり、敦煌だけは砂漠地域だったので、ほぼ緑がない茶色の地面が広がっていた。中国の 学生にそのことを確認すると、やはり昔から、「天は円く地が四角」という思想が受け継が れているからなのだという。また、中国では実際の街並みは、どこもイルミネーションが数 多くあったり、それぞれの都市で特徴あるもの、観光資源になっているものを街の至る所に 設置していたりと、街の風景だけでも観光要素が満載だった。特に印象に残っているのは、 敦煌の天女たちの像や絵画の多さ、西安の提灯の多さ、北京の道路にかかる虹のアーチの多 さである。また、監視カメラも多く設置されており、街中や商業施設はもちろん、国際関係 学院の教室にもいくつか設置されていた。これほどまでに監視環境が整備されており、犯罪 の数も昔よりぐんと減少しているのだと、バスガイドの方もおっしゃっていた。また、文化 の面でもなぜか乾杯はいつもスプラウトとコーラであったり、WeChat が主流でバスやタク シーの予約、買い物の支払いまですべてこのアプリで済んだりといった違いを体感できた。 実際にこういった日本との環境の違いを自分の肌で感じることができたことは、私の「思い

込み」という考えを大きく変えてくれた。

思い返すと、新しい発見がどんどんと溢れてくるほど、今回の訪中で中国の魅力や、今問題となっていること、自分自身におけるこれからの課題を実感させられた7日間だった。まだまだ、私の知らないことばかりがあふれるこの世界で、今回の経験を自分のステップアップに繋げられるように、学び続けていきたい。

◆まず初めに、今回北京、敦煌、西安、上海の4都市に行くことができ本当に光栄に思います。日中友好協会の皆さんをはじめ、中国で私たちの訪中を歓迎してくださった方々、その他たくさんの携わって下さった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。今回の訪中を終えて、私は中国の良さをたくさん発見し、また自分の中で様々な意識変化があったように感じています。この作文で、どのような意識変化があったのか、そして今後どのように自分の生活を変えていくべきだと感じたのか書こうと思います。

まず中国に着いて、大きなビルが立ち並ぶ中国の街並みに大変驚きました。設計が大胆で贅沢な造りになっているように感じました。故宮博物院では中国らしさを感じさせる華やかで、ところどころ繊細に彩られているところに日本とは違う文化を感じました。また、国際関係学院、西安外国語大学での大学生との交流では異文化を実体感しました。私が始終感じていたことは語学力の違いです。私は去年の四月から中国語を第二言語として学び始め、今年の9月から中国に留学する予定です。すでに一年以上学んでいるにも関わらず、典型的な短文しか話すことができませんでした。そのことがとても悔しかったです。一方、両大学の学生は私たちとコミュニケーションできる日本語力を持っていました。同じ学年で言語を学んでいるのにこのような差が出るのはショックでしたが、これは日本の学生と中国の学生との間の、勉強に対する意識の違いだと思いました。アルバイトをするべきかという話題でディスカッションをしたときも同じような違いを感じました。私は学生時代に勉学だけでなく様々な社会経験を積むことは大切だと思います。しかし、中国で私が出会った学生のように100パーセントの力を注いで専門分野をものにしようという意識は私たちに必要なことだと思います。私もこれから中国語を継続して学ぶにあたって、8割できたら良いと中途半端な勉強を見直し、もっと意欲的に学ぼうと思います。

3日、4日と日がたち、たくさんの観光地を訪れる中で面白く感じたことは、都市によって全く雰囲気が違って、それぞれの都市が全く異なる歴史を持っていることです。同じ国内でも中国と日本の国土面積の違いを改めて実感しました。それは中国ならではの面白い特徴だと感じました。

最後に、今回の訪中団で1週間共に過ごした15人のメンバーとパフォーマンスで絆を深め、助け合い、お互い本音で意見を交わすことができたことを本当にうれしく思います。訪中団のメンバーは国際系や中国に関心を持っている人が多く、自分が悩んでいることを相談できる人や、自分の視野がとても狭いものだと気づかせてくれた人がいました。今後の私の課題として、もっとたくさんの方向に関心を向け、様々な観点から物事を考えられるようにな

りたいと思いました。また、本当に充実し、たくさんの体験をすることができたこの一週間 の出来事をたくさんの人に広めたいと思っています。今回の訪中を通して、マスメディアの 情報にとらわれず、自分で実際に感じたことを信じる大切さに改めて気づきました。私たち にこのような素晴らしい機械を与えて下さった、日中友好協会の皆さんを初め、たくさんの 方々、本当にありがとうございました。

◆マスメディアの情報による固定観念などは信じずに実際に自分の目で見て、感じたことのみを信じようと思っていた私でしたが、実際に中国を訪れたことのなかった私には、中国に対して勝手にマイナスな印象を抱いていました。

訪中前の私の中国に対する印象は、決していいものではありませんでした。日中間の歴史の観点から見ても、現在の状況から見ても、いいことばかりではありません。私は中国ときくと、大きい国で、地域によって貧富の差が激しくて、空気があまりよくないといったような漠然としたマイナスイメージを持っていました。

しかし今回の訪中は、そのような漠然としたイメージを払拭し自分の中で新たな中国に対するイメージを確立し、中国のプラスの面をたくさん知ることのできたいい機会になりました。実際に中国に足を踏み入れてみて、予想以上に現代化が進み、開発中ではありながらも高層ビルが立ち並んでいる姿を見て驚き、何より現地の人の優しさにたくさん触れることができました。

実際に現地の大学生と交流をしてみて感じたことは、生活スタイルは異なっても、中国でも日本でも大学生として同じような感性を持っているということです。幼いころからの風習や自国の慣習のためにやはり考え方は異なるところも多いです。学生の恋愛観や大学生活の過ごし方、アルバイトの有無など、日本の学生とは異なる点がたくさんありディスカッションの時間はとても興味深いものでした。しかし綺麗な景色を見て綺麗だと感じたり、楽しいことがあると笑いあったり、共通の話題で盛り上がったりしたことは、私が普段日本の大学で過ごしているときと変わりませんでした。特に私は中国の俳優が好きで、同じ班の中国の子にその話をして盛り上がったことが印象に残っています。

そして中国の方は優しい心を持った方がたくさんいると感じました。自由時間に実際に 友人と街に出て買い物をしたのですが、言語の通じない私たちにジェスチャーで頑張って 伝えようとしてくれました。空港では列に並んでいた中国の方が私たちの名札をのぞき込 んで、日本人だとわかると知っている日本語で話しかけてくれました。鳴沙山では素敵な写 真を撮ろうと中国の方が私たち以上にこだわって写真撮影をしてくれました。初めはコミ ュニケーションの距離の近さに困惑もしましたが、次第に人の温かさとして感じることが できました。

私が今回訪中団として参加して感じたことは、自分で実際に訪れて肌で感じ、目で見ないと分からないことはたくさんあるということです。実際に私が友人に「一週間中国に行ってくる」と伝えると、どうしたのかと心配する声がたくさんありました。それはおそらく、中

国に対して訪中前の私と同様に漠然としたマイナスイメージを抱いている人が多いからな のではないでしょうか。

国同士の関係や歴史がどうであるという点を抜きにして、個人として隣国を考え、どのように接していくべきかを考えることが大切なのだと私は考えます。今回の訪中で触れた中国人の優しさや日本人に対する温かいイメージを、私自身も今後は中国に対して持っていこうと思っています。

また今回の訪中は私にとってかけがえのない仲間に出会わせてくれた最高の機会になりました。国際関係学院や西安外国語大学でできた中国人の友人、そしてなにより一週間ほとんどの時間を共にした班のメンバーに出会えたことは、私の人生の大切な宝物になりました。自分が考えもしなかった発想や、自分よりもはるかに多い知識を持った人と時間を共にして刺激を受け、もっと自ら学ぶという姿勢で日々を過ごしていこうと考え直しました。個人的な人生観を考えるきっかけとなった点においても、今回の訪中は最高の経験になりました。

今回の訪中にあたり私たち団員をサポートしてくださった日中友好協会の皆様、安全な 旅のサポートをしてくださったガイドの皆様、訪中で出会ったすべての人に感謝の気持ち を伝えさせていただきます。本当にありがとうございました。

◆私は直接中国の方々と触れ合う中で感じたことがたくさんありました。まずは中国の 人々の人柄です。中国の方々は本当に誰に対してもフレンドリーでした。ホテルでたまたま 一緒のエレベーターに乗っていた時、空港で並ぶ列が同じだった時、デパートで出会ったお 客さんなど、全く面識もない私たち外国人にも本当に暖かく話しかけて下さいました。この 中国の温かい雰囲気には本当に驚かされました。日本では、外国人はやはり外国人として見 ている傾向があるのではないかと思います。日本人同士であっても、知らない人同士で話す ことはほとんどありません。それだけ、日本は個々で生活している社会になってきているの ではないかと寂しさを感じました。交流した中国の学生さんも、知らない人でも何気なく話 すことは日常であると言っていました。その話を聞いて、周りの人々をよく見ていると、デ パートの中でも従業員さんとお客さんがとても楽しそうに立ち話をしていたり、店の人同 士が話をしながら仕事をしていたりする姿が見えてきて、中国では人と人がつながりあっ て、関わり合って生活しているような気がしました。現在の日本では、都市部になればなる ほど、隣のマンションに住む人の顔すら知らない、ご近所さんと顔を合わしても挨拶をしな い状況があります。日本でも人と人とのつながりをもっと大切にしていくべきだと考えま した。また、中国の人々の優しさにも触れることができました。お店の場所を聞きたくて英 語で話しかけてみたのですが、英語がうまく伝わらなかったことがありました。しかし、そ の方はそこで私たちをほっておくのではなく、英語ができる人を呼んできて何とか私たち が言っていることを理解しようとしてくれました。困っている人を最後まで見届け、助けて くれる中国の人々の優しさを感じた瞬間でした。さらに、中国の学生さんと触れ合う中で、

こんなにも日本に興味をもってくれていて、日本のことをよく知ってくれていることに驚きました。それに比べて私の中国に関する知識不足を実感しました。私ももっと中国について知りたい、理解したいと思うようになりました。また、中国の学生さんは日本の学生よりもはるかに勉強をされています。同世代の仲間が頑張っている姿を見て、私も大学生の間にもっと勉強しておこうと刺激も受けました。

私は今回の訪中をとおして、実際に自分の目で見てその国のことを判断しようと思うようになりました。自分の勝手なイメージだけでその国を捉えてしまうことは本当に危険です。7日間の滞在で中国に対する新しい一面をたくさん見ることができ、私の中の中国のイメージは塗り替えられました。今では買い物にいって中国産の文字を見ると中国で出会った人、友達、風景など様々な情景が思い浮かびます。世界がつながるとはこういうことなのではないかと考えます。顔が見えない、その国の情景も思い浮かばなければその国といつまでたっても心からつながることはできません。ICT機器が発達して、その場に一緒にいなくても簡単に連絡を取り合える時代となりました。しかし、人と人が直接出会い、語り合うような温かい心からのつながりもこれからの時代は大切にしていかなければならないと考えます。そして、お互いの違う文化を排除するのではなく、お互いの文化に興味をもち、違いを認め合っていくべきです。

この経験を通して私ができることは、家族や友達など身近な人に中国の魅力を伝えていくことだと考えます。自分にできることはほんの小さな一歩にもならないくらい小さいことかもしれません。しかし、一人一人の意識を少しずつ変えていくことができれば、大きな力に変わります。これからも日本と中国の懸け橋となれるよう、中国と身近なところから関わっていきたいです。

◆今回、訪中を終えて思ったことは、まずこの訪中団に参加してよかったということだ。正直、参加する前は多少の不安があった。それは、移動ばかりの厳しいスケジュールの中で、本当に、有意義な時間を過ごせるのか、どれだけ実際の中国を見ることができるのかといったものだ。確かに移動が多く、はスケジュールの多くを占めていた。しかし、中国へ行くのが初めての私にとっては、4つの都市それぞれに発見があり、どの都市も行けてよかったと思う。今回の訪中では様々な発見があったが、その中でも2つが大きな気づきだった。一つ目は、中国人の人柄とその背景にある文化についてだ。私は、これまで中国人とまともに接したことがなかった。それにもかかわらず、一部の観光客の行動やマスコミからの情報で、中国人は気が強く、他人には冷たいものだと思っていた。しかし、今回、多くの中国人と話したり、コミュニケーションをとることでそのイメージは間違いだったことに気付いた。基本、中国人は他人に優しい。道端や駅、お店などで何か質問をすると、全員が、こちらが理解するまで親身になって教えてくれた。特に印象深かったのは、駅の切符売り場で若い男性が他の乗客に運賃をもらっていたことだ。中国の学生に聞くと、よくあることだという。日本人は他人にお金をねだることはまずないだろう。恥ずかしいと思うし、返却が見込

めない相手にお金を貸してはくれないだろうと考えるからだ。事実、日本人は相手に何かするとき、お返しを期待する。それに対して、中国人は見返りを期待しない全くの善意でやっているのだ。日本よりも懐が深い文化なのかもしれない。

また、頤和園を見学した際に国際関係学苑の学生が案内してくれた時、工事中の敷地へ入ってしまい、警備の人から注意を受けるという場面があった。私たち日本人学生はすぐにその場を離れようとしたが、彼女は警備員に通ってもいいかと交渉をしていたのである。私たちは驚いた。そのほかにも、買い物の値切り交渉だったり、意思をはっきりと伝えないといけない場面は多くあった。気が強いというより、相手に自分の考えを伝えるということが尊重されているように感じた。日本人はこれが苦手な人も多く、一場面を見ただけで中国人は気が強いものだと受け取ってしまうかもしれない。しかし、そのような受け取り方が中国人に対する間違ったイメージの造成につながってしまうのだと思う。私からしたら、日本人よりもむしろ中国人の方が裏表がなく、あっさりした親切心があって付き合いやすいように感じた。中国に行くまでは予想もしなかったイメージの変化である。

二つ目の収穫は、言語学習への意欲の高まりだ。日本語専攻の中国人学生の流暢な日本語には、ただただ驚くばかりだった。それとともに、大学で第2外国語として中国語を履修していたにもかかわらず、本当に簡単な文しか話せない自分がとても情けなく感じた。中国人学生から話を聞くと、日々の勉強量が日本の多くの大学生と比べ物にならないほど多く、感心した。ただ、語学に関して驚いたのは中国人相手だけではない。一緒に訪中したほかの日本人学生の英語力、中国語力に対してもだ。同じ日本の学生なのに、語学の得意な学生と大きな差があった。語学の能力があることで様々なコミュニケーションの可能性が開かれたものとなる。その可能性が小さい自分に、少し劣等感を感じた。しかし、今回は語学に対して劣等感を覚えただけではない。自分の下手な英語や中国語でも、中国人とコミュニケーションをとることができた。これは海外への渡航経験がなかった私にとっては初めての経験で、とても大きな喜びであった。

以上の2点が訪中の大きな収穫であったと考えているが、もちろん、得られたものはこれだけではない。一週間の中で、中国人の経済状況、インフラ整備、教育制度、学生の政治意識など、さまざまな気づきがあった。しかし、これらはすべて、大きな中国のたった一部であろう。これからも隣国の実情を知っていく義務が私たちにはあると考える。そのためにも、これからも中国に行く機会を作ろうと思っている。これからは、中国語を勉強し、コミュニケーションが取れるようになってさらに深く中国の文化や人々の考え方を知りたい。そして、今後も長らくは続くだろう大国の成長に少しでもかかわっていきたい。

◆今回訪中団の一員として、中国の様々な面に触れられたことは、私にとってとても大きな 意義があった。それは、中国の可能性の大きさを実感できた、と言うことである。 まず、中国はとてつもなく広い、と言うことを実感した。国内移動すらも、東西南北移動す るのに何千 km も走らないといけない。季候も大地も異なる。1 都市違うだけで何もかも変 わってくるのは、中国だからこそだと思う。実際、4つの大きな都市に訪れたが、ビルが建 ち並ぶ上海と北京を比べてみても街の様子は全然違うし、敦煌は砂漠地帯なので逆に広大 な大地がたくさん見られる。灼熱の日差しや夜8時になっても明るい敦煌や西安、コンクリ ートの照り返しが厳しい上海や北京といった部分を比べてみてもおもしろかった。

加えて、中国には数え切れないくらいの多種多様な文化がある。訪中で強く感じたのは、先 ほど上げた季候の違いや、方言、民族、経済発展などである。私は中国語は全く喋れないの であまり違いは分からなかったのだが、喋れるメンバーは方言が強くて会話できなかった と言う人もいた。中国語(北京語)はマスターするまでかなり時間がかかると聞くが、中国 で働いたり生活したりする場合は方言の勉強にも力を入れないといけないと強く思った。 民族に関しては直接学ぶ機会はなかったが、季候や経済発展の違いがこれだけ大きいと、人 種の違いと言うか、そこに住む人たちの特性も変わってくるのだろうと言うことは想像に 難くない。一つ印象に残っているのが、敦煌の車のスピードである。アジア圏の発展途上国 は交通ルールが悪く、追い越しし放題の国もあるが、敦煌はそんな様子が見られず安全に走 っていたと思う。砂漠地帯のゆったりとした環境が、そのような人々を育てたのではないか と思う。最後に経済に関して、やはり北京や上海は発展していたし、西安は発展してはいて もまだ未開発の部分が見受けられ、敦煌は都市という意味ではまだまだこれからであると 感じた。交通の便利さもまるで違う。西安や上海(恐らく北京も)の地下鉄は転落防止の壁 が設置されていて、日本よりも発達していると思う。物価も確かに敦煌は安く、北京や上海 は高かった。他にもいろいろあるが、こういったことをまとめると、大きな都市やその周り の文化を合わせると、ある意味一つの国と同じくらいの文化があるのではないかと思う。訪 中で見て感じたことだけでもこれだけ分かるのだから、実際は想像もつかないくらいの文 化圏が形成されているのではないか。

さらに、中国は世界一の人口と国土を有する国である。資源も人も十分なほど恵まれているはずだ。中国がもっと経済発展しグローバル化が進んだら、資源や多種多様な人たちは世界を変える力になるのではないかと思う。それこそ無限の可能性が秘められているのではないか。現状では敦煌ですらもまだ未開発な部分があるし、上海や北京の都市も安全性や食事面では不安な面もある。国としてまとまるには広すぎるのかもしれない。しかし、中国は今急成長中であり、世界各国が中国に進出しいろいろなノウハウが導入されれば、それらが達成される日も近いのかもしれない。私が訪中で訪れて関わった人は、しっかりと勉強して能力の高い人が多かった。学生は勉強や授業を大事にすると言うことも交流で分かり、これからも学力の高い生徒がたくさん出てくるだろう。彼らがこれからの中国を担っていくと思うと、私としてもこれからが楽しみである。

日本にいて、報道では中国の成長や資源の豊富さが流れていてある程度は知っていたつもりだった。しかし、実際に中国の様々な地に訪れ現地の人や文化に触れることで、その奥深さや可能性の大きさを体感できた。大学生との交流や、友好協会の方と話ができ、この訪中団ならではのプログラムも大変有意義である。特に、今回のプログラムは初めて4都市を巡るもので、敦煌に訪れたことも初めてだったと聞く。協会の人も敦煌が初めての人が多かっ

たのは意外であった。そんな特別なプログラムに選ばれたことは本当に素晴らしいく、ありがたいことである。今回のプログラムに参加できて、心から良かったと思う。この7日間を通してそして出会ったたくさんの人たちにも心から感謝している。7日間は長いようで短かったが、学んだことはとてつもなく大きい。ここで得た経験、学んだことを今後も大事に、そして将来に活かしていきたい。

◆今回訪中団として中国を訪中し感じたこと、それはメディアで報道されている中国とは 大きく異なることである。以前読んだ本には「今の若者はそうでもないが、年を取っている 人はまだまだ反日もいて、田舎の方には日本人は行かない方がいい」とも書かれていた。 しかし、夜市の人々やタクシーの方を初め、私が日本人だと知っても親切に良くしてくれる 方々ばかりであった。私は少し中国語を話すことができて、彼らと会話をしたが、「日本の どこから来たの?東京から中国まではどのくらい時間かかるの?タクシーの初乗りはいく らかかるの?」など日本についての事も聞いてもらい、日本のことが嫌いな中国人が多いと 報道、本に書かれていることだけを鵜呑みにするのは間違っていると感じた。

確かに日本のことを嫌っている方もいるかもしれないが、それは一部の人だけであると 今回の訪中を通じて身を以て感じた。

さらに、現地の大学に訪問し、交流した際には、日本の事が好きで日本に行ったことがある、1年滞在し研修したことがある、また日本旅行をする予定がある。といった現地学生との交流もできて、日本のことが好きな中国人も多くいることを知った。

自分自身が現地の人と話をし、交流して感じたことは、日本人と交流することと変わりない、日本が嫌いということを微塵も感じることなく交流することができ、むしろ日本人より日本に対して好意を抱いているとまで感じることができた。この感覚をまずは自分のまわりから広めていこうと考えた。本当の中国を知らず、ただメディアに踊らされて、悪いニュースばかり見て、ただ中国が嫌い、これだから中国人は、と一括りに「中国」というワードで中国に偏見を持たないでほしい。本当の中国を自分の身を以て理解してほしい、と考えるようになった。

前々から日本国内で中国人留学生と一緒に交流し、理解を深めるという活動はしていたが、今後は一個人としての自分だけでなく、友人など身近な人相手ではなく、一般の人や企業相手に本当の中国はこのような国ではない、もっと日本に好意を持って親密に接してくれる人がたくさんいる。商売だけの関係でなく、人と人との関わりを持ってもっと友好的になってもいいだろうと訴えかけたい。

この目的を達成することは自分の力だけでできるような簡単なことではないだろう、だが 今後日中友好のために自分ができることが少しでもあれば行っていきたい。ビジネスとし て中国と関わるのではなく、人と人で中国と関わっていきたいと考えている。

将来的に、訪日中国人観光客に対するサービスを主とした会社を作れたらとも考えている。 また、日中友好協会で中国と関わることが出来たら本意である 結果として、今回の訪中を通して、更に中国が好きになり、もっと中国と関わりを持っていきたいと考えるようになった。今回の貴重な体験は今後の自分自身の人生を変えてしまうくらい、本当に刺激的で意義のあるものであった。

◆上智大学で出会う中国人留学生には勤勉な方が多く、彼らの勉学に対する姿勢のルーツを知りたいと思ったことが、今回、私が訪中したいと思ったきっかけの一つだ。実際、中国で国際関係学院大学や西安外国語大学の学生と交流してみると、彼女らの高校時代の生活習慣が関係していることが分かった。私が話を聞いた学生は、大学の入学試験に合格をするために月一度しか休日を作らず、それ以外はずっと勉強に励む毎日だったと言っていた。そのような高校時代の勉強量と努力が根底にあるため、大学の課題も多いとは感じながらも、部活や趣味の時間と両立させて、過ごすことができているのだ。この話を聞いた私は彼女たちの勤勉さに驚かされ、それと同時に己の勉学に対する姿勢を恥じ、同年代として身が引き締まる思いだった。一方で、モラトリアム期に、一心不乱にただ一つのことに向き合い、己を高め、自身の限界に挑戦する経験を得ることができた彼女たちに、一種の羨望の念を抱いた。そのような経験は、比較的時間のある今しかできないことだ。私は自己の限界に挑戦するような、何か一つの物事に熱心に向き合ったことはあっただろうか。それを探し、見つけ、取り組むことができたその時、飛躍的な成長を遂げ、自分の魅力を最大限に活かして社会に貢献できる人材となれるのだろう。私も、自由に学べる学生の間に自分が何をすべきか、中国の学生たちから学んだことを忘れずに過ごしていきたいと思う。

訪中を希望するきっかけの二つ目は、隣国であるにもかかわらず、なぜか漠然と、中国に対して良くないイメージを持っていることに気がついたからだ。私が小学生のころ、尖閣諸島問題について度々報道されていた。外国人とは滅多に出会わない地方で育った私にとって、海外を知る手段はメディアの情報や本の知識のみであった。今思えば、あれらは一部の過激な見解だったり日本人のもつイメージに合わせた偏った情報だったのだ。訪中して、それを痛感させられた。北京での中日友好協会主催の歓迎夕食会で振る舞われた、テーブルに乗りきらないほどたくさんの料理に、中国の熱烈なおもてなしの文化の一片を垣間見ることができた。歓迎の言葉をいただくのとは、また違った良さがあり、心がじんわりと温かくなった。加えて、そのようなおいしい料理の数々を味わいながら、同年代である訪中団の学生たちと、訪問中に楽しみにしていることや各々の参加動機などを話した。同じ日本人でも中国に対するイメージや価値観も違うことも知ることができ、さまざまな大学の参加者とも友好を深めることができて、とても有意義なものとなった。

北京・敦煌・西安・上海の四都市では、紫禁城や頤和園、兵馬俑など世界遺産を訪れ、自らの知見を広めることができた。社会の授業で習った場所ではあっても、やはり百聞は一見に如かず。特に、敦煌の莫高窟では、厳しい自然にも淘汰されず、知恵と信仰心で時代を切り開いていった人々に思いを馳せ、鳴沙山・月牙泉では広大な砂山に圧倒され、言葉を失うほどの感動を味わうことができた。どちらも今回の訪中の良い思い出となった。それらを通し

て感じたことは、人は個としては脆く、非力な生きものだが、個が集団を成して各々の力を合わせれば、数百年を経た現代にも残るような人工物を作り出せたり、想像を絶するようなことも成しえるのだということだ。これは、現代に生きる私たちにも同じように言える。先日、日中外相の相互往来が九年ぶりに実現した。日中両国は今、互いに協力できるパートナーとして関係を深めていこうとしているところである。一見すると、私たちは政府や高度な政治的問題を前にして、一国民としては無力な存在だろう。しかし、そもそも政府を成すものは、一個人である私たちの総意のはずだ。日本が中国との真の良好な関係を築いていくことができるのは、私たちの個々のもつ友好的な繋がりによってのみだ。草の根のような小さな繋がりであっても、それらが膨大な数に増えていけば、両国の数千年の長い結びつきはより強固なものとなっていくと確信している。よって私は、この訪中で得た中国人・日本人の友人との結びつきを決して途切れさせず、そして先入観を打ち壊すような一週間の経験を家族や友人、多くの人に伝えていくことで、中国に対する先入観や偏見を少しでも無くしていきたい。

最後になりましたが、たくさんの人に支えられて、このような素晴らしい経験ができました。 本当にありがとうございました。中国を大好きになって帰って来れてよかった。谢谢大家!

◆「まさか自分が砂漠に来るなんて」。敦煌の広大で美しい景色を見てそう思った。北京から飛行機で3時間の場所にある敦煌は、日本・北京間と同じくらいの距離である。本当に中国は広いのだと改めて実感した。目の前に広がる砂漠のオアシスは、そこが中国であるのかを疑ってしまうくらい、数時間前まで居た北京とは全く異なる光景だった。頂上まで登り、そこから眺めた景色は一生忘れないだろう。莫高窟で見た、細部までこだわって作られた仏像や壁画は1つ1つが繊細な芸術品でその時代を生きていた人々の魂を感じた。私たちを案内してくれたガイドの方は、複雑な歴史的経緯も簡単に分かりやすく説明し、私からの質問にも答えてくださった。特に印象的だったのは涅槃像だ。横たわった仏の後ろで、涙する者や歓喜している者。全体の空間を横から見るとアーチ型になっていて、それが棺を意味していると聞いて、細部まで計算して造られているのだと知り昔の人々の技術やアイデアに驚いた。

また、訪中の 1 番の目的である大学生との交流では非常に貴重で有意義な時間を過ごすことができた。今回は北京の国際関係学院と、西安の西安外国語大学を訪れた。どちらの大学も私たちを歓迎してくださり、学校生活、SNS事情から恋愛観、将来の話など色々なことを語り合った。交流したグループで頤和園に行った際には、建物の歴史や時代背景、描かれている絵について詳細に説明してくれた。

その交流の中で特に、彼らの学ぶことに対する意識の高さに衝撃を受けた。私のパートナーだった楊さんは、翻訳を勉強するために大学院へ行きたいから今年の夏休みは勉強する、と言っていた。楊さんは日本に行ったことが無いと言っていたが、日本語が本当に上手だった。

多くの日本の大学生は、アルバイトやサークルに時間を割きがちである。現地の大学生と実際に交流することを通じて、改めて大学で学ぶ意義について考えさせられた。また彼らの学ぶ姿勢から、私も頑張らなければと良い刺激を受けた。帰国後、国際関係学院からいただいたノートに毎日中国語で日記をつけることにした。4日目に突入したが、自分の力になると信じてこれからも根気強く続けていきたい。

自由時間では、敦煌の夜市へ足を運んだり、タクシーを利用して上海の夜景を見に行った。 どちらも一生忘れられない大切な思い出だ。特に夜市での買い物は印象に残っている。私の 下手な中国語での値段交渉に応じてくれた雑貨屋のおじさんは、何を買うかなかなか決め られず1時間ほど店内を見ていた私たちに飽きずに付き合ってくれた。

この7日間は広くて偉大な中国を実感するとともに、国際関係学院・西安外国語大学の学生の皆さん、ホテルスタッフの方々、3名の素敵なバスガイドさん、夜市での出会いなどたくさんの人のあたたかさに触れた。そして、中国人、日本人ではなく1人の人間として対等に話し、お互いを理解しようとした。今回訪れた4都市は、それぞれ違った魅力があり、文化や街並みがある。中国が築いてきた長年の歴史とそれを今まで守ってきた人々、そして今生きている人々がこれから作っていく中国をもっと知りたいと思った。100人の大学生訪中団が感じたそれぞれの中国を1人でも多くの人に知ってもらいたい。中国で過ごした充実した7日間、新たな発見ばかりの7日間をこれからも多くの人に伝えていきたい。それは、訪中の機会を与え、支えてくださった中国政府、そして日中友好協会の方々への恩返しであり、日中のかけ橋になるための第一歩である。

◆私は、この日中友好大学生訪中団の1週間の訪中を通して学んだことが2つあります。一つ目は、日本人と中国人の違いに気がつくことができ、同時にお互いの国の魅力に気がつけたことです。

日本人の多くは、少しの文化や国民性の違いから、中国人より自分達のほうが優れていると思っている人がいるという印象を受けます。その考えは、日本と中国間の障壁になっていると思います。ですが実際私が中国に行き、現地の大学生や住民と関わる中で、まったくの偽りであることを実感しました。(私が思う両国の印象を「国民性」と一言でくくってしまうのは非常に偏りを感じる所がありますが、ここではそのようにまとめます。)日本人の魅力は、時間通りに物事を進めたり、まじめに取り組むところと楽しむところのメリハリをつけることができるところ、また相手の視線やしぐさなどの非言語的な要素から、相手の気持ちを汲み取ろうとするところであるという風に考えました。そして中国人は日本人と対照的で、時間にルーズで、自我が強く、自己主張をはっきりする印象があります。これは決してネガティブな国民性ではなく、ルーズだからこそ穏やかでゆっくりとした空気が流れていたり、自己主張をはっきりするという点においては、日本人に欠けているところであると

いう風に感じました。また現地の大学生との交流を通じて、中国人は異性のパートナーを大切に想い、日本人は集団意識が強く周りとの調和を大切にしているという点から、他者を大切に想う気持ちは共通していると考えました。この両国の国民性を比較し、違うところがあるから面白く、またこれらの違いはお互いを理解しようとする少しの努力で無くせる障壁であるという風に強く感じました。

二つ目は、自分の知らない世界に一歩踏み出す大切さです。日本は島国であるため、日本 国内にとどまる日本人は多いと思います。でも一歩踏み出せば、自分の知らない世界を見る ことができ、たくさんの経験や知識を得ることができます。それはきっとお金には変えるこ とができない経験です。

私は1年のうちの半分は海外で過ごしています。アルバイトに明け暮れ、資金を稼ぎ、一気に旅行に費やします。旅行ではたくさんの人と出会い、テロに巻き込まれた話や、被災した話など、異国に地に赴かないときくことができない話を聞き、出会いの大切さを実感しました。そんな経験ができるのは、親の資金面の援助や、時間、周りの理解があったことが非常に大きいと思いました。そんな恵まれた環境にいる自分ですが、周りには金銭面で海外にいけなかったり、そもそも海外に興味がなかったりする人が多くて非常に勿体無いと思います。そんな人に、この訪中団の存在を知ってもらいたい、1万円という安さで、世界を見て、異文化に触れるチャンスがあるということを知ってもらいたいと強く思いました。そして中国や世界には知らないことがたくさんあって、おもしろい世界が広がっているということを周りに伝えていくことで友好の架け橋になるのではないかと思いました。

◆こんなに早く時間が経つ7日間を初めて体験した。私は中国について無知であり、特に特 別な感情も抱いていなかった。強いて言うなら、私は免税可能な薬局でアルバイトをしてお り、お客様の98%が中国人であるという環境に置かれているために、中国語は聴き慣れてい る程度であった。爆買いする人、他のお客様を接客しているのに中国語で割り込んで話しか けてくる人、こういったことから、どちらかというといい印象はなかったのかもしれない。 だが、この印象はこの7日間で180度変わった。普段は日本人メンバーとの団体行動であ るが、中国人との交流もあった。大学生や、添乗員さん、ガイドさんだ。大学生は、私達を 心から歓迎してくれているのが感じられたし、それ以上に日本語に興味を持って学んでく れていることに感動した。私は中国語学習経験がないために、言語面で中国人学生に頼り切 ってしまっていた。国際関係学院、西安外国語大学、どちらの学生も日本語能力が高く、良 い影響を受けた。そして今後も継続して連絡を取り合うことができる関係性を作れるので はないかと思える、素敵な時間を過ごすことができた。添乗員さんは、私たちのためにわか りやすく何度も何度も説明してくださった。流暢な日本語であったために、たまに中国人で あることを忘れてしまうこともあった。母国語ではない言語で、かつわかりやすい説明、こ れは日本に対する理解があることはもちろん、母国のことをよく知り、愛していないとでき ない職業であると感じた。今回の訪中の期間、多くの添乗員さん、ガイドさんに出会った。

今までこんな気持ちになったことはないが、私もこんな風に母国を紹介できるような人に なりたいと考えるようになった。今回の訪中は、中国についての理解が深まっただけではな く、自分の将来を考える機会にもなった。また、言語習得にも興味を持ち始めた。私は、韓 国に興味を持っており、独学で韓国語の勉強をしている。私が韓国に興味を持ったきっかけ は、日本大学生訪韓団の一員として韓国に派遣させていただいだことである。当時は全く韓 国に興味を持っておらず、韓国についても無知で、今回の訪中と同じ状況であった。韓国か ら帰ってきたら自分でも驚くほどに韓国語の勉強に精を出すようになっていた。今回もそ うなるに違いないと思う。韓国で感じたよりも多くのギャップ、驚きがあり、中国に対する 抵抗がなくなった。韓国語を勉強している最中であるのに、中国語に手を出すのは無謀かも しれないが、この世の中グローバル世界であること、中国はこれから中心になる国であるこ と、そして何よりまだ 20 歳であること。時間がたくさんあり、比較的自由に使える今を有 効活用してやりたいこと、やらなければならないこと、自分のために必要となるであろうこ とを全てやろうと思う。中国にきて、不可能なことはないと感じた。このような機会を与え てくださった、日中友好協会様、中日友好協会様、常にサポートしてくださった団長はじめ とする諸先生方、添乗員さん、ガイドさん、現地大学生の皆様、そして、訪中団の皆様、特 に 6 班のみんな。本当にありがとうございました。この素敵な 7 日間で感じたことを忘れ ずに一生の財産とし将来に繋げていくことをここに約束します。

◆今回、2018 年度日中友好大学生訪中団第一陣に参加させていただいたことで、私の人生における価値観形成において大きな変化がありました。

現代の日本では、メディアの発達によって膨大な情報があふれており中国に関する報道や特集も少なくありません。それらの中には、「領土問題」や「爆買い中国人のマナーの悪さ」など日本人の中の中国人に対する悪いイメージを作り上げるには十分な情報が揃っていて、正直私自身も中国という国に対して漠然とした嫌悪感を抱いていました。

今回の訪中団を見つけた際改めて中国について考えた時に、自分の目で見ていないもの に対して周りの評価やイメージで決めてしまうのは偏見であると感じ応募を決めました。

実際に参加し、まず驚いたことは中国の方達のおもてなしの凄さでした。「爆買い中国人」の印象が強く、自己中心的で日本とはまた違った考え方を持った人々という偏見を持っていた私にとって、食べきれない料理や温かく接してくださるガイドやホテルマンの方の存在はとても意外でした。実際、ホテルマンの方に交流会のパフォーマンスであるダンスの練習をするため良い場所はないか?と尋ねたところ、「君たちは日本の代表なんだ、好きなところを使っていい。」と言ってくださいました。その他、夜市などでも私たち日本人に何のためらいもなく接してくれる中国の方達を見て、訪中前中国に対して偏見を持っていた自分がとても恥ずかしくなりました。

また、北京の国際関係学院や西安の外国語大学の学生と交流したこともとても良い刺激になりました。彼らと初めて話した時まずその日本語のクオリティの高さに驚きました。ほ

とんどが日本語を勉強してから 1 年ないし 2 年ほどの学生にもかかわらず難しい日本語を使っていて、中国人の勉強に対する貪欲な姿勢を感じました。交流会では就職や大学生活、さらには恋愛観や休日の過ごし方などプライベートな部分までディスカッションしましたが、共通する部分もたくさんあり国や文化は違えど同じ時代に生きる隣国の友人であると強く感じることができました。日本側の大学生も、今回の経験から中国への印象が変わり近いうちに今後もう一度中国へ行くと言っていました。

以上から、今回の訪中は自分を含め多くの仲間たちの人生の中で大変価値のあるものとなったと思います。しかし、それは「大学生」という若い年代だからこそより重要であると考えます。

私たち20歳前後の若者は今後就職活動を迎え、それぞれの道で職に就きます。今後の日本に新たに貢献していく私たちとって、メディアに振り回されず中国という国を目で見て肌で感じた経験は必ず生きると思います。ネットワークの普及により諸外国とのコミュニケーションが容易となった今、他国の文化や考えを互いに尊重し協力していくことがグローバルな現代社会で生きるには必要不可欠だと思います。

今回の訪中では、北京・敦煌・西安・上海の4都市を訪問させていただきましたが「中国」という国はとても広大で他にも多くの地域が存在します。現地の学生たちの中にも「私たちでさえまだ行ったことのない地域がたくさんある。」という人が多く、「中国」を知るためにはもっと多くの時間が必要であると感じました。

以上を踏まえ、今回の訪中だけで中国との関わりを終えてしまうのではなく、もう一度中国へ渡り自分の目でさらに中国への見解を深めるべきだと考えています。具体的には、チベット族の村があったと言われる九寨溝や楽山大仏などが有名な四川省にとても興味があります。

今回の訪中で「自分の目で見て確かめる」ということの重要さを改めて感じることができました。これは、中国に限ったことではなく、それぞれの国についてもマスコミの情報だけで知った気になってしまうのは間違いだと思います。お互いが関心を強め、真の意味で理解を深めていくことがよりよい国際関係を気づく第一歩となると思います。

## ◆『三重に訪れる中国人を増やすために』

### 1. 初論

三重に訪れる中国人を増やすために、私はこの訪中団に三重県から毎年 1 人でも多くのメンバーを輩出することを目標に掲げる。

なぜそのように思ったのかを、このレポートで述べたい。

当レポートは、私が今回の訪中団で印象深かった「経済の発展」「中国人大学生との交流」の2つのトピックについて本論を述べる。その経験を私だけではなく、三重県の大学生に学んでいただくためにどのようなことが考えられるかを検討し結びたい。

## 2. 本論

#### ・経済の発展

北京、上海に初めて訪れて感じたことは、めまぐるしい経済発展だった。

超高層ビル群・ベンツ・フェラーリといった高級外車などをみてそう感じたが、その経済発展に少し違和感を覚えた。その違和感とは、一番は4~5つ星のホテルマンを初め、高級料亭のスタッフの全く英語が通じなかったことがある。外国人観光客を見込んでいるホテルや料亭ならば、多少は通じてもいいのではないかと私は思った。しかし「Where is the toilet?」でさえ通じなかった。国民が周りの環境についていけていないのではないかと感じた体験だった。

また、高層ビル群が乱立し、北京の学生によると「土地が高すぎて、住める人が限られている。空室が多い。」という事情を聞くことが出来た。メディアの報道では、[高層ビルの乱立は GDP の上昇と雇用の創出のため]だとあったが、これは事実らしいと自分で確認できた。中国は、人が「多い」、物が「多い」、建物が「大きい」国であり、「多いことが良い」そして「大きいことが良い」という認識がある国だった。日本は物を持たない「ミニマリズム」主義が台頭しつつあるが、中国は逆の動きだった。

## ・中国人大学生との交流

「名門ハーバード大学に留学するのは、ほとんどが中国人」

私は、師からそう教えられて、訪中した。実際にデータと見てみると、4,000人の留学生のうち中国人は約1,000人、ちなみに日本人は100人。日本の10倍にもおける学生を送り込んでいた。

国際関係学院や西安外国語大学の学生との交流は、刺激的だった。彼らは「死ぬほど勉強した大学受験に比べると、今は勉強していない。」と言っていたが、実際はアルバイトをせずに図書館で机に向かっていることが多いという。日本人大学生の「勉強しない」とは訳が違うほど勉強していた。基本的に三カ国は話すことが出来るし、専門を熱心に勉強している。プレゼンも素晴らしかった。

私も、彼らに恥じないように英語・中国語・専門を研究し、再び中国へ戻ってきたい。

### 2. 結論

中国人観光客には、ぜひ三重県を訪れて欲しい。

なぜなら、中国の早すぎる経済発展は国民を疲弊させていることが垣間見えたので、三重県の素材の味を生かした料理を楽しんで欲しいし、世界遺産の熊野古道などの自然を肌で感じて落ち着いた時間を過ごしてほしい。

また、より多くの大学生に訪中団メンバーとして中国へ訪れて欲しい。観光で訪れるのもいいが、訪中団の大きなメリットは現地の大学生と交流が出来ることだった。この交流は、自分と向き合うきっかけになり、自分の勉強量の足りなさやレベルの違いを感じることが出

過去に三重県の大学生が選抜されたことは過去にあるが回数は少なく、非常にもったいないと感じる。そこで私は、三重日中友好協会や大学と協力して積極的に訪中団の帰国報告や説明会を行っていきたい。

「私は三重県の学生で、三重県にはこういったいいところがたくさんあるんだよ」と訪中の間に話せる学生がいるだけでも、中国人だけではなく、日本人の学生にも三重県をアピールできる。訪中団に参加する三重の学生が増えるだけで、三重の発展に繋がることだろう。

一方、私自身も三重に来てくださる中国人の方々を案内するために、中国語はもちろんのこと、三重県の文化をより一層知る必要があるし、中国側の歴史や文化を学び多様性を学ぶ必要がある。この訪中を機会に、改めて実感した。

◆残すところあと一日。上海雑技団を見ながら訪中団での経験に思いを巡らせていた。中国 というと大きくて、細かいことにとらわれず前へ突き進んでいくイメージを持っていた。一 週間の滞在で、次第に中国に対する感じ方が変わった。

中国で過ごす一日目、故宮博物院を訪れた。午門をくぐると、太和殿の前が広く開けていて、 空まで大きく感じられた。中国に来たという実感が湧いた。

二日目。国際関係学院の学生との交流では、日本語の学部生と一緒に頤和園を巡った。同じ グループだった中国人の学生は、私達が興味津々で質問することに対して丁寧に答えてく れたり、冗談を言って笑わせてくれたりした。頤和園についても、一人で回ったとしたら知 ることの出来なかったような知識をたくさん教えくれた。彼らは、大学で日本語を学び始め るまで、特に日本に興味があった訳ではないそうだ。学ぶと決めたからには着実に力をつけ るという姿勢を私も見習いたい。

三日目。私が最も楽しみにしていた敦煌の莫高窟参観。数多くの窟があって一つ一つ違った 工夫が施されていることに感動した。あれだけ華麗で幾つもの窟を作る、という動機を与え た信仰の力の強さを感じた。

四日目。鳴沙山では、ラクダが通りかかるのを見てシルクロードとして栄えていた時の様子に思いを馳せた。そして、中国が現在目指している一帯一路がどのようなものであるかに触れられた。一歩進んで三歩下がりながらも登った鳴沙山の砂漠の山の上から眺める景色は雄大で美しかった。砂は赤、緑、黄色、黒、白と多彩であった。一見、一色のようでよく見ると様々な色を持っている。実際に行って見てみないと分からないことはたくさんあると改めて感じさせられた。

五日目。西安外国語大学での交流は、一対一で中国の学生とお話した。北京での交流の際に も感じたが、彼らは自分の国のことを理解していて、発信する力があった。時間があっとい う間に経ってしまい、言語の壁がないとこんなに多岐にわたり話を広げられるものなのだ と思った。交流の後に参観した兵馬俑は一つ一つ違う顔をしていて、兵馬俑坑の空間は中国 の多様性を包み込んでいるようだった。

六日目。田子坊でルームメイトと一緒に買った、チャイナドレスを着て雑技団を見に行った。 上海雑技団のパフォーマンスは、観客が限界だと思っている先を行っていた。美しいと感じ たことを徹底的に追求するための信じる力・忍耐力・実現力が詰まっていた。これは中国人 の作り上げた歴史や文化に触れる中で共通して感じた力であった。内側から見た中国は、壮 大でありながらも繊細さを持ち合わせていた。

国を知るためには、その国の構成員である人々を知る事が大切である。一週間で沢山の出会いに恵まれた。中国に訪中団の一員として行かせてもらえたことを心から幸せに思う。中国の堅いイメージを解いてくれたのは中国で出会った学生たちだった。自身の考えをしっかり持っていて、決めたからには遂行するという強い意志を感じ、私も中国語を初めとした学業に一層励もうと思った。彼らの強さに加え、細やかな優しさも感じた。友達のいる中国はもはや他人事ではない。訪中団での経験を通して中国を身近にとらえられるようになった。そして、今回の訪中はスタートである。私なりの方法で中国との「心の」距離を更に縮めていきたい。

◆私が今回の訪中団を終えて、感じた気持ちに最も当てはまるのが百聞は一見に如かずという言葉である。今まで百回に留まらない回数の中国のモノ・コト・ヒトに日本国内で触れてきて、中国のことは十分知ったような気になっていたが、それはただのイメージであったと気付かされた。

私は訪中前、中国が嫌いだった。日本で暮らして、報道で中国に関するネガティブな情報 ばかり見させられていたたら誰でもそうなってしまうと今では理解している。しかし、よく 考えてみるとただ何となく中国が嫌なだけであったのである。そんな自分の目で見てもい ないものをダメだと決めつけてしまう自分が嫌で、「どうせ嫌うなら、行ってから嫌おう」 と思って参加したのが私にとっての訪中団であった。

実際に行ってみると中国はイメージと全く違うところだった。まず景観について。私は初めて東南アジア諸国に行ったときにその日本との街並みの違いに衝撃を受けたが、中国の街並みは日本のものとほぼ同じだろうと思っていた私には、日本と比べ物にならない大規模の建物が並ぶだけでなく故宮のような歴史的な建造物もある景観は大きな衝撃であった。次に人であるがこれもイメージと違った。訪中前は中国人はがめつく、自己中心的な考えをしている人が多いと思っていた。しかし、実際には日本と変わらずに困った人を助けてくれる文化がある、ホスピタリティのある国だということを実感した。私が友人と自由行動をしているときに、ホテルに帰るまでの道が分からなくなって迷子になってしまうということがあったのだが、そのときに道を歩いていた中国人に話しかけて助けを求めると英語は通じないながらも伝わるまで一生懸命に道を教えてくれた。中国人へのイメージが変わった瞬間であった。

私は訪中団を終えて2つのことに気が付いた。日本文化は魅力にあふれているということと、訪中団は「きっかけ」であるということだ。北京、西安で現地大学生と交流して、そこで話した人たちが日本文化にかなり精通していることに驚いた。そのことからこれほどまでに世界の人々を魅了する日本文化は魅力にあふれているということを実感した。中国に行って日本文化の偉大さに気が付くとは思わなかったが、これをきっかけに自国の文化にも誇りを持っていきたい。

次に気づいたことが訪中団は「きっかけ」であるということである。私は訪中団参加前は 訪中団というのは中国を勉強する機会ととらえていた。実際に中国の歴史や文化について 勉強できた機会にはなったが、得られたものはそれだけではなかった。中国の文化・歴史に ついてより興味がわき、帰国してから勉強するきっかけになった。周りにいる中国人留学生 にも興味がわいて、話しかけるようになり訪中の経験を話すことで仲が深まるきっかけに もなった。訪中団は終了したが、訪中団で得た学びはこれからも私の世界をどんどん広げて いくだろう。

今回の訪中団に参加し、学び、新しい友人たちができたことは本当に良かった。訪中団を 企画していただいた方々には本当に感謝している。この恩返しをするために、今回の学びを 活かして、日中のこれからの関係づくりで活躍することで還元していきたい。

### ◆私が今回の訪中で得た学びを一言で表すと「百聞は一見に如かず」だ。

訪中団に参加する前、私は事前学習として様々な方法で学びを得ていた。図書館で中国に関する本を大量に借り、そこで得た知識をもとに興味がある分野についてインターネットで調べたりした。また、中国にルーツがある友人から話を聞き、中国についてのイメージを膨らませていた。しかし、この予想にはほとんど意味がないと今回の訪中で気づかされた。それは予想をはるかに超える魅力が中国にはたくさんあるからだ。

故宮や莫高窟、兵馬俑では中国の数千年の歴史に思いを馳せ、世界史で学んだ知識を自分の目に焼き付けて確認することができた。どれも、日本以上に古くからのものが残っており、歴史のスケールの大きさを改めて感じた。また、頤和園や鳴沙山では写真ではわからない壮大さや広大さを自分の目で見て、実際に歩くことで肌で感じることができた。

また、中国の皆さんのやさしさにもとても触れることができた旅だったと思う。正直、私はこれまで中国人に対しての印象がそこまでよくなかった。それは、メディアの報道を通して、爆買いや反日デモなどネガティブな側面に触れる機会が多く、身近に中国人もいないため、偏った印象が形成されていた。しかし、実際にあった中国の方はそうではなかった。北京の国際関係学院の学生は、ディスカッションの時間に、積極的に日本から来た私たちに興味を持って、様々な話題を中心となって進めてくれた。頤和園では、無知な私たちに丁寧にガイドをしてくれ、行きたいところを言うと嫌な顔一つせずに連れて行ってくれた。西安の西安外国語大学の学生は、交流の時間が短いにもかかわらず、積極的に話しかけてくれ、パフォーマンスをする際には応援をしてくれた。そして、昼食の際には私が麺を食べたいとい

うと学食で麺を注文してくれ、私が食べている途中にスイカを買ってきてくれるなど、素晴らしい気づかいをしてもらった。数年前、日本ではおもてなしという言葉が流行したが今回 の訪中では中国の皆さんからおもてなしの温かさを改めて教えてもらったような気がする。

日本と中国の間には様々な国際関係が横たわっている。しかし、それはメディアなどを通した思い込みによる誤解が大きな原因ではないかと考える。既存のステレオタイプのイメージではなく、自分の目で見て、肌で感じて、直に話して交流する。そして、お互いのことをよく知り、一人でも多くの親日家や親中家を作ることが平和な友好関係を築く第一歩ではないか。中国の魅力を知った私にはそれを伝えていく責任がある。私は政治家ではないため、できることは少ないかもしれないが今回の訪中の話を家族や友人など身近な大事な人に伝えていくことから始めていきたい。今回の日中交流と日日交流をその場限りで終わらせるのではなく、これからも末永く関係性を維持していきたい。それが長い目で見ると日中友好に少しでも貢献できるのではないか。私はこれからも中国に行きたい、そして中国の魅力をさらに知り、中国のことをもっと好きになりたいと思う。

◆今回、私が訪中団に参加して感じたこと、それは中国の大きさです。このような言い方をすれば、行かなくても分かると言われるかもしれません。しかし、私は中国のあらゆる「大きさ」を感じることができました。

1つはやはり中国は面積が大きいということです。北京の故宮、頤和園、敦煌の莫高窟、鳴沙山、西安の兵馬俑を見たとき、その壮大さに圧倒されました。特に莫高窟の大仏を見たときの驚きは忘れられません。私の身長よりも足は大きく、頭を見るためには高く見上げないといけないのです。このような遺跡や名所が中国にはまだまだたくさんあると思うと、中国は果てしなく大きな国だと感じます。

2つ目は文化のスケールの大きさです。中国には 2000 年の歴史があります。先程述べた 今回の行程で訪れた名所は数十年前に建設されたなどと言うものではなく、何千年或いは 何百年前から存在し、時には世界各国と関わりを持ちながら、長い年月をかけて中国の人々 に守られたものです。このような名所をガイドの詳しい説明とともに視察できたことはと ても貴重であり、興味をもつきっかけにもなりました。特に兵馬俑のガイドの方の説明はと ても分かりやすく、もっと詳しく話を聞きたいと思いました。若者の殉死を撤廃する代わり に1人ずつ顔も体格も真似た埴輪を作った話や、その埴輪の作り方の話が印象的です。

3つ目は中国の人々の心の大きさです。私は現在、大学で中国語を学んでいます。今回の行程の1つである現地大学生との交流は私が応募を決めた原因の1つでもあり、この機会に自分の中国語のレベルを試してみようと思っていましたが、やはりネイティブスピーカーとの会話はとても難しく、何度も心が折れそうになりました。しかし、私が今回交流した中国の方々はいつも私の中国語を理解しようと必死に聞いてくれたり、間違っているところを訂正してくれたりしました。誰一人としてコミュニケーションを諦める人はいませんでした。「中国人の話し方は早口で怒っているみたいだ」という印象を持つ日本人も多いと

思います。私もそのうちの1人でした。しかし、今回の交流を通して、中国人全員が同じような話し方をするわけではないということが分かりました。私のパートナーは人見知りの性格を持っていましたが、私の質問にとても優しく、丁寧に答えてくれました。

私は今回の訪中で上記のように中国の様々な面の「大きさ」を感じました。訪中団では 視察と交流ができます。もちろんこれは魅力ではありますが、訪中団の本当の魅力は、自分 の中国への印象やその変化を同世代の日本人大学生とすぐに議論できるところにあると思 います。もちろん、団員それぞれは異なった意見を持っています。それを聞いて自分の視野 を更に広げることができるのは、中々経験できないことです。私の班の中には中国へ来るこ とが初めての班員や、反対に中国人との交流を既にもっている班員もいます。様々な価値観 をもつ友人とともに中国について学ぶことは必ず私のこれからの勉強に役立つと確信して います。

このように今回の訪中は私に多くの発見、そして感動を与えました。この1週間を私は 絶対に忘れません。このような機会を与えてくださった日中友好協会、中日友好協会をはじ めとする関わった全ての方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。

◆私は友達や親戚に中国人がおり、また私が住む静岡市と大学のある浜松市に中国人が多く住んでおり、関わる機会が多くあることから大学では英語・ポルトガル語に加え中国語を履修しています。中国人と関わる中で、日本人との違いを生み出す文化に興味を持ち学び、実際に中国を訪れ文化交流をしたいと思い、今回参加させていただきました。

それまで私が中国に対して持っていた印象を一言にまとめると"危険"です。中国に関して日本で放送されるニュースでは、衝撃的なものが取り上げられることが多いと思います。私は小学生のころに、自分の子供が喧嘩した相手の子供を親が蹴る場面や、激しい交通事故の映像をニュースで見たことから、中国の町は危険で、中国人は短気で暴力的という印象を持っていました。大学で学び、地域の中国人と関わる中でそのような印象はなくなりましたが、今回の大学生訪中団で中国に対する私の印象は大きく変わりました。

大学生訪中団としての一週間の活動の中で、私たちが深く交流した中国人は国際関係学院と西安外国語大学の学生さんでした。私が印象に残っているのは、西安外国語大学の兪露さんとの意見交換です。勉強、文化をはじめ、私たちの間の日常生活における違いについて話し、それに対する考えを述べ合いました。私が最も驚いたのは兪露さんの勉強に対する姿勢です。兪露さんは日本語の勉強に力を入れているため、アルバイトはせず、一年勉強して日本語検定一級を取得しました。また、西安外国語大学ではすべての学生がキャンパス内の寮で6人部屋で生活しています。私は同じ大学生として、生活の違いや勉強への意識の高さに驚きました。そしてこれらの驚きは中国人学生への尊敬の気持ちに変わりました。兪露さんは、日本の文化やアニメに興味があり日本語を勉強し始めましたが、中には試験の結果、日本語学科しか入れなかったという理由で日本語を勉強し始めた学生さんもいました。日本語を始めた理由は様々ですが、どの学生さんも日本語を問題なく話せ、実力があるため、

その努力と結果に結びつける力が中国人学生のすごさだと思い、尊敬しました。

以上のように中国の大学生との交流を経て、中国人学生は本当に尊敬できる存在であると同時に、北京、敦煌、西安、上海で世界遺産やその町の様子を見たことで、面積が広いため、地域によって気候や文化が異なり、その違いが中国の魅力にもなっていると思いました。私が関わった中国人は主に大学生で、訪れた場所は広い中国の中のわずか四ヶ所にすぎません。日本で報道される中国のニュースは、事実であってもそれはほんの一部にしかすぎないのであって、悪いニュースから、中国人はこういう性格だというように、中国人をみなひとくくりに考え、悪いイメージを持つのも間違っていると今回の訪中団を経験し思いました。

今回の訪中団によりわたしの中国への興味はさらに強くなり、これから中国の言語だけでなく、文化や歴史もより学んでいきたいと思うようになりました。そして中国人学生が日本語を流暢に話せるように私も勉強する時間を増やし、中国語を話せるようになり、今度中国に行った時には中国語でコミュニケーションをとり、意見交換をしたいと思います。そして、隣国である中国と関わるにおいて、重要だと思ったのは、互いに尊敬しあうことではないかと思いました。私が今回の大学生訪中団で同じ大学生である彼らを尊敬したように、尊敬できる相手であることが大事だと私は考えます。また、相手に対するイメージを関わることなく持つべきではなく、他人の創造したイメージにとらわれずに自分自身が交流し、感じることで自分のイメージを創造していきたいと思います。

◆「中国」という国名を聞いて最初にどんなことを思い浮かべるだろうか。訪中前の私にとってそれは「あまり良い印象のない国」であった。テレビや新聞、インターネットなどのメディアを通じて流れてくる中国という国についての情報は、政治問題や互いの国に対する国民感情など、マイナスのベクトルが働いているものが多く、特に、インターネット上では「中国」というだけで否応なしにバッシングの対象になることもある。ネット上のバッシングなどは一部の過激な意見を持った人がおこなっているということは明らかなのだが、それでもその意見に多少の影響を受けてしまう人は少なくないだろう。訪中前の私もそのうちの1人であったし、だからこそ中国という国は私にとって「あまり良い印象のない国」だったのである。

しかし、訪中を始めてからその印象は大きく変わった。というより、印象など考える必要のないくらいに中国は素晴らしい見所のある国であったし、大学訪問で出会った現地の大学生は良い意味で「普通の」「私たち日本人と変わらない」同年代の学生だった。

北京、敦煌、西安、上海。各地のガイドさん全てが「私たちの街には今回訪れる場所以外にも魅力ある名所がたくさんある」と口をそろえるほどに、今回訪れた4つの都市には、魅力的で歴史のある、多くの名所があった。日本の何倍もの国土を持つ中国の魅力は、とてもじゃないが一週間という短い期間では味わいきれないのだと実感した。今回訪問した場所はもちろん、バスの窓から街を眺めているだけでも、歴史を感じる寺院が点在していたり、中

国の人々の生活が垣間見られるような小さな商店の並ぶ通りがあったりと、バスを降りて街を散策したくなる場面が多々あった。このような魅力溢れる中国の姿が、メディアから受ける印象のせいで、多くの日本人に届かないのは何ともったいないことだろうかと感じた。現地の大学生との交流では、恋愛の話や家族の話、SNS や流行のドラマ・映画の話で盛り上がり、メディアやインターネットから受け取る二次情報の無意味さを実感した。メディアやインターネットでは「両国の国民感情」や「反日」など、互いの対立を感じさせるような文言がよく並ぶが、実際に交流するときには私たちは対立する日本人と中国人、ではなく普通の大学生、だった。文化の違いに驚くことはあれど、対立などすることはなく、互いに「知りたい」という気持ちで溢れていた。時に政治的な問題がおこってしまう日本と中国だが、個人レベルの交流にそんなことを持ち込むのはナンセンスで、ただひとりの人として、友人として互いを知ろうとすることが大切なのだと実感した。

この訪中をとおして、私は中国の素晴らしい魅力に気づくことが出来た。文化の違いはあるけれども、中国人も日本人と同じ普通の人々なのだという当たり前のことに気づくことが出来た。しかし、そのことに気付いていない訪中前の私のような日本人は数多くいる。多くの日本人の中にある「中国」という国には、メディアからの情報という薄いベールがかかっており、本当の中国の姿を見ることが出来ないようになってしまっている。私は「中国に行ったことのある日本人」として、ぜひ私の見た中国の姿を伝えていきたいと感じる。メディアを通してではなく、生の声として私の見た中国を周囲に伝えていくことが、今後の私の役目ではないだろうか。

# ◆中国は魅力的な国だ。訪中した今は自信をもって言うことができる。

訪中してまず驚いたのは、都市が発展しているしていることだ。中国は発展途上国だが、実際見てみるととても発達していて、さらに至る所で工事が進んでおり、今後さらに発展する様子であった。また夜でも人が沢山歩いていて、人口 13 憶の活気を感じた。大気汚染のニュースも聞いていたが、北京では一切感じることなく過ごすことができた。またシェア自転車システムが発達し、あらゆる所に自転車が沢山あって、移動したい人のニーズを満たす良い方法だと思った。またスーパーで買い物をするとき、私たち旅行者は紙幣で支払いしたが、地元の人はスマホを差し出していて、キャッシュレス化が進んでることを実感した。シェア自転車やキャッシュレス化は日本でも進むのだろうか。敦煌に行く飛行機からの景色は、一面砂漠で中国の広大さを感じると同時に、この中に都市があることの神秘さを感じた。世界遺産の莫高窟や、兵馬俑を観光し、当時の技術の高さに感銘を受けた。上海の夜景はとても美しく、中国最大の経済と貿易の中心地であることを実感した。

今回一番楽しみにしていた現地の学生との交流はとても充実していて、中国人だから、日本人だからということはなく、お互い同世代として楽しい時間を過ごすことができた。北京にある国際関係学院では、郑さん、穆さんと交流をし、話題は恋愛から勉強まで多岐に亘った。私たちの恋愛観は双方であまり違いはなく、勉強に関しては中国の学生の方が沢山してお

り、それは日本の学生は勉強以外のバイトなどで忙しいことや、中国の学生は寮生活であることなど環境の違いもあるが、私たちは見習うべきだと思った。また日本のアニメやドラマなどを見ている学生が多く、共通の話題で盛り上がることができた。西安にある西安外国語大学では、吕さんと親密な交流ができた。SNSの話になり、中国ではTwitterやFacebookなどが規制されているが、その代わりに微博があるということなので、私も見てみたいと思った。彼は来月から日本に実習に来るとのことで、日本でまた会う約束をした。訪中を通じて、中国の方の優しさに沢山触れることができた。訪中前、どうして中国に対する日本人の負の印象は強いのか疑問だったが、それは今の中国を知らない人たちの意見だと思った。訪れた私たちが思うこと、それはとても魅力的で、お互い手を携えて発展していく可能性があるということだ。私たちは、根拠もないのに中国のことを悪く言う人たちに今の中国を伝えるのと同時に、若者同士、新たな絆を作っていくことが必要だと思った。西安でホテルの警備員さんと話す機会があった。彼は普通話でゆっくり話してくれたので、中国語で話すことができた。そのときに、君たちは日本の代表だからと厚くもてなしてくれて、

に同様のことができるだろうか。寛容な心をもって接することができる人間になりたい。 訪中を終えて、私は将来中国に関わる仕事をしたいと思うようになった。ささやかであって も、中国と日本の友好関係を維持し、発展できるように尽力したいと思う。まだ具体的なこ とは決まっていないが、これからどのように関わっていけばよいかを模索していきたい。 今回、日中平和友好条約締結 40 周年の節目に中国政府の多大なご支援を受け、訪中できた

とても嬉しかったのと同時に、寛容な心に尊敬の念を抱いた。私たちは日本に来た中国の方

ことを大変感謝しております。今後も沢山の学生に中国を実感できる機会を与えて頂けることを願っております。貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

◆僕は今まで中国おろか海外にすら行ったことがなかったので、行く前は初海外でとても ウキウキしていた。中国から帰ってきて今思うことは、初海外を中国で飾れて本当によかったなと思った。もとから中国という国には興味があり、好きな国であったが、行く前は少し、実際に訪問して嫌な思いをしたり、嫌な面を見てしまったりして、中国のことが嫌いになったらどうしようと思っていたが、全くそのようなことはなく、むしろもっともっと好きになって、また行きたいと心の底から思った。こういった経験は絶対に現地へ行かないとわからなかったと思うので、僕はまだ中国へ行ったことのない人、中国という国がどういった国かまだわかってない人にも是非行ってほしいと思った。メディアの報道や日本国内で見かける、たくさん物を購入していく中国人観光客などの影響で、正直に言って、まだ日本人の中には中国という国や中国人に対していいイメージを持っていない人が多いと思う。なので僕はこの経験を活かして、そういった人たちにも中国に対して、もっといい印象を持ってもらおうと思った。僕が中国に行って実際に感じたいいことは、夜市での買い物の際に品物を見ている時に丁寧に接客をしてくれたり、どれを買うか迷っているときには、僕が「还没决定(まだ決められません)」と言ったら、店員さんは「慢慢看・(ゆっくり見ていってね)」と

言って頂いたりして、中国人の暖かさを生で感じられてとてもうれしかった。

現地大学生との交流については、僕たちの班は西安の大学でソーラン節を踊ったが、その際に班の子が「日本」と書かれた扇子を全員分買ってきてくれて、実際踊るときに広げたり、僕は中国、日本両国の国旗のステッカーを作ってきたので、みんなの頬に貼ってもらったりしてやりたいことをすべてやり尽くして交流ができたので、非常に満足のいくものになった。もちろん西安の大学生とも仲良くなることができてとてもよかった。ホテルのご飯もおいしくてよかったが、僕は西安の大学で実際の大学食堂で現地大学生と一緒にそこの大学のご飯を食べることができたのがとてもうれしくて、ホテルのご飯よりも印象に残った。ここの大学生は毎日ここの食堂でこのようなご飯を食べていると言っていたので、僕はここの大学生と同じことができてとてもうれしかった。

訪中はもう終わってしまったが、僕の中国に対していい印象をもってもらうといった活動はまだ始まったばかりだと思うので、まずは京都産業大学から、次に大学関係以外の身近な人々にも中国の魅了を伝えていけたらいいなと思った。今回一緒に中国に訪れた大学生の中にもし僕と同じ考えをもっている人がいたら、是非とも一緒に中国にいい印象をもってもらうための活動を日本全国を通して盛り上げて行きたいと思った。具体的にはどういったことかというと、例えば、自主的に講演会を開き、人をたくさん呼んで今回の中国訪問についての自分たちが感じたことについてお話をするであったりとか、講演会といった形が堅苦しいのであれば、中国語・日本語教えあい教室を開いたりだとか、中国の雑貨、日本の雑貨をお互い並べてフリーマーケットを開くなどといったことを思いついたので、実現できたらいいなと思った。こういった活動をする際は是非とも今回交流した中国の大学生をお招きしてみんなで楽しめたらいいなと思った。そして、僕はこの活動はただ単に「中国っていい国なんですよ」と伝えるだけにとどまらず、みんなにも是非行ってほしいため、何かみんなが中国へ行きやすくなるような工夫ができたらいいなと思った。例えば、中国に友達を最初から作っておいて、その人に会いにいき、中国を訪れた際にはその人と一緒に中国を回って交流を深めていくといったりするのがいいのではないかと思った。

全国の大学生 100 人に選ばれ日本の大学生の代表として中国へ行ったことはとても誇りに 思う。また京都産業大学の中でもたった一人だったので、僕はこの経験を活かして大学内の 日本・中国両国をつなぐ架け橋の存在になっていきたいと思った。

◆私と中国を考えた時、この訪中団に参加する前はほとんど関わりはなく、高校と大学に中国の友達がいたことしかありませんでした。大学で訪中団に参加が決まってから初めて中国語を勉強したので、なかなか思った通りに会話できないだろうことは予想できてました。以上のような私でも、中国で人とどう関わっていくか考えながらこの訪中を過ごして来ました。その中のいくつかの気づきを述べたいと思います。

北京国際関係学院や西安外国語大学では日本語を勉強されてる学生との交流で何を話そうか考えていて中国でもアニメが人気なのは知っていたのでそれを使おうと考えてました。

日本のアニメ「ポプテピピック」のネタをお互い知っていてモノマネして楽しんだり、コンビニ限定のおそ松さんのキーホルダーお土産に渡して喜んでくれました。敦煌ではナイトマーケットで歩いているところドライフルーツを試食させてくれた方がいて、そのお礼にと次の日持って来ていたのど飴の龍角散をその家族に渡してみました。日本に帰って気づきましたが、乾燥する敦煌で日本ののど飴を渡す意義は大きかったと感じてます。言語が違うにも関わらず共感できる。これを通して私は具体的なモノと表現を知ることができました。それらを確かなものにするには事前にネットや在日中国人と様々なメディアを使って相手のニーズや背景を調べておくことが大事です。失敗した事例もあって在日中国人に聞いて参考にした便座カバーをプレゼントしましたが現地にはすでに浸透していると言われました。交流が成功でも失敗でも、どちらも次の成功に繋がる反省改善が大事で、また成功の数を増やすことがよりよい関係になるのだと思いました。

中国人と交流する上で、言語が異なり互いにわからないことがほとんどでした。なので相手に敬意を持つことを頭に入れていました。敦煌などは北京と比べて同じ中国でも場所によって人柄や文化が様々異なりました。そのような場所では相手に合わす、その中で自分のして欲しいとこを頼むようにしてました。当たり前ではあることですが、訪中を通じて改めて感じました。また相手に合わすことできる自分のスキルが小さかったです。今後はそれを改善できるよう中国語を学ぶことが課題に思います。その上で自動翻訳アプリなど、どんな手段を使ってでも思いを伝えることができる自分でありたいと帰国して思いました。

中国人だけに関わらず同じ旅を共にした班の仲間、団の仲間との交流も貴重でした。ルームメイトの中国に対する熱い思い、知り合った他班の人、班のメンバー、班長小西さんの人柄、各都市の夜市で共にした親友などみんな素晴らしい個性を必ず持っていて、彼らと中国に行けたことは本当に良かったと思います。留学が少ない日本人の大学で、外国に行くような人と中国で、経済、社会主義、政治、挨拶などの言葉、二国間の違いとたくさん話すことができました。 彼らと出会って、彼らの友達と出会ってと連鎖して出会いが起こることもありました。上海に住んでる訪中大学生とそのうな出会いをして一緒に自転車レンタルを体験したり、バスに乗ったり、サービスが素晴らしいお手頃価格の火鍋屋さんに連れてってもらったりしました。新しい出会いが新しい経験になることを実感させられた数時間になりました。

中国とは。となったとき、以上の僕の経験から充分説明できますが、日本のことになればどうなるかと考えると少し詰まると個人的に思います。もし中国人が日本に来たときは、日本とは。を感じて貰えるおもてなしや交流、協力が自分には必要だと責任を感じました。今日本と中国の間では領土問題や経済の利潤の取り合い、歴史の言い分の対立、マナーが悪いなど色々取り上げられます。問題が大きすぎるからといってそれらを見逃したり、会っても無いのに彼らを非難したりしてはいかないと思います。先ほど述べた中国とは。や日本とは。を互いに理解し合った上で、または互いが母国とは何かを知った上で、身近な中国人の友達や知り合いと国について語ることが、今の自分にできることと思いました。将来はこの訪中

で見て聞いて味わい学んだ知識をきっかけに少しずつ話せるフィールドを広げて日本に貢献したいです。

◆中国、中華人民共和国という国について、人口が多いこと、面積が広いこと、歴史が長いことは当然のこととして理解していたものの、実際にその広大さや深さを目にしてみると、頭だけの理解はあまり意味をなさないのだということを突き付けられました。私は一昨年上海に2週間の短期留学に行ったので、日本で報道されているような中国に対する偏見などはそのときほとんどなくなったのですが、今回訪れた北京・敦煌・西安は初めてで、中国の歴史を目の当たりにし、さらに理解が深まりました。

この7日間で多くの遺跡を見学しましたが、北京の故宮博物院、頤和園、敦煌の莫高窟、西安の兵馬俑に永寧門など、そのどれもが想像を超えるほど壮大であり、かつそれらはみな恐ろしく長い時を越えてきたものであるということに衝撃を受けました。特に故宮博物院は、見学した時間帯からか観光客も少なめで、その雄大さを直に感じ、当時の王朝の権威の強大さも理解できたように思えました。溥儀が実際に座っていたという椅子も見ることができ、中国の歴史の一部を垣間見ることができたような気がして、故宮博物院ではただひたすらその悠久の歴史に思いをはせていました。また、敦煌莫高窟の壁画や仏像には、修復がなされているものもあるけれど、それが作られた当時のまま残されているものも少なくはなく、壁画に残る千年前の鮮やかな赤色は今でも記憶に残っています。

人口の多さについては、北京や西安、上海などの都市部の高層ビルの多さや、ガイドさんの話から、なんとなく、やっぱり多いんだなあ、という印象を受けたくらいです。観光地は人が多いところがほとんどですが、外国人観光客も多かったので、中国人の人口の多さについては、目で見て感じるものはあまりなかったように思います。私はしっかり睡眠をとりたいタイプなので、ホテルに戻ってからの自由時間でもすぐに寝てしまっていたのですが、その時間で街に繰り出したりしていれば、もっと強く感じられたかもしれません。

そして、北京と西安での中国人学生との交流会では、何か言い知れぬ危機感のようなものを感じました。私は現在、文学部で中国の文学と文化について勉強しているのですが、1回生の頃から中国語を勉強し始めて、今年で3年目になります。それでもまだ拙い日常会話ができるかどうかという程度の中国語力です。ところが、私が交流した中国の学生は、北京でも西安でも今年で日本語を始めて2年目らしく、それなのにかなり流暢に日本語を話していました。聞いてみると、授業数も勉強時間も、日本の大学よりも相当多いようです。私は語学系の学部というわけではないにしても、3年目でこの程度というのはいかがなものかと思い、日本に帰ったら勉強方法や時間を見直そうと強く思いました。このところ勉強に対するモチベーションが下がっていたので、毎日一生懸命勉強することが当たり前だと言う学生と交流できて、自分のやる気を高められて本当によかったです。趣味が同じだったので、帰国してからもWeChatを使ってやり取りしています。今はまだほとんど日本語で話していますが、卒業までに中国語でのやり取りができるように頑張りたいです。また、あまり交流

してこなかった、自分の大学の中国人留学生とも交流してみたくなりました。

はじめに、今回の訪中前から偏見はほとんどなくなっていたと書きましたが、北京の空気、 具体的に言うと PM2.5 についてだけは不安でした。教授にも、中国人の友人にも、気を付 けるよう言われていましたが、とてもきれいな青空を見ることができました。

今回の訪中を通して、一番強く思ったのは、自分はもっと中国語の学習に力を入れなければならない、ということです。それには、中国人学生との交流で刺激を受けたという理由のほかに、また中国を訪れてみたいと思ったという理由があります。今回、様々な場所を訪れましたが、スケジュールの問題もあり、じっくり見られなかった遺跡、行けなかった場所もあります。私は、帰りの飛行機の中で、それらの遺跡をもう一度みたいという思いと、中国の違う都市にも行ってみたいという気持ちがわいてくるのを感じていました。今回はついていくだけでしたが、自分で行くとなると、やはり言葉が話せるということは重要なので、より理解を深めるためにも、しっかり勉強しようと思います。

◆一週間の中国での生活を終え数日が立ちました。中国での滞在一週間、毎日新しいもの、人との出会いでとても充実した生活でした。まず初めに訪れた都市は北京です。一日目はついてすぐとても高級な中国料理のレストランで昼食をとりました。その後ラストエンペラーの舞台となった故宮を見学しました。初日から中国の歴史の奥深さ、またスケールの大きさに圧倒されました。二日目は国際関係学院の生徒と交流がありました。ここの学生は大変勉強熱心で日本語も流暢な方が多かったので、同じ言語を学ぶものとして大変刺激を受け自分ももっとがんばろうという気持ちになりました。また、ある一人の学生と趣味の話でとても意気投合し、私の初めての中国人の友達となりました。

三日目はとても楽しみにしていた砂漠の町敦煌を訪れました。北京とは打って変わって同じ中国なのかと疑うほど全く異なる景色がそこには広がっており、中国の広大さを感じました。このような砂漠の町を間近で見たのは人生で初めてのことでした。この町でまず初めに訪れたのが莫高窟です。ガイドさんの詳しい説明と共にいくつかの窟を見学しました。ガイドさんは歴史にとても詳しくの日本の歴史とも関連させて説明してくれたのがとても印象に残っています。一つ一つの壁画がとても細かくてすべてのものがきれいに保存されているわけではなかったけれど、とても感動しました。次の日には鳴沙山、月牙泉というまるで西遊記に出てきそうな砂山とオアシスを訪れました。普段見ることのない壮大な自然を目の当たりにし、すがすがしい気持ちになりました。この町では実際に中国という国の多様性を感じることができました。

次に訪れたのが昔の中国の都西安です。北京ととても似た雰囲気の町でしたが、ところどころにヨーロピアンスタイルの建物を見つけました。ヨーロッパによる占領の名残だとガイドの人から聞きました。西安では再び同じ年頃の学生と交流する機会がありました。ここでも中国の学生の勉強熱心さに驚きました。一人の学生とペアになり、勉強のこと、恋愛のこと、文化のことなどたくさんのことを話し、意外にも共通点が多いことに気づきました。

中国の滞在最終日には上海を訪れました。この町は現在の中国の経済の中心地であり、多くの高層ビルがみられました。この町では田子坊で買い物をしたあと、歓送会を開いていただきました。

今回中国を訪れる前までは中国に対して、メディアの情報、中国人観光客の様子だけを見て、中国に対して悪いイメージを持っていました。しかし、実際に中国人の学生と交流してみて、私たちの間にはとても共通点が多いということに気づきました。アメリカやヨーロッパの国々と比べて中国と日本は文化も似ておりお互いを理解しやすいと思うのになぜこんなにも日本人の対日感情が悪いのか不思議に感じました。マスコミの影響力の強さを改めて実感し、今回の経験から中国に限らずほかの国々に対してもマスコミの報道を頭から信じるのではなく、自分で考えるようにしていきたいと思いました。